

云ふ人があるかも知れない。この反對論は的外れだ。事實、幾回となく、硬い土地よりも更に困難な條件に於て、孤立無援の埋葬虫が、私の技巧と根限り闘ひ、しかもたゞの一度たりとも、彼等はその仕事場を去つて、助手を求めに行くと云ふ事をしなかつた事實を、私は再三、再四見て居る。尤も、協力者が屢々不意に現れるのは事實だが、それは嗅覺によつて嗅ぎ知つたので、最初の占領者によつて告げ知らされたのではない。それ等は、偶然の働き手であつて、決して徴發して來た者ではない。最初の占領者は、之を文句なしに迎へるが、又感謝もしない。之を招集したのではなくて、たゞ寛容して居るだけの事なのだ。

私が虫小舎を入れて置いた硝子張りの室の中で、私はこの種の偶然の協力者の一疋の現状を突とめる事が出來た。夜中其處を通りかゝり、死肉の香に誘はれて、彼の仲間のたゞ一疋とても未だ曾て、自ら進んで入つた事のないこの場所へ入つたのだつた。私が彼を不意に見つけた時、彼は鐘形金網の圓屋根の上に居た。若し金網が、彼を妨げなかつたならば、彼はたゞちに、他の連中と一緒になつて仕事に取りかゝつた事であらう。私の捕へてあつた連中が、彼を呼び迎へたと云ふのだらうか。斷然そんな事はない。彼は土籠の嗅ひに誘はれて驅つけたまでの話で、他人の努力などには一向無頓着なのだ。これが、或る人々が、親切な助力を與へるものとして、我々に誇稱する所の虫の實體だ。私はある人々が想像して居る彼等の大手柄に就いては、大玉押コガネの手柄に就いて、他の場所で云つた

所の事を繰返へして云はう。それは子供らしいお話で、「驢馬の皮」(譯者註、ペローのお伽噺の一つ)と一緒に、お目出度い連中の慰みに、何處かへ片着けて置けばよいのだ。

屍體を他に移さねばならぬやうな、堅い土地だけが、埋葬虫の日常出會ふ唯一の困難と云ふわけではない。屢々、そしてそれは多分最も屢々であらうが、土地には芝草が生えて居り、殊に茅草が生えて居て、その執拗な細繩は、地下に脱出し難い網を張つて居る。その間隙を掘る事は不可能ではないが屍體を引摺り込むに至つては全く別の仕事だ。網目が餘りに細かくて、到底その間を通り抜ける事は出來ない。墓掘人夫はこんな障害物に出會つては何うする事も出來ないであらうか。しかしかうした障害物は極めて頻繁であつてみれば、そんな筈は有り得ないであらう。

自己特有の工業を、行ふに當り日常會ひつけて居る種々の障害物に遭遇した場合、動物は何時もそれ相應の手段を豫め備へて居る。若しさうでなかつたならば、彼の職業をやつて行く事は到底出來ないであらう。必要の手段、能力、無くして達せられる目的は一つもない。埋葬虫は、土工の技術の他に、確かに何か他の技術を持つて居るに違ひない。穴を掘り下げる邪魔をする大綱や、根や、匍蔓や、細かい根莖などを切斷する術を持つて居るに違ひない。シャベルと鶴嘴の仕事に加ふるに、木鋏の仕事をも以つてして居るに違ひない。それ等の事はすべて、極めて論理的に、極めて明瞭に豫想される。しかし、ともかくも、最善の證人たる實驗に徴して見る事としよう。

私は臺所から、五徳を一つ借りて来る。その鐵の足が、私の考案の道具の、しつかりした骨組にならうと云ふわけだ。これに針葉棕櫚の細紐を張つて、茅草の網に可なりよく似た一つの粗雑な網を作る。網目は、甚だ不揃ひだが、どの點を取つても、埋められる動物の通過に必要な廣さを持つて居ない。そして今度は、その動物は一疋の土龍だ。この道具は、その三脚によつて、虫小舎の地中に、地面とすれ／＼に押し込まれる。少量の砂を以つて、細繩を蔽ひ隠す。土龍をその中央に置き、そして私の墓掘人夫隊を屍體の上に放してやる。

何等の支障なく、或る日の午後、埋葬が行はれる。針葉棕櫚のハンモックは、茅草の天然網と殆ど同じものだが、この埋葬を殆ど障げない。仕事の進捗が、少しく緩慢になるだけの事である。土龍を、その横はつて居る場所から移さうとする一寸した試みすらも無しに、土龍は其のまま地下に潜入して行く。作業が終ると、私は其の五徳を取り上げる。網は、屍體の在つた點で破られて居る。幾本かの細紐が嚙切られて居るが、其の數は極く少數で、屍體の通過に絶対に必要な程度に止められて居る。

でかしたぞ、私の屍體運搬夫たち。お前たちの事だ。多分これ位の事はやるだらうと思つて居た。お前たちは、天然の障害に對するお前たちの手段を用ひて、この實驗者の技巧の裏を掻いた。お前たちは、腮を大缺として、恰度、芝草の細網を嚙み切るかのやうに、私の紐を辛抱強く切つた。それは

立派な働きだが、しかしまだ、例外的とまでの稱揚には値しない。土を掘る、どんな愚な昆虫でも、之と同様の條件下に置かれたら、やはりそれ位の事はやつたに違ひない。

困難さの程度を一段高めてみよう。今度は、一本の針葉棕櫚の葉で、土龍の前後を、一本の一寸した横木にしぼりつけ、其の横木を、しつかりした二本の又木の上に安置する。これは、獲物の肉を、中心をはづして、金串に刺したやうなものである。この死獸は其の全長に亘つて、地に觸れて居る。

埋葬虫は屍體の下に姿を消す。そして其の毛皮の觸感を感じて、掘り始める。穴は次第に深くなり空虚が出来る。しかし彼等の渴望する所の物は下りて來ない。二本の又木が遠方に支えて居る横木に引留められて居るからだ。發掘は次第に緩慢となり、躊躇の時間が次第に長びく。

其の間に、墓掘人夫の一人が地面に登つて來、土龍の上を歩き廻はり、これを調べて見て、遂に後部の結び紐に氣附く。彼は執拗に之を嚙みほごす。遂に其れを切斷する大缺の音が聞える。カチツソで切れた。自分の重みで土龍は穴の中に下りるが、體は斜になつて、頭部はもう一つの紐で支えられて、相變らず穴の外に留まつて居る。

虫は、土龍の後部の埋葬を行ふ。それから、非常に永い間、引張つたり、あちらこちらに揺つたりする。それでも一向効果がない。其の物はどうしても下りて來ない。もう一度彼等の中の一が出て來て、上の方で何が行はれて居るのかを調べる。第二の紐が発見され、これ亦切斷され、そしてそれか

ら先きは、仕事は美事に進行する。

なか／＼目の高い大網切りだ。私はお祝ひを申上げる。しかし誇張はしない。土籠を結えて居た紐は、お前たちに取つては、芝生地で、お前たちの慣れつこになつて居る細繩に過ぎなかつたのだ。お前たちはそれを、先刻のハンモックと同様切断してしまつたが、それはお前たちが、お前たちの地下墓場に張り渡されて居るあらゆる天然の細糸を、お前たちの大鋏で切るのと變りがない。それは、お前たちの職業上、必要缺く可らざる一技巧に過ぎない。若しお前たちが經驗によつてこれを學び知り、之を實行する前に熟考しなければならなかつたとしたならば、お前たちの種族は、その見習中の躊躇のために、殺されてしまつたに違ひない。何故と云つて、土籠や、墓や、蜥蜴その他お前の嗜好に適つた食物の豊富な場所は、最も屢々芝生地だからである。

お前たちには、更に立派な事をやつてのける事が出来る。だが、それを述べる前に、細かい荆棘が地上に逆立つて、屍體を地面から僅かの距離に保つて居る場合を調べてみよう。墜落の偶然から、斯うして空中に懸つて居る發見物は、そのまゝ利用されないで居るだらうか。埋葬虫は彼等が目にし、彼等の頭上數寸の所にその匂をかぐ所の、この素晴らしい屍體を、見返へりもせず、通り過ぎてしまふか。それとも之をその首吊臺から落すだらうか。

獲物は、若干の努力を要するからと云つて、輕蔑しなければならぬ程それ程豊富ではない。實際を

見るまでは、私はその獲物が落されるものと思つて居た。埋葬虫は、地上に横はらぬ屍體の種々な困難に屢々曝されて居るのだからして、きつと之を地面に轉落させる本能を、持つて居るに違ひないと確信して居たからである。何か藁屑か、何かの棘がもつれあつて、偶然その屍體を支えて居ると云ふ事は、野良では極くあり勝ちの事なので、彼等はその事には狼狽する事はない筈だ。首絞りが、餘り高い所にぶら下つて居る場合に、これを落すと云ふ事は、たしかに彼等の本能的諸手段の一部をなして居るに違ひない。それよりも、彼等の仕事振りを見るとしよう。

私は虫小舎の中の砂に、一株の瘠せたタチジャカウサウを植えた。この灌木は、高さが、せい／＼七寸位である。私はその小枝上に、一疋の廿日鼠を載せたのだが、その尾、肢、首、などを枝の間からませて、困難を一層多からしめる。金網中の虫の数は、今では十四疋だが、私の調査の最後まで同敷にして置く。勿論全部が同時にその日の仕事に参加するわけではない。大部分は地下に留つて或は假睡し、或は彼等の穴倉を整理して居る。時とすると、たゞの一疋、屢々二疋、三疋、稀にはそれ以上が、私の提供にかゝる屍體の取入れに従事する。今日は、二疋が、間もなく、上方のタチジャカウサウの株の上に、廿日鼠のあるのを知つて、驅つけて來た。

彼等は、金網の目を傳つて、灌木の頂上に達する。其處で、支據物の不便さの故に、一層躊躇をしながら、地勢不利なる場合の屍體運搬法上の戦術を繰返へす。昆虫は一本の枝に肢を突張り、脊と肢

とで交る／＼に押し、揺り、激しく振り動かして遂に、その攻撃點を、障害物から脱け出させる。脊でぐい／＼と押して、僅かの間に、二疋の協力者は、その屍體を雜然たる枝の間から抜き出す。更に一揺りすると、それで廿日鼠は下に落ちる。それから先きは例の埋葬である。

この試験に於ては、何一つ新しい事が見られない。この發見物に對しては、埋葬に不便な土地で行ふ事を、そつくりその儘行つて居るだけの事で、墜落は、一つの運搬の試みの結果に過ぎない。

今度はいよ／＼、あのグレデイツチが稱揚して居る、墓の絞首臺を立てねばならない。しかしこれには必ずしも墓でなくてもよろしい。土龍でもよく、或は其の方が却つてよい位である。針葉棕櫚の細紐で、私は其の土龍の後足を一本の技に結びつけ、其れを、淺く地中に、縦に突立てる。土龍は絞首臺に沿ふて眞直に垂れ下り、頭と肩で充分に地に觸れる。

墓掘人夫は、申刺刑具のすぐ足下に横はつて居る部分の下で、仕事に取りかゝる。彼等是一个の漏斗形を掘るが、其の中へ、土龍の鼻面、頭、頸が次第に埋つて行く。するとそれに連れて、柱の根本が露出し、遂に其の重い荷物の重みにひかれて、倒れてしまふ。

私は、從來昆虫の行爲として認められた最も驚くべき、合理的壯學の一つたる、棒倒しの實況を見物した。

本能の問題を究める者に取つて、これは感動に値する。しかし、まだ結論するやうな事はしてはい

けない。それは性急すぎる。先づ第一に申刺刑具の倒れたのが、意圖された結果であるか、それとも偶然であるかを考へてみなければならぬ。埋葬虫はこの枝を、倒さうと云ふ明かな目的を以つて、その根本を掘つたか。それとも反對に、單に土龍の體中、地上に横はつて居る部分を埋葬せんがためにのみ、その基部を掘つたのか。問題は其處にあるのだが、しかし、之は容易に解決が出来る。

そこで實驗をやり直す。だが今度は、棒を斜めにし、土龍を縦に吊るし、棒の基部から二寸程の地點で、地に觸れさせる。かうした條件に於ては、倒棒の試みは少しもない。絶対にない。絞首臺の基部を、ほんの一寸肢で叩く事をすらしめない。發掘作業は全部、其處から遠い、地に肩の觸つて居る屍體の下で行はれる。其處で、そして其處のみ、墓掘人夫の手の届く部分たる、屍體の前部を容れる爲の、一つの穴が掘られる。

吊るした動物の位置を、一寸遠ざけると、それで、あの有名な傳説が空に歸する。かう云ふ風に、屢々、極く初歩的な節でも、少しく論理的にこれを取扱ふと、混然雜然たる斷言の堆積を築つて、眞理の良き粒を選び出す事が、充分に出来るのである。

もう一つこの節にかけてみよう。柱は斜にでも、垂直にでも、かまはない。たゞ、土龍は、相變らず後脚で、柱の天邊に結びつけてはあるが、地に觸れないやうにする。指二三本位の距離の、墓掘人夫どもの手の届かない所に、吊るして置く。

墓掘人夫どもはこれをどうするか。絞首臺を打倒す意圖を持つて、その根本を掘るか。少しもそんな事はない。それで、さうした戰略を期待して居たお目出度い連中は、まことにあてが外れる。支柱の基部に對しては一顧すらも與へられない。其處には熊手の一掻きの勞さへも費されない。倒柱を目的としては何も行はれない。何時になつても何も行はれない。これでは何も行はれないと云はねばならない。埋葬虫は他の方法で、土龍を手に入れるのだ。

これ等の決定的實驗を、さまざま形式で反覆してみた結果は、柱の基部は、吊るされた獸が、その地點に觸れて居ない限り、決して、斷然決して、表面的になりとも搔き掘られないと云ふ事が明かになつた。そして吊るされた獸が、柱の基部に當る地面に觸れて居る場合、柱の倒れる事があるにしても、それは決して意圖された結果ではなくして、單に、掘り始めた墓穴の偶然の結果に他ならない。

グレイデイツチが語つて居る所の、墓仙人は一體何を見たのだつたらう。彼の棒が倒されたところからは、埋葬虫にたかられないやうに、乾かされて居た墓と云ふのは、たしかに地面に觸れて居たに違ひない。掠奪者及び濕氣に對して、おかしな注意を拂つたものである。墓の干物を作る者は、一層物を見る眼があつて、その墓を地上數寸のあたりに吊るすものと想像した方が適當である。そしてこの場合、あらゆる私の實驗が明かにこれを斷言して居る通り、墓掘人夫の爲に基部を掘られて、串刺刑具が倒れたなんて云ふのは、まつたくの想像話に過ぎない。

これなども、禽獸に理性を認めようとする立派な議論の一つではあるが、しかし、實驗の光に照らしてみれば、立ち所に消散し、過誤の泥濘中に没入してしまふ。眞實さよりも、想像の豊かな、出來合ひ觀察者の言説を眞に受ける先生たちよ、私はあなた方の無邪氣な信仰に感心する。あなた方が、無批評に、さうした馬鹿氣切つた言説の上に、あなた方の學説を打立てる、その信じ易い意氣に感心する。

さて實驗を續けてみよう。柱は、今後は、縦に突立てる。しかし、吊るした動物は、その基部に觸れない。かうして置けばもう、その地點を掘られる事は決してない。私は一疋の廿日鼠を使ふ。目方が輕いので、昆虫の作業には一層適して居る。この死獸は、後脚を、針葉棕櫚の紐で結いて、柱の天邊に結びつける。そこで柱に沿ふて、眞直に下る。

二疋の、埋葬虫が間もなく、これを發見した。彼等はこの懸賞品の吊るしてある大柱に攀ち登る。彼等は屍體を調べてみ、頭巾で、その毛皮をさぐつてみる。そして絶好の發見物である事を認める。そこで仕事に取かゝる。この場合にも、位置の悪い屍體を移さねばならぬ場合に、用ひて居る所の戰術が再び用ひられるのだが、四圍の狀況は一段と面倒になつて居る。二疋の協力者は、廿日鼠と柱との間にもぐり込む。そして、其處で、柱に脚を踏ん張つて、脊を挺にして、その屍體を揺つたり、振り動かしたりする。すると、屍體はゆらくとなり、くるく廻はり、柱から遠ざかり、またもとの

所へ落ちる。午前中一杯、無益の努力に費され、その合間々々に、廿日鼠の體を調べてみて居る。

午後になつて、廿日鼠のどうしても動かないわけが、やつと分る。しかし、はつきりではない。

何故かと云ふに、この二疋の、必死の、絞首臺強盜は、最初、廿日鼠の後脚の結び目の少しく下方を攻撃するからである。彼等は踵のあたりを、毛を抜き、皮を剥ぎ、肉を刻さむ。彼等が今や骨に達して居た時だつた。彼等の中の一疋がはしなくも針葉棕櫚の紐を口にしたら。彼に取つて、それは既に慣れつこになつて居る物で、芝生地での埋葬の際、實に頻々と遭遇する、あの芝草の糸を代表して居る。そこで大鋏が、執拗に之を噛む。この植物性の障害物は切斷され、そして廿日鼠は墜落し、その後間もなく埋葬される。

一つだけ切り離してみれば、この吊り紐を切ると云ふ事は、素晴らしい行爲である。しかし、平常の仕事全班に亘つて観察すると、その素晴らしくえらい意義も失はれてしまふ。紐は何物にも隠されて居なかつたに拘らず、これを攻撃するまでに、昆虫は、午前中一杯、何時もの方法で、根限り揺り動かして居た。最後に、紐が見つかる、彼は、地下でよく遭遇する茅草の障害物をでも切るかのやうに、それを切つた。

彼の爲に作り出された状況に於て、木鋏の使用は、シヤベル使用に對する必須の補助手段である。そして、彼の持つ僅かばかりの辨別力でも、なほ充分、截斷器使用の適宜さを知る事が出来るのである。

る彼は、邪魔物を切るだけの事で、それに何等推理力の働いて居ない事は、彼が屍體を地に下ろすに、何等の推理力をも働かせないと同様である。彼が、原因結果間の關係を解する事如何に少ないかは、すぐ側に結ばれて居る針葉棕櫚を噛む前に、脚の骨を噛み砕かうと努めるのもわかる。難かしい事の方が、甚だ易しい事よりも、先に試みられるのである。

それは如何にも難かしい事だが、しかし、その廿日鼠が若くさへあれば、不可能な事ではない。私は實驗をやり直してみる。昆虫の缺などは、齒も立たないやうな針金で、大きくなつた廿日鼠の半分程の大きさの、軟かい廿日鼠の仔を結びつけて置いた。今度は、一本の脛骨が、踵のつけ根あたりから、腮の力ですつかりと鋸き切られた。この脚が離れると、もう一つの脚も自由になつて、容易に針金の係蹄から抜け出し、そしてその小さな屍體は揺すられて地に落ちる。

しかし若しこの骨が、餘り硬いと、若しその屍體が、土籠か、大きくなつた廿日鼠か、雀かであると、針金の紐は、埋葬虫の試みに對して、不拔の障礙を構成し、虫はまる一週間近く、その屍體をつつき廻はし、一部分羽根を抜いたり、毛を抜いたり、その毛を亂したりして、見るも無残な有様にしてしまひ、遂にその屍體が、乾燥し始めるに及んで、これを捨てしまふ。しかも彼等には一つの手段が残つて居たのだ。合理的であり且つ成功疑ひ無い手段だ。それは柱を倒す事だ。しかもたゞの一疋も、そんな事を考へつかなかつた事は勿論である。

最後にもう一度、我々の技巧を變へてみよう。柱の頂きを、廣く開いた小さな又とし、その兩脚の長さは、やつと一センチメートル位にする。針葉棕櫚の紐よりは、少しく切り難い麻の糸でもつて大きい廿日鼠の後脚を、踵の少し上のあたりで一緒にくくり合はせ、その二本の脚の間に、又の脚の一ツを突込む。一寸下から上へこき上げさへすれば、この物を落す事が出来る所、何の事はない、肉屋の店に吊るした兎子と云つた形だ。

五疋の埋葬虫が、私の仕掛けに集まつて來た。幾度か無駄な努力をした擧句、遂に脛骨を攻撃する。これが何でも、屍體が何處か荆棘の狭い木の股に、その四肢の一ツを引つけて居る時の、慣用の方法らしい。骨を挽き切るのは、今度はなか／＼骨の折れる仕事なのだが、一生懸命にさうしようとしながら、彼等の中の一疋が、引つ／＼つた兩脚の間に潜り込む。其處へ入り込んでみると、獸の毛皮の觸應が脊骨に感じられる。するともう、それだけで、脊で押すと云ふ傾向が彼の中に目醒める。ぐい／＼と二押三押、それ、廿日鼠は少しく昇り、股木の上を滑つて地に落ちる。

これは本當に、考へた擧句の行動だらうか。果して昆虫は、ふと洩れた理智の光によつて、この屍體を落すには、股木沿ひに滑らせて行つて、これを外さなければならぬと云ふ事を、見て取つたのであらうか。彼は實際に、この吊下げの仕掛けを見知つたのであらうか。かうした立派な結果を見ては、これを以つて満足とし、これ以上に深く究める必要なしとするであらう人々のある事を、私は知

つて居る。しかもその數は少くない。

私はなか／＼こんな事位では、確信を持つ事は出来ない性分なので、結論を下す前に、更に、實驗を變へてみる。私の推測では、埋葬虫は、自分の行爲の結果など、少しも豫想する事なく、單に、動物の脚を自分の上方に感じたが故に、脊で押したに過ぎない。私の用ひた吊下げ法を以つてしては、すべて因却した場合に用ひる脊骨の押しが、恰度ひつか／＼りの點に加へられ、この幸運な一致の結果、屍體は落ちたのである。そこで、支木に沿ふて滑らせなければ、物體を外づす事の出来ないこの點を、廿日鼠から少し離れた邊に置いて、埋葬虫が押さうとしても、もう直接脊に、それを感じないやうにしなければなるまい。

一本の針金で、或は一羽の雀の趾骨を、或は一疋の廿日鼠の踵を、一緒に結びつけ、二センチメートル程先で曲げて、一ツの小さな輪を作り、それに、非常にゆる／＼に、又の股木の一ツを差込む。しかもその股木は、非常に短く、且つ殆ど水平にする。吊るしてあるものを落すには、この輪をほんの一寸押せばよく、この輪は浮上つて居るので、昆虫の道具を用ひるには、甚だ適して居る。要するに、装置は前回と同じなのだが、たゞひつか／＼りの點が、吊られて居る動物の體の外にあるだけが違つて居る。

私の惡戯は、甚だ單純なものであるに拘はらず、完全な成功を収める。虫は永い間、繰り返へし繰

り返へし屍體をこづき廻はすが、一向に効がない。脛骨、趾骨は餘り固過ぎて、辛抱強い鋸挽きにも、どうしても切れない。雀も、廿日鼠も、いたづらに、絞首柱の上で干からびて行く。私の埋葬虫共は一疋二疋と次第／＼に、この解き難い力學上の問題を抛棄してしまふ。しかもその問題たるや、この可動的のひつかゝりを、ほんの少しでも押して、そして彼等の渴望する禽獸を外づせばよいのだ。

いや實に、おかした理屈屋だ。若し先刻、引くゝられた兩脚と、支えの股木との間の、相互的關係が明かに分つて居り、推理の結果になる行動によつて、その廿日鼠を落したとしたならば、今度の仕掛けが、前回のに劣らず簡單であるに拘らず、彼等に取つて、打克ち難い障害物であると云ふ事は、何故であらうか。幾日も幾日も、彼等はその屍體をつゝつき廻はし、これを上から下から穿鑿し、しかも彼等の失敗の原因たる、この可動的のひつかゝりには一向にも注意しない。私が何時まで見張つて居ても無駄で、たゞの一疋と雖も肢でそれを押すとか、額でそれを打出すとかするのを見る事は出来ない。

彼等の失敗の原因は、無力と云ふ事ではない。センチコガネと同様、彼等は頑丈な土方である。手でぎゆつと握つてみると、指の股に潜り込み、掌の皮膚を引搔くので、直きに放さないでは居られない。頑丈な犁双のやうな彼等の額を以つてすれば、短い留木に引掛かつて居るこんな輪なんか、容易に引くり返へす事が出来る筈である。それが出来ないのは、それを想ひつかないからに過ぎない。彼

等がそれを想ひつかないのは、あの進化論が、己れの學説を支持せんが爲に、不健全にも惜しみなく彼等に附與して居る所のものが、實は彼等に缺けて居るからだ。

神の如き理性よ、智性の太陽よ、畜類の稱讃者たちが、こんな鈍重さを以つて、汝を卑めるとは、何たる拙い鋪石を、汝の尊い面に加へる事か。

なほ別の方面から、埋葬虫の暗愚さを調べてみよう。私の囚人たちは、彼等の豪華な住居にも、なか／＼満足しないで、兎角逃げ出したがる。禽獸たると人間たるとを問はず、惱める者の至上の慰安たる労働をして居ない時には殊にさうである。金網の中に監禁されて居る事が、彼等には堪へ難い重荷なのだ。それで、土籠を埋めてしまひ、墓穴の内が萬事整頓してしまふと、彼等には不安氣に、金網の圓屋根を走り廻はる。天邊に攀登り、下り、また登り、ばつと飛立つが金網にぶつかつて落ちてしまふ。起き上つて、また始める。空は素晴らしく晴れ、氣は暖かに穏かで、小徑の傍に踏み潰されて居る蜥蜴を探すには、持つて來いの天氣だ。多分、腐れかゝつた肉片の臭ひが、これ等埋葬虫の嗅覺以外の、どんな嗅覺にだつて感じられない程の臭ひが、何處か遠方から、此處までやつて來るに違ひない。そこで私の埋葬虫共は、何とかして出て行きたいのだ。

彼等にはそれが出来るか。若し一條の理性の光が彼等を助けたならば、彼等に取つてこれ程容易な事はない筈だ。何度も何度も驅け廻つて居る金網ごしに、彼等は、外部に、自由の天地を、是非とも

到達せねばならぬ約束の地を、見たのである。幾回となく、彼等は城壁の基部を掘つたのである。しかも其處で、堅孔の内に、止まつて居て、仕事の休みの時には、幾日でも假睡み續けて居る。若し私
が彼等に新しい土籠を提供するならば、彼等は、入口の廊下を通つて、彼等の隠れ家から湧き出して
来て、土籠の腹の下にうづくまる。埋葬が終ると、彼等は、圍の縁のあちこちに、散り／＼に戻つて
行つて、地下に姿を消してしまふ。

所が、二ヶ月半の囚はれの間、金網の基部の二センチメートル程の砂の中に潜つて、長い間滞在し
て居るに拘らず、どの埋葬虫にもせよ、障害物を迂廻し、柵の下の發掘を延長し、それを鉤形に曲げ
て、彼方側に出すと云ふ事は、これ等屈強な者に取つては何でもない仕事なのに、それをやつてどう
にか成功したものはまことに稀である。たゞ一疋だけが脱走に成功した。

しかしこれは偶然の脱出であつて、決して計畫的のものではない。何故かと云ふに、若しこの喜ぶ
べき出来事が、何か心の働きの結果であつたならば、明察に於ては、これと等しい他の囚人等は皆、
一疋残らず、脱出に適した鉤形の道を、合理的に發見して、虫小舎は速かに空になつてしまつたに違
ひない。大多數のものゝ不成功はあの唯一の脱出者が、偶然に掘つたに過ぎない事を、斷言して居る。
四圍の事情が彼に幸した。たゞそれだけの事なのだ、他の凡ての者が失敗した場所で、彼が成功した
からと云つて、何もそれを彼一人の手柄としないがよい。

しかしまた、埋葬虫の悟性が、昆虫界の通則以上に狭小である、と主張してはならない。この屍體
運搬虫の無能さは、砂床を設けて其處に圓屋根の縁を少しくはめ込んだ金網の中で育てた、すべての
昆虫に於て、これを見る事が出来る。極く稀な例外はあるが、それは偶然の出来事ゆゑ別として、た
だの一疋と雖も、柵を下の方から迂廻しようと思ふ氣になつたものは無く、斜の廊下を掘つて、脱出
に成功したものもない。糞虫の如きは、優秀な坑夫なのだが、さうした本職の坑夫ですらも、それが
出来ないのだ。金網の圓屋根の下に囚はれて、どうかして逃げ出したいと思つて居る大玉押コガネ、
センチコガネ、ダイコクコガネ、タマオシコガネ、シジフの類は、彼等の周圍に、自由の天地、白日
の歡喜を見ながら、しかも唯の一疋と雖も、柵の下方を迂廻する氣にはならない。しかもそんな事は
彼等の鶴嘴に取つて、少しも困難ではないのに。

このやうな暗愚さの例は、相當高度の動物に至るまで、決して絶無ではない。オーデュボンの語る
所に據つて、彼の時代に、北亞米利加では、どんな風に、野生の七面鳥を捕獲して居たかゞ分る。

この鳥が屢々現れると認められた林間の空地に、棒杭を地中に打込んで、一ツの大きな鳥籠を作る。
その圍の中央に、一ツの短い地下道が開き、それが柵の下をくゞつて、籠の外で緩い傾斜をなして露
出のまゝ、地面に達する。中央の穴は、鳥が自由に通行出来る程充分廣く作り、圍の中の唯一部分を
しか占めず、その周圍には、棒杭の輪に沿ふて、廣い完全な地帯が残される。幾握りかの玉蜀黍を係

蹄の内部、並にその周囲、就中、一種の橋の下を滑つて係蹄の中に入り込み、器の中央まで通じて居る傾斜の小徑の上に撒布する。要するに、この七面鳥捕獲器は、一ツの戸を何時も開けつばなしにして置く。鳥は入る爲には之を見出すが、出る爲にはどうしても再び之を見出さうとしない。

この有名な亞米利加の禽學者に據ると、事實、七面鳥は、玉蜀黍に誘はれて、その陰險な坂道を下り、短い地下道に入り込み、その端に掠奪品と光明とを認める。更に數歩にして、これ等の貪食漢は一ツ一ツ、橋の下から飛び出して来る。彼等は圍の中に散らばる。玉蜀黍は豊富にある。そして餌袋が膨らむ。

玉蜀黍をすつかり食つてしまふと、七面鳥の群は引揚げようとする。しかも捕虜の中の唯一つとして、先刻入つて来た、中央の穴に注意する者はない。不安氣な、グル／＼云ふ鳴聲を吐き出しながら、すぐ側にアーチが大きな口を開けて居る橋の上を、行つたり來たり、柵に沿ふてぐる／＼廻りに、同じ道を百度でも反覆する。赤い下飾りある頸を、柵の目の間に突込み、其處で、嘴を大氣の中に突出したまゝ、精根のつきるまでじたばた騒ぐ。

馬鹿な奴だ。先刻どうしたかを思ひ出してみたらよいではないか。此處までお前を連れて來た廊下の事を考へてみたらよいではないか。若しお前の衰れた頭の中に、少しばかりの能力があるならば、二つの觀念を連合して、お前の脱出の爲にすぐ側に、入口が開けつばなしになつて居る事を考へたら

よいではないか。所がお前はそんな事は夢にもしない。光は、抵抗し難い誘惑となつて、お前を柵の所へ結びつけてしまふ。そして、ぼかつと口を開いて居る穴は、先刻此處まで入つて來る事を許しました同様に、出て行く事も容易に許すであらうのに、薄暗い爲に向お前の注意を惹かないで居る。

この穴の適宜さを認める爲には、お前としても、少しく考へ、過去を想ひ出さなければならぬ。しかし、この過去に溯つての一寸した計算は、お前の力には及ばない所だ。そこで、係蹄を仕掛けた者が、數日後に再び來てみると、一隊の七面鳥全部が捕はれて、素晴らしい獲物があるわけだ。

七面鳥は、智惠の點から云つて、芳しくない評判を頂戴して居るが、果してその馬鹿と云ふ評判に當つて居るであらうか。どうも彼が特に他の鳥よりも愚だとは思はれない。オーデュボンの話によると、彼もなか／＼しつかりした、若干の奸計を用ひるさうで、殊に、彼が、彼の夜の敵であるヴァーヂニヤの梟の攻撃の裏を掻く場合などは、うまいものださうである。彼が地下道の係蹄で爲す所の行爲は、どんな他の鳥でも、光を熱愛する限りは、やはりさうするであらう。

少しく事情は異なるが、埋葬虫は要するに、七面鳥の無能振りを反覆して居るに過ぎない。金網の縁沿ひに掘つた短い穴の中で休んだ後で、白日の下に戻り度いと思ふと、この虫は崩れた土の間から僅かばかりの光の洩れるのを見て、またこの入口から登つて來る。それだけ反對の方向に、この廊下を延ばしさをすれば、金網の彼方側の外部に達して、脱出する事が出來るとは思はないのだ。これな

どもまた、熟考の一微候を、どう探してみても見出し得ぬものゝ一つだ。彼も亦、傳説的の名聲を持つて居るに拘はらず、他の連中と同様に、本能の無意識的衝動に導かれて居るに過ぎない。

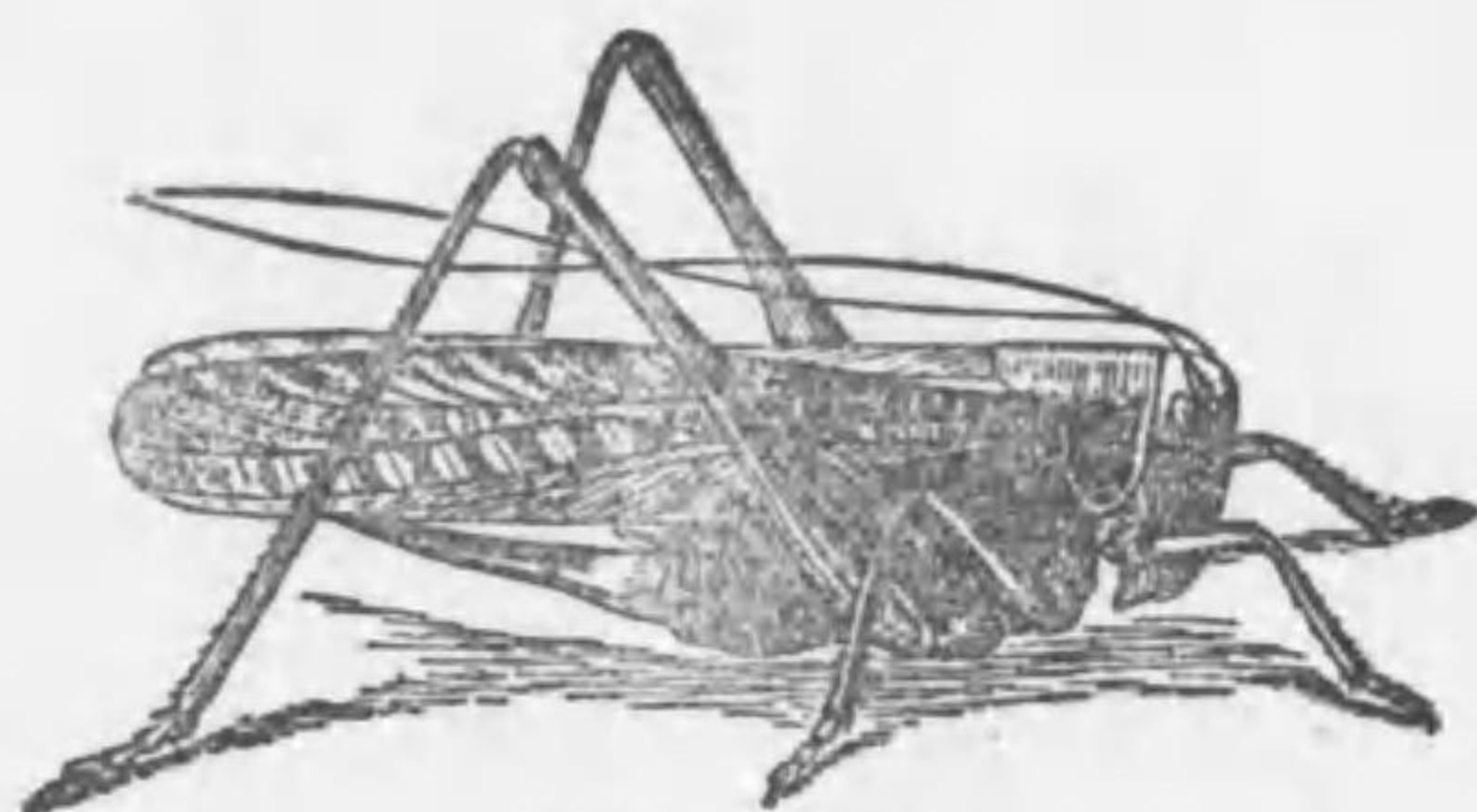
九

額白デクチツク——習性

歌手として、また風采の堂々たる昆虫として、額白デクチツク (*Decticus albifrons* Fab.) は、私の地方の蝨類の首位を占めるものだ。鼠色の衣裳に、強大な腮と、盤廣な象牙のやうな顔をして居る。さうありふれては居ないが、また無益に人をして搜索に勞れしめはしない。夏の眞盛り、芝草の茂みの中、殊にテレビン木の突立つて居る、日當りのよい岩地の根方などに、びよん／＼と跳ねて居るのを見出す。

七月末、私はデクチツク小舎を設ける。私は虫小舎として、一つの廣い鐘形の金網を用ひ、これを飾でふるつた土の床の上に置く。虫の数は一ダースで、雌雄平等に代表されて居る。

食料問題がしばらく私を困らせた。彼等の常食は、青い物ならば何でも食べるバツタがそれを示して居る通り、植物性のもに違ひないと思はれる。そこで私は私の囚人たちに、私の畑の中で一番美味い、一番柔い、萹苳や、菊萹苳や、野萹苳などの葉を差入れてやつた。所がデクチツクはまるで馬鹿にして、殆ど口をつけない。これは彼等の御馳走ではないのだ。



白デクツク

多分彼等の強大な腮には、何か草のやうに堅いものの方がよいのであらう。私はいろ／＼な芝草を試してみた。その中には、海色野稗も交つて居たが、これはプロヴァンスの百姓たちの所謂、ミオーコ (Miauco) であり、植物學者のセタリヤ・グラウカ (Scariagi auca) であつて、收穫後、畑を荒らす悪草である。この野稗は氣に入つた。しかしこの腹の減つた連中の飛びついたのは、その葉ではなくて、彼等はその穂ばかりを攻撃し、未だ柔い種子を、如何にも満足さうに、嚙つて居る。そこで食物は見つかつた。しかし、これは一時的に過ぎない。その次第は後にわかる。

朝、太陽の光線が、私の書齋の窓に置いてある虫小舎を訪れると、私は家の門前で摘み取つた、ありふれた芝草の、青い穂の一束を、その日の糧として供する。デクツク等は、その小束に駆けつけ、其れに攀登る。そして其處で、甚だ平和に、お互に何のいさかひもなく、腮で穂の刺毛の間をさぐり、未熟の種子を引き出しては嚙る。彼等の服装が服装なので、まるで一群の小紋烏が、百姓の女房の投げ與へる穀物をついばんで居るやうである。穂は、その軟い顆粒

を食はれてしまふと、如何に激しい餓えに驅られて居やうとも、残りは振り向きもされない。

物皆を焼き盡すこの酷暑の候に、出来るだけ、食物の單調を破る爲に、葉が厚い、肉の多い、夏の暑さに餘り感じない植物を採集する。それはあの極くありふれたトンボグサで、これも亦、畑の作物を荒す奴である。この新しい植物も亦大に歓迎される。そして、今度も亦、デクツクが齒を加へるのは、葉や、水氣の多い莖ではなく、出来かけの種子で膨れて居る鞘ばかりである。

この、軟い種子に對する嗜好は、私の意外として驚く所である。希臘語でデクチコス (Dekthukos) とは、嚙む所の、嚙む事を好む所の、と云ふ意味だ。分類學者には、何の意味もない一つの名前、單なる番號でも足り得る。しかし、私の意見としては、調子が好いと同時に、何か特色をあらはす所の意味を持つて居れば、更に結構だ。それが恰度この場合に於てはまつて居る。デクツクは、この上なく、嚙む事の好きな虫だ。この強い蝗虫に指を嚙まれないやうにするがよい。嚙まれたが最後、血の出るまで嚙まれる。

しかもこの強大な顎が、私がこの虫を取扱ふ時には、それを大に警戒するのだが、その顎が、軟い顆粒を嚙む以外に、何の役目も持つて居ないとは！ これ程の挽白が、未熟の小さな種子を播碎く以外に、働かないとは！

何か私の腑に落ちぬものがある。これ程立派な腮の缺を備へ、兩頬を膨らまして居るこれ程立派な

咀嚼筋を備へて居る以上、デクチツクは何か硬い生餌を噛み切るに違ひない。

今度こそ私は、絶對的ではないまでも、少くとも根本的の、眞の常食を發見した。柄の大きなバツタ類を何疋も虫小舎の中に放してやる。その時々私の捕虫網に偶然飛込んだバツタ類(註1)の一を入れてやる。若干のキリギリス類(註2)も受容れるには受容れるが、これはそれ程歓迎されない。若し運よく捕へる事が出来るならば、あらゆる種類のバツタ類と、あらゆる種類のキリギリス類とが、皆受容れられるものと思はれる。但し、それには柄が相當に大きい事を要する。

註1 *Echypoda coerulea* Lin.—*Echypoda minutata* Pallas.

Spilargis coerulea Lin.—*Caloptenus Italicus* Lin.—*Pachytillus nigrofasciatus* de Geer.—

Truxalis nasuta Lin.

註2 *Conocephalus mandibularis* Charp.—*Platyceles intermedia* Serv.—*Ephippiger avilium* Serv.

私の食人鬼たちに取つては、キリギリス或はバツタの味のする生肉でさへあれば、どんな肉でもよい。最も頻繁に犠牲に供せられるのは翅の青いバツタだ。虫小舎の中では、之が慘目な有様に食はれる。その有様を次に記してみよう。

獲物を入れてやると、虫小舎中はたちまち大騒ぎである。殊に、デクチツクがしばらく前から斷食して居る場合にさうである。彼等は足踏み鳴らし、その、長い竹馬の爲に歩行自由ならず、ぶざまな

恰格で飛びかゝる。バツタの方は、絶望的に跳ね上がり、金網の圓屋根まで飛び上つて、其處に獅嘯みついで、デクチツクの魔手をのがれる。デクチツクは餘り肥つて居て、其處までは攀登り得ないのだ。或るものは入れられるや否や、即座に取捕まつてしまふ。他の連中は、圓屋根の天邊に避難はしたものの、彼等を待つて居る運命を、少しくおくれさせるに過ぎない。彼等の順番は來ないでは居ない。しかも直きに來る。彼等は、勞れてか、それとも、下の方にある青草に誘惑されてか、下へ降りて來る。するとデクチツクが早速彼等を追撃すると云ふわけである。

獲物は、獵師の前肢で引かけられて、先づ第一に頸筋を傷つけられる。バツタの甲は、必ず其處、頭の後部を第一に破られる。デクチツクが、押へて居る手を放して、それから氣儘に食ふ前に、執拗にさぐるのは必ず其處である。

これはなか／＼賢明な噛み方である。バツタはなか／＼死ぶとい。首をもがれてもなほ跳ねて居る私を見た中の一つなどは、身體を半分食はれてしまつて居て、絶望的に後足で蹴つて、最後の努力でやつと抜け出して遠方へ飛んだ。藪の中だつたら、それつきり見つからなかつたに違ひない。

デクチツクはこの間の事情によく通じて居るらしい。二本の強大な挺でもつて、實に素ばしこく逃げるこの生餌を、出來るだけ早く、動けなくする爲に、彼は先づ、神経系統の首座たる、神経節を噛み、それを抜取つてしまふ。

之は殺戮者の選擇の少しも加はつて居ない、偶然の出来事であらうか。さうではない。何故と云ふに、見て居ると、バツタが元氣旺盛の際には、必ずこの同じ方法を以つて殺害するからだ。若し、バツタが新鮮な屍體の状態で與へられるか、或はまた、弱つて居るとか、死にかゝつて居て、防禦し得ない状態にある時には、攻撃者は、何處でもかまはず、牙のあたり次第に攻撃するからだ。その際は、或る時は飛切りの上肉たる太腿から、或る時は、腹、脊、胸からデクチツクは食ひ始める。頸筋を噛むのは、困難な場合に限られて居る。

それ故、かくも智性にうといこの蝗虫にも、我々が他であれ程多くの例を見た所の、あの一つの殺しの術があるのだ。しかし、それは極くお粗末な術で、解剖と云ふよりも寧ろ、獸類分解の領分に入るものである。

二疋や三疋の、翅の青いバツタは、デクチツクの一日の食糧として、決して多過ぎはしない。頭から足の先まで、全部食はれてしまふが、翅と、翅鞘とだけは、餘り硬いので輕蔑される。その他に野稗の軟い種子が、獲物の御馳走の合間合間についばまれる。私のお客さん達は實に大食ひである。彼等の貪食振りもさる事ながら、肉食から、菜食へと平氣で移つて行けるに至つては實に驚くの他はな

50
彼等は素直な、何と云つて選り好みをしなない胃を持つて居るのだから、若しその數さへ多かつたら、

農業に幾分かの貢獻をする事が出来るに違ひない。彼等はすべてのバツタ類を殺すが、そのバツタの中の幾種かは、我々の畑に於てすらも、評判が悪い奴だ。それに又彼等は、百姓たちの大嫌ひな若干の植物の種子を、未だ熟さない穂の中に、食つてしまふ。

私がデクチツクを虫小舎の賓客として待遇するのは、何も單に彼が、地の富の保存に、幾分かの貢獻をするからと云ふわけではない。彼の歌、彼の婚姻、彼の習性中に、最も古い時代の思出を保存して居てくれるからだ。

昆虫界の長子等は、地質學的時代に、どんな生活をして居たか。一層落着きの出来た現在の動物界からは、放逐されてしまつた、粗暴さ奇怪さが推測される。今日では殆ど廢たれてしまつた種々の慣習が臆氣ながら想像される。化石の薄片が、この素晴らしい問題に就いて、黙して居る事は、我々の好奇心に取つて遺憾な事である。

幸にもたゞ一つの道が残されて居る。それは、石炭期昆虫の後繼者を調べてみる事だ。現代の蝗虫類は大古の習性の或る反響を保存して居て、昔の習性に就いて、我々に教へる事が出来ると思はれる。第一に、デクチツクに尋ねてみよう。

虫小舎の中では、滿腹したデクチツクの群は、日當りに腹逼ひになつて、如何にも満足氣に腹ごなしをやつて居り、觸角が微かに揺れる他は、少しも生きて居る様子がない。それは午睡の時刻であり、

堪へ難い暑さの時刻である。時たま、一疋の雄が起き上り、嚴かな足取りで、何處をあてともなく歩き廻り、少しく翅鞘を擧げて、稀な、チク、チクと云ふ音を發する。その中活氣づいて来て、歌の調子を早める。彼の演奏目録中の最も美しい曲を奏でる。

彼は彼の婚姻を稱えて居るのか。彼の歌は賀婚歌なのか。私は何とも斷言しない。なぜかと云つて若し彼の歌が、附近の雌を呼ぶ事を目的として居るのだつたら、その効果は餘りに貧弱だからだ。聴衆の女性中に、何等注意の徴候が見えない。たゞの一疋だつて、身動きもしなければ、たゞの一疋だつて日當りの好い一等席を動かうとはしない。

時とすると、獨唱が二部合唱或は三部合唱になる。かうして誘ひの聲を増してみた所で、相變らず成功しない。尤も、こんな冷然たる象牙の面上には、深い心の感情など、少しも讀めるものではない。求婚者たちの歌に眞の誘惑があるかどうか。何等の外部的徴候も、それを語つて居ない。

外見上は、この憂々たる音は、冷然たる女性等に向けられて居るやうである。次第に熱情的のクレシエンドーに高まつて行つて、遂には、糸挽車の連続的な騒音となる。太陽が雲にかくれると、その歌はやむ。太陽が再び現はれると、歌もまた始まる。しかし、附近の女性等は一向取り合はない。

竹馬を熱砂の上に伸ばして、休んで居たものは、その姿勢を少しも崩さず、相變らず同じ調子で觸糸を動かして居る。一疋のバツタの残りを嚙つて居たものは、その一塊を放さず、一口をも失はうと

しない。これ等の無感覺な連中を見ると、實際、あの歌手は、たゞ自分が生きて居る事を感じる喜びの爲に、音を立てて居るかのやうである。

さうして何の變つた事もなく時は過ぎたが、八月も末近くなつて、私は彼等の婚姻の發端を見た。偶然、極く僅かの序曲もなく、一番のバツタが面をつき合はせる。化石でもしたやうに、殆ど額と額と相接して、互に髪の毛のやうに細い、彼等の長い隅角で愛撫し合ふ。雄は可なり氣後れがして居るらしい。彼は自分の跗節を洗ひ、腮の端で自分の足の裏を擽る。時折、彼は弓で一寸絃を擦つて、チクと云はせるが、それつ切りである。

しかし、我々から見れば、これこそ、腕前を見せる絶好の機會ではあるまいか。自分の足など搔いて居ないで、何故、胸の焔を、優しい歌に托して、打明けないのだ。彼はちつともそんな事をしない。彼は渴望の的である雌を前にして黙りこくつて居る。しかも雌は一向冷然として居る。

單に行きずりの男女の間の、挨拶の取かはしに過ぎぬこの會見は、永くは續かない。額と額とを突き合はせて、彼等は互に何を云ひ交はして居るのか。大した事ではないらしい。何故かと云つて、間もなく、彼等は、それつ切りで、別れて、各々勝手な方向に行つてしまふからである。

その翌日、その同じ一組がまた出會ふ。今度は、歌は、相變らず極めて短いながらも、前日よりは一層調子が強くなる。しかし、デクチツクが求匹期以前に、その歌に與へた程の先彩は得られず、到

底それには及ばないものである。その他は、前日私が見た所の事の反覆に過ぎない。即ち、觸角で肥つた腹をやんわりと叩きながら互に愛撫するだけである。

雄は大して氣乗りがして居ないらしい。彼はなほ肢を嘯んで、考へ込んで居る風である。この試みはなか／＼好もしさうではあるが、恐らく危険が伴はないわけではあるまい。彼等にも、あの尼蠟螂が我々に示したと同様の結婚悲劇があるのだらうか。この事件は異例的に重大なのだらうか。辛抱して見てみようさうしたら分るだらう。差し當つては、それ以上何の事も無い。

それから數日後に、少しばかり明かになつて來た。雄は下方にあつて、砂上にべしやんこになつてその強大な花嫁の爲に組み敷かれて居る。花嫁は、劍を空さまに、後の二本の竹馬を高く突立て、其の抱擁を以つて雄を惱ませて居る。これでは確かにさうではない。こんな姿勢では可哀さうなデイチツクは、勝利者の様子をして居ない。相手は亂暴にも、樂器に對して敬意も拂はず、雄の翅鞘を開かせ、腹部の付け根の所の肉を軽く咬んで居る。

この場合、一體二疋の中のどちらから仕掛けて居るのか。役割が入れ替つては居ないのか。普通は挑みかけられる方が、今は、肉を喰ひ切りさうな、亂暴な愛撫でもつて、挑んで居る。彼女は遂に應じたのではない。彼女の方から強いたのだ、惱ませつ、嚴命しつゝ。べしやんこにされた相手は、じたばたして、抵抗しようとして居るらしい。一體、これからどんな異常な事が起るのか。今日の所は

未だそれを知る事が出来ない。敗けた奴が、身をすり抜けて、逃げてしまつた。

たうとう、今度こそは見つけた。デクチック先生は、仰向けにひっくり返えされて、地上に横はつて居る。相手は、その長脚上に出来るだけ高くのび上がり、劍を殆ど垂直にし、遠方から、地上の雄の體を蔽ふて居る。二個の腹端が鈎形に曲り、さぐり合ひ結びつく。すると間もなく雄の痙攣した腹から何だか非常に大きな、前代未聞のものが、恐ろしい苦しみを以つて、押し出されて來るのが見える。まるでこの虫が彼の腸を一かたまりに押出して居るやうである。

それは一個の蛋白石色の革袋で、大きさと云ひ、色と云ひ、何か宿り木の珠果に似て居る。そしてこの革袋には四ツの小囊があり、各々浅い溝で區切られて居る。その二ツは大きくて下方にあり、二ツはそれよりも小さくて上方にある。或る場合には、その小房の數は増し、そして全體の外観は、エリス・シアグリネ、即ち、あのありふれた蝸牛が地中に卸すやうな、卵の包みのやうである。

この不思議な代物は、未來の産婦の劍の基部にぶら下つたまゝになつて居る。そして彼女はこの異常な振分け袋をぶら下げて、嚴かな足取りで引上げるが、この袋は、生理學者の所謂精包 (spermato phore) で、卵に取つて、生命の根源である。換言すれば、この小壘は今や、自分自身の運動で、胚種の進化に必要な補助物を、所要の場所に傳達するわけなのである。

このやうな小壘は稀らしい物で、現在の世界では極めて稀である。私の知つて居る限りでは、頭足

類(Cephalopodes)及び、蝸蜒(Scolopendres)が、現在、このやうな奇妙な器械を用ひる唯一の動物である。所で蝸と馬陸とは初期時代以來のものである。デクチツクは、舊世界のもう一つの代表者なのだが、今日では例外と認められるこの奇怪な風習も、最初の頃は可なり一般的な法則だったかも知れないと我々に告げて居るやうである。殊にこれから見ると、之と同じやうな事實が、他の蠃斯類中にも見られるので、なほさう思はれる。

雷にでも打ちひしがれたやうだつた雄は、やつとその驚きが去ると、身體の塵を拂つて、やがてまたその陽氣な音楽を始める。差當り、彼の方は勝手に陽氣に唱はせて置いて、未來の母の方の跡をつけてみよう。彼女は硝子のやうに透明なジェリーの柄でくつついて居る彼女の荷物をもつて、嚴な足取りでさすらつて居る。

時折、彼女は、その長脚上にのび上がり、身體を輪のやうに曲げて、腮でその蛋白石色の荷物をとらへ、これを靜かに軽く咬み、これを壓縮する。しかし、その皮を破つたり、その内容物を少しなりとも失ふやうな事はしない。その度毎に、彼女はその表面から一つの細片を引離し、それを噛み、緩りと噛み直ほし、そして遂にはそれを呑み下してしまふ。

約二十分間同じ事が繰返して行はれる。それから、小塚が、今では、すつかり空になつて居るが、一息にもぎ取られ、たゞ、その基部にあたる、ジェリーの柄だけが残る。この巨きな塊りは、強靱で膠質だが、たゞの一瞬间も之を手離す事なく腮で靜かに噛み、捏ね、混ぜて、遂には、滓も残さず呑み込んでしまふ。

私には最初、この怖ろしい變遷が、たゞこの雌一個の亂行、たゞの偶然の出來事としか見えなかつた。それ程、このデクチツクの雌の振舞ひは異常であつて、他にその例を見ないものだつた。けれども私は、明白な事實の前には頭を下げなければならなかつた。四度、私は、私の囚へてある雌のデクチツクたちが、次々に、その小袋を引ずつて居る所を不意に發見した。そして四度、私は、彼女等が間もなくそれをもぎ取り、何時間も引續き、嚴かに腮でこれを噛み、そして遂にそれを呑下してしまふのを見た。それ故これは通則なのだ。その内容物が、目的の場所に着いてしまふと、この生殖用小塚は、多分、強い刺戟物であり、他に類の無い美味なので、噛まれ、味はれ、そして呑み込まれるのであろう。

若しもこれが、どうもさうらしく思はれるのだが、古い昔の習性の名残りであるとしたら、實際、昔の昆虫は、奇妙な習慣を持つて居たものではないか。レオミユールは、發情期の蜻蛉の、異常な行動を記述して居るが、之なども亦、原始時代の結婚異風の一種である。

デクチツクの不思議な御馳走が済むと、後にはなほ、その器の基部が、もとのまゝに残つて居るが、この基部の、最も目立つ部分は、胡椒の粒程の大きさの、二ツの水晶様乳頭から成つて居る。この柄を

切り取る爲に、昆虫は奇妙な態度を取る。産卵管が、垂直に、半分程、地中に突込まれる。これが據りかゝりの棒だ。長い後肢が、脛節を腿から遠ざけながら、出来るだけ虫體を高める、そして劍と共に三脚を作る。

すると昆虫は、身體を圓い輪に曲げて、腮の端で、透明なゼリーの柄状をなして居る器の基部を、少しづつ抜き取る。そして抜き取つた細片を、丹念に嚙下する。唯の微分子と雖も失つてはならぬのだ。最後に、産卵管は觸鬚の先きで、洗はれ、拭はれ、磨かれる。萬事整然たる舊態に復し、あの邪魔な荷物の何一つとして残つて居ない。普通の姿勢にかへると、虫はまた野稗の小穂花をついばみ始める。

今度は雄に戻つてみよう。ふらく／＼になり、からつぽになつて、まるで、自分の大手柄の爲に打ちのめされたやうになつて、すつかり萎縮して、もとの場所にじつとして居る。あまりじつとして居るので、私は死んだのだと思つた。だが決してさうではない。この元氣者は正氣に返へつて、また立ち上つて、翅を磨いて、そして立去つて行く。それから十五分もたつて、二口三口食ふと、もうまた唱つて居る。勿論、その歌には活氣がない。到底結婚前程の響きと長持ちとはない。しかし、ともかくも、この精根の盡きた奴が、それでも出来るだけの事はして居る。

まだ他に戀を求めてでも居るのだらうか。どうもさうとは思へない。かうした事は、身の破滅にな

る程の浪費を要するので、二度と繰返へされる筈はない。身體がそれには堪へられまい。しかし、その翌日及びそれ以後になると、バツタ食のお蔭で、また元氣が戻つて来て、デクチツクは以前と同様にやかましく、その弓でかき鳴らす。まるで未経験の若者のやうで、もう飽きはてた老練家とは思へない。彼の固執が私を驚かせる。

若し彼の歌が、眞に、附近の雌の注意を惹くにあつたならば、彼は第二の花嫁をどうする事であらう。たつた今、生命の全貯蓄を集めたあの怪物のやうな袋を、自分の腹から引出したばかりの彼ではないか。否、重ねて云ふが、この大きな蠡斯にあつては、これ等の出来事は、繰返へして行ふには、餘りにも費への多いものである。否、今日の歌は、その陽氣さにも拘らず、たしかに賀婚歌ではない。そして事實、よく注意して見て居ると、この歌手はもう、行きずりの雌の觸角の愛撫に、答へる事をしない。日に日に、歌は弱り、稀になつて行く。二週間も経つと、虫は黙つてしまふ。絃琴はもう鳴らない。弓に力がないからだ。

遂に、老ひさらばへたデクチツクは、殆ど食物には手も觸れず、静かな隠棲の場所を求め、衰弱の爲、がつくりとくづをれ、長脚を伸ばして、最後の痙攣を起し、そして死ぬ。偶然、寡婦が其處を通りかゝり、この故人を見る。そして——千載の恨事にも——彼の片腿を嚙ぢる。

青いキリギリスも亦同様の事をやる。一組だけ別に、鐘形金網の中に入れて、特別に監視する。交

尾の終りの有様を見ると、未來の母は、直き後に述べる所の優美な木苺を、劍の基部の下にくつつけて、持つて居る。雄は、事件の爲にすっかり衰弱して、その時は黙つて居る。その翌日になると、元氣が恢復して、彼は前と同様に熱心に唱ふ。産婦が、その卵を地中に蒔きつけて居る間、彼は唱つて居る。産卵がもうすつと以前に終つて、種の保存が最早何物をも要求しない時になつても、彼は唱ひ續けて居る。

かうした執拗な歌の目的が、戀の呼びかけでない事は、明かである。この時分にはすべては終つて居る。しかも美事に終つて居るのだから。その中何日か、生命は衰へて、絃琴の音は絶へる。あの熱情の歌手は死んだのだ。生き残つた雌は、デクチツクのそれに模した葬儀を、彼のために營む。即ち彼の最良の肉をむさぼり食ふ。食はないでは居られないまでに彼を愛して居たのだ。

かうした同類相食の習性は、大多數の蠅類に見られるが、しかし、まだ生氣に満ちて居る愛人を獲物扱ひにする尼蠅の殘虐さには及ばない。母となつたデクチツク、キリギリス、及びその他は、少くとも憐れな雄の死後を待つて居る。たゞ一つの例外は、見た所如何にも柔和なエフィビジュールだ。私の虫小舎中で、産卵期が近づくと、その雌は、饑餓の口實が少しもないのに、好んで雄に齒を向ける。大部分の雄は、さう云ふ風にして、身體を半分食はれて、悲惨な最後をとげる。

寸斷された雄は抗争する。彼はまだ生きて居たいのだ。そして生きて居る事が出来るのだ。他に防

禦の道もないので、彼はその弓を動かして、いくらかの轢音を發する。この音は、今度こそ確かに、婚禮歌ではない。この瀕死の虫は、腹を大きく切り開かれて、陽の光を喜んだと同じ方法で嘆く。彼の樂器は、苦痛でも、喜びでも、同じ符で、表現する。

額白デクチツク——産卵——孵化

額白デクチツクは、阿弗利加の昆虫で、我が國では、プロヴァンス地方及びラングドック地方の外へは、殆ど出て行かない。彼には橄欖を熟れさせる太陽が必要なので、彼の異様な結婚風俗は、高い氣温の刺戟によるものか、それともまた、これは氣候とは關係のない、一家の慣例と見るべきものか。凍つた空の下でも、火のやうな空の下と同様の事が行はれるか。

私はもう一つのデクチツクを調べてみた。それはアルプ山のアナロット (*Analota alpina Yersin*) だ、一年の半分は雪に蔽はれたヴァントウー山の高い圓嶺に住んで居る。昔、私が植物採集に歩き廻はつた頃、私は幾度となく、この腹の太い虫が、礫石の間を、一ツの青々とした小座蒲團から、他の一ツへと跳ねて居るのを見たものだ。今度は、私はそれを捕りには行かない。その虫が郵便で私の所へ送られて来るのだ。私の指示に従つて、好意ある一人の森林監守人 (ヴォークリューズ縣、ポーモンの官有森林監守人ベロ氏) が、八月の月の前半中に、二度その山に登つて、虫小舎に充分澤山住まはせ得る程の虫を、私に供給してくれたのだ。

これは、色と云ひ、形と云ひ、まことに奇妙な齋斯だ。下方が天鷲絨のやうな白さで、上方は、或は橄欖色がかつた黒か、或は華やかな緑、若しくは浅い栗色だ。飛行器官は退化して、ほんの跟跡を留めるばかり、雌の翅鞘は、二枚の短い、白色の薄板で、互に遠く離れて居る。雄は、前胸甲の縁の下に、二枚の中低く鱗片を隠して居るが、同じやうに白く、しかし、左が上に、右が下に、相重なつて居る。

この二ツの極く小さな圓蓋は、弓と絃琴とを持つて居て、エフイビジュールの發音器と、可なりよく似て、たゞ全體の形が小さいだけだ。のみならず、この山の虫は、全體の外観から云つてもエフイビジュールと或る程度まで似て居る。

私はこんなに小さなシンバルが、どんな歌を奏で得るかを全然知らない。私は現場でこの虫の鳴くのを聞いた事を覚えて居ないし、三ヶ月間飼育してみても、この點に就いて、一向私に教へてくれる所がない。愉快さうに暮しては居るが、私の囚人たちは何時も黙々として居る。

國を遠く離れて來たこの連中は、橙色の罌粟や、寒地のユキノシタの間に住んで居た、彼等の寒い嶺々を大して惜しんで居る様子もない。その山々で、彼等は何を食つて居たか。アルプスの萱かスニ山の莖か、アルリオニのヤツシロ草か。私には分らない。アルプスの草がないので、家の畑のつまらないキクヂサを與へてみると、すぐに受容れられた。

餘り硬くないベツタもやはり受容れられた。それで、菜食と肉食とを交互にやる。同類相食すらもやる。若し私のアルプス生れの虫の中の、どれか一疋が、足でも痛めて、愚圖々々して居やうものなら、たちまち他の連中がこれをお食つてしまふ。此處までは、何一つ目新しい事もない。これなどは蠶斯類のお定りの習性だ。

面白い光景は、交尾の光景で、何等の前奏曲もなく、俄かに行はれる。出會ひは、或は地上で、或は籠の金網の上で行はれる。この場合には、劍を帯びた雌の方が、金網の目に獅嚙みついて、その一番の全重量を支へる。相手は、脊を下に、尻と尻とをくつけて、逆さになる。その肉色の腿をした長い後肢で、彼は花嫁の兩側腹につかまり、四本の前肢と、それにまた屢々肥で、斜に突立つて居る劍を握り抱きしめる。かう云ふ風に、一種の懸賞品を吊るした柱にぶら下つて彼は空間で仕事をす。

出會ひが地上で行はれる場合には、この一組の取る位置に變りはないが、たゞその時は、雌は地面に仰向けに横はつて居る。何れの場合にしても、その結果得る所のものは、一粒の蛋白石で、その外觀は、形と云ひ、大きさと云ひ、葡萄の種子の膨れた方の端に似て居る。

その物をちやんと目的の場所に置いてしまふと、雌は早速、極めて敏捷に、退散してしまふ。彼に取つて危険があると云ふのだらうか。私の見た所に據ると、どうもさうらしい。尤もそれは唯の一度だつたが。

その時は、問題の美人は、二疋の競争者を相手にして居るのだつた。一疋は、劍にぶら下つて、掬通り後方で仕事をして居た。もう一疋は、前方で、爪で押へつけられて、腹を喰ひ開かれて、身もがきながらこの悍婦に對して、無益な抗争をやつて居る。すると、悍婦は、平然として、その雄を少しづつ嚙つて居た。私は曾て尼蠶螂が、これよりもなほ一層殘虐な情況の下に、私に示した事のあるあの種々な身の毛もよだつ醜惡な光景を、目前に思ひ浮べて居た。放肆な發情、殺戮と姪佚との混淆恐らく大古の蠻風の名残りであらう。

普通の場合には、比較的小柄な雄は、仕事が済むと、大急ぎで、逃げ出す。捨てられた雌は身動きもしない。それから、約二十分程待つた後で、身體を輪に曲げて、最後の饗宴に取りかゝる。その膠質の種子を、切れぎれに引き抜いて、いとも嚴かに咀嚼し、味ひ、吞み下す。塊全部を嚥下するには、一時間以上かゝる。もう一片も残らなくなると、金網から下りて他の群に加はる。二日たつと産卵が行はれる。

證據は擧がった。額白デクチックの婚姻風俗は、氣候の激しさに誘發された一つの例外ではない。寒冷な山嶺の蠶斯も亦これを有し、しかも一段と非道いものである。

象牙の面をしたあの大形のデクチックに戻つてみよう。右に語つた奇怪な出來事の後、間もなく、産卵が行はれる。産卵は、卵子の成熟するに連れて、部分的に行はれる。母虫は六本の肢をしつかり

踏まいて、腹を半圓に曲げる。それから劍を垂直に地中に突込む。土は、私の虫小舎の中では、飾にかけてあるので、大して固くない。そこで産卵管は躊躇なく下り、その基部まで入り込むが、その深さは約一寸である。

十五分近くの間、じつとして居る。その間に卵を産みつけて居るのだ。遂に劍が少しく引抜かれる。そして腹が、可なり激しく、左右に振動する。これが、道具に、交互の横運動を傳へる。かうしてこの消息孔が、削られ、少しく擴げられる。かうして土材が壁面から剝け落ちて、穴の底をふさぐ。

すると、半ば引抜かれた産卵管が、この塵屑を押しつける。産卵管は何回も、激しく、ぐつぐつと、少し抜かれては、また突込まれる。棒で、堅穴の中の土を押しつける爲には、我々のやり方も、それと異ならない。かう云ふ風に、劍の横振動と、撞桿の衝撃とを交互に行ひつゝ、産婦は可なり敏捷にその穴を蔽ふてしまふ。

残る所は、外から見える仕事の跡を消し去る事だ。私は、この場合多分肢を使ふのだらうと思つて居たが、肢は何もしないで居て、産卵の際の位置を保つて居る。劍だけが、その先きで、甚だ不器用にではあるが、引掻いたり、掃いたり、均らしたりして居る。

萬事整頓する。腹と産卵管とは普通の状態に復する。母虫は一寸の間休んで、それから附近を一廻りしに行く。間もなく、既に産卵した場所に再び戻つて来て、やはり最初の地點が甚だ結構と認めて

そのすぐ側に、再びその道具を突込む。そして同じ事が繰返へされる。

それからまた休んで、また附近を調べてみて、また既に産卵してある場所へ戻つて来る。三度目も尖杭は、前の二ツの穴から、非常に近い所に下される。かうして、一時間足らずの間に五度、しかも何時も互に極く接近した地點に、附近を一寸散歩しては、産卵を繰返へすのを私は見たのである。

それに次ぐ幾日間か、長短さまざまの間を置いて、産卵が何回も行はれるが、その果して何回であるか、正確な所は分らない。これ等の部分的な産卵の各々に對して、場所は、偶然適當と認められた所で、あちら、こちらと變へられる。

すべてが終つた時に、私はデクチツクの穴倉を發掘してみる。バツタ類が作るやうな泡状の鞘の包もなければ、小房もない。卵はばらばらになつて居て、少しの保護物もない。私は一疋の母虫の産んだ卵の全數として、約六十個を採集した。卵は、百合色の、薄鼠色で、梭形に伸び、長さ五或は六ミリメートルの、幅の狭い楕圓體をなして居る。

同じやうな孤立の状態は、黒く彩色された、灰色デクチツクの卵、灰色をした、葡萄畑のエフィビジェールの卵、薄リラ色の、アルプスのアナロットの卵などにも見られる。青キリギリスの卵は非常に濃い、橄欖色がかつた褐色で、その數はやはり、額白デクチツクの卵と同様に、約六十だが、これは或は孤立し、或は幾つかの小群に膠着して居る。

これ等の種々な例によつてみるに、蠶斯類は苗差で、種子を蒔くものである。彼等はその種子を、バツタ類の例に倣つて、固い泡状の小樽に詰めないで、それを一つづつ、或は小さな群にして地に蒔くのである。

孵化は調査の價值があつた。その理由は後に述べる。そこで、大デクチックの卵を、八月の末に澤山採集して、一層の砂を敷き詰めた小さな廣口硝子瓶の中に入れる。卵は其處で外觀上何等の變化もなしに、八ヶ月を水氣無しに過し、天然の状態に於ては避け難い所の、霜や、俄雨や、激しい日射などから守られて居る。

六月が来ると、私は田舎で、よく若いデクチックに出會ふ。中にはもう成虫の半分位の大きさのものさへある。これは、その年の春に溯つて、早く出現した證據である。しかし私の硝子瓶の中では、近々孵化の様子が一向にない。八ヶ月前に私が採集したまゝの状態で、蛾も寄らず、褐色にもならず、まことに申し分のない様子をして居る。何故かうして何時までも、果てしなく孵化をのばして居るのだろうか。或る疑が私の心に浮ぶ。蠶斯の卵は、穀類の種子と同様に、地中にいけられる。其處で、卵は何等の保護なしに、雨雪の濕氣的影響を受ける。私の硝子瓶の中の卵は、一年の三分の二を、比較的乾燥の中に過した。恐らく彼等には、穀類の種子の發芽に絶対に必要なものが、孵化上缺けて居るのであらう。動物の種子は、地中にあつて、植物の種子に必要な濕氣を要求して居るのであらう。試して

みよう。

二三本の硝子の管——これによつて今日論んで居る若干の觀察をする事が出来るのだが——の底にもう時期遅れの、取つて置ききの卵の中から、一つまみの卵を取つて入れ、その上から、非常に細かい、濕つた砂を一層、軽く盛る。器は、濡れ綿で栓をする。この綿が、器の内部に、一定不變の濕度を維持するわけである。砂柱は、約一寸で、ほど産卵管が卵を生みつける深さである。私のこの設備を見て、しかも豫めその何たるかを知らぬ者は、殆どこれが孵化器であるとは、想像出来ない。寧ろ、植物の種子に就いて實驗しつゝある植物學者の、何かの道具だと思ふであらう。

私の豫想は正しかつた。夏至の高氣温に幸されて、蠶斯の種子は、間もなく發芽した。卵は膨らみ前端に大きな黒い斑點が二ツ出来るが、これは眼の下圖である。殻の破れるのも近い事と思はれる。十五日と云ふものは、寸分も怠りない倦々する監視の中に過ぎる。若いデクチックが、恰度卵から出る所を見ない限りは、永い間私の頭にこびりついて居る、一つの問題を解決する事が出来ないからだ。その問題とは、次のやうなものだ。

蠶斯類の卵が、地中にさし込まれる深さは、産卵管即ち苗差の大きさによつて、一定して居ない。我が國の蠶斯では、最も長い産卵管のあるもので、その深さ一寸と云ふのが、まあ限度である。

所で、生まれたばかりの虫は、夏間近くに、芝生の中を、不器用に跳ね廻はつて居るが、成虫同様

甚だ長い、髪の毛のやうに細い、觸角を載き、後部には、異常な二本の肢を備へて居るが、その肢たるや曲つた巨大な槌であり、普通の歩行には甚だ不便な、跳躍の長脚である。

この痺弱な小虫は、こんな邪魔な道具を持つて居て、どう云ふ風にして、地中から逼ひ出して來るか。どのやうな技巧によつて、ごつごつした地中に、一ツの通路を切り開くに成功するか、その羽根飾りのやうな觸角は、目に見えぬ程の砂粒に會つても、碎けてしまふし、その途方もなく長い腿は、ほんの一寸の努力にも、關節が脱れてしまふし、そんなものでは、どう見た所で、この小虫が、地面にまで達して、脱出する事は出來ない。

地中に下るには、坑夫は一種の保護服を身に纏ふ。この小さな蠶斯も、逆の方向に地を穿つに當つて、何か湧出用の服を着るに違ひない。彼にも何か、砂の間を通つて外部に來易いやうな、もつと簡單な、もつとまとまつた形があるに違ひない。恰度、蟬がその細枝から、尼蟻螂がその巢の迷路から出る際に利用する所のあの形に似た、何か脱出の形があるに違ひない。

現實と論理とは、この場合一致して居る。事實、デクチックは、私が今、目の前に見て居るやうな、既に前日に生まれて、芝生の上を跳ね廻つて居るやうな、そのまゝの形で卵から出るのではない。彼には、湧出る一層適した、一時的の構造があるのだ。柔い肉色の白さを帯びたこの小虫は、一ツの鞘に包まれて居り、それが爲に、六本の肢は、びつたりと腹にくつついて、後方に伸ばされ、何の働も

しない。地中を一層よく滑らんが爲に、彼はその長脚を、體軸の方向に従つて包んでしまつたのだ。觸角は、これ亦邪魔な附屬品だが、右の包みにびつたりとくつつけられて、動かないやうになつて居る。

頭は胸の上にくつと曲げられて居るが、眼のあとである大きな黒點を持つた、其のまだはつきりしない面は、少しく膨れて居て、潜水夫の兜を想はせる。

頭は、頸筋のあたりではつくりと口を開き、緩やかな鼓動をなしつゝ、膨れたり、しぼんだりして居る。之れが發動機なのだ。この嬰兒は、彼の後頭部のヘルニヤの力で前進するのだ。しぼむと、前部が濕つた砂を少しく押しつけ、小さなくぼみを掘りながら其處に潜り込む。それから、膨れると、前部は鉦となつて、びつたりとそのしぼみに嵌り込み、其處に手掛かりを作る。さうとすると後部が收縮する。それで一步前進した事になる。運轉膀胱の一鼓動毎に、道は一ミリメートル近くづゝ延びる。

このかすかに肉色を帯びた、生れたての肉が、その水腫病の頸筋で、荒い土を叩き、押しつける有様は、まことに可哀さうである。まだ充分凝結しない動物蛋白は、小石と闘ひ、傷つく。しかし彼の努力は、實に巧みに用ひられて居るので、午前中一杯で、一寸の長さに及ぶ眞直の、或は迂曲した地下道が、細い藁程の太さに開けられる。疲れ切つた昆虫が、かくてやつと地面に出るのである。

自分の穿つた脱出孔に、まだ身體を半分ばかりはめ込んだままで、この地から掘り出された虫は一息つき、元氣の恢復を待ち、それから、最後にもう一度、後頭部のヘルニヤを出来る限り膨らませて今まで彼を守つて来た鞘を破つてしまふ。小虫は彼の脱出服を脱ぐ。

之れでたうとうデクチックもその少年らしい體形を備へるに至つたが、未だほんに蒼白い。しかしその翌日になると赤黒くなつて、成虫に較べると、まるで黒奴である。成虫時代の象牙のやうな面の先驅的色彩として、彼は後の太腿の下に、一本の細い白線を持つて居る。

私の目の前で孵化した、可愛らしいデクチックよ、お前の一生の初まりは、お前に取つてまことに辛いものだ。自由の身となるまでには、お前の同類の多くのものは、力盡きて斃れるに違ひない。私の硝子管の中でも、見て居ると、多数は、一粒の砂に妨げられて、半途に斃れ、何か隠花植物の布で蔽はれてしまふ。徴は、彼等の軟い残骸を下方からも襲ふ。私が世話をしてやらない場合には、白日の下に出づる事は、更に一段と危険な事に違ひない。普通の土は荒く、日に灼かれて居る。一雨來ない限り、これ等煉瓦の下に監禁された連中は、どうするのであらうか。

飾にかけて、濕氣を興へた土を盛つた、私の硝子管の中では、それよりも遙に幸福で、白線の小黑奴め、お前はそれで地中から出られた。お前は私がお前に興へた高莖の葉をちよこちよこと噛み、お前を住はせてやつた金網の中で、悦しさうに飛び跳ねて居る。お前を育てるのは樂だと私は見て居る。

しかし、さうしても別に、新しい材料は大して得られさうもない。そこで、これでお別れとしよう。私はお前を自由の身としてやる。いろ／＼教へてくれたお禮に、庭の青草とバツタとをお前の自由にまかせてやる。

お前のお蔭で、私は、蠱斯類が、卵を産みつけられた地中から出る爲に、或る一時的の形を、或る初期幼虫の状態を有し、餘り邪魔な觸角と長い肢とが共通の鞘に收められる事を知つた。私はその木乃伊が、たゞ少しく伸びたり、縮んだりする事が出来るだけで、運轉機關としては、頸筋に一つのヘルニヤを有する事を知つたが、このヘルニヤは鼓動する一つの水腫で、私は進歩と云ふものが、他に之れを用ひた例を決して見た事のない、まことに風變りな仕掛けである。

額白デクチツク——發音器

藝術は、あらゆる物の領域に、三つの利用範囲を持つ。形と、色と、音とである。彫刻家は形を究め、鑿を以つて生命を模倣し得る限りに於て、あらゆる完全を模倣する。素描家と云ふのは、これまた模寫をやるのだが、白と黒との二色を以つて、平面上に、浮彫りの錯覺を與へんと努める。素描の困難さに、畫家は色彩の困難さを加へるが、この困難さも又なか／＼に大きい。

その兩者の前には、究め盡し難い一個のモデルが立つて居る。畫家の調色板は、如何なる豊富であつても、常に現實のそれに劣つて居るに違ひない。又、同様に彫刻家の鑿は、天然の塑造術の寶庫を種子切れにする事は決して出来まい。形と色彩、輪廓の美と光の作用は、すべての物を眺める事によつて會得される。それは我々の趣味に従つて模倣され、組合はされるが、決して發明はされない。

これに反して、生物の交響樂中に、我々の音樂は、模範を缺いて居る。勿論、弱いか強いとか、優しいとか壯嚴なとか云ふ音がないわけではない。髪振り亂した森林の中を咆吼しつゝ吹いて通る暴風、砂濱に渦を巻き返へす波、雲の反響の中に轟く雷、何れもその壯嚴な調子によつて我々を感動さ

せる。松の細葉を洩れる微風、春の花に戯れる蜜蜂の私語、少しでも鋭い耳を持つ者ならば恍惚たらしざるを得ない。しかしこれ等は單調な響であつて、その間何等の連絡もない。自然には素晴らしい音はあるが、音樂はない。

吠える、啼く、唸る、嘶く、叫ぶ、鳴く、きやん／＼鳴く、などゝ云ふ位で、體制上我々に最も近い動物の音聲學は終つて居る。これ等の要素を組合せて一つの樂曲を作つたら、それは雜音々樂とでも呼ばねばなるまい。顯著な一つの例外として、人間は、これ等の粗野な、騒がしい連中の首位にあつて、唱ふ事に氣づいた。他に彼と分つ者なき一つの屬性、即ち、言葉と云ふ比類なき天賦の才を派生させたあの音整理の特質が、彼を唆かして正しい母音發聲に赴むかした。モデルが無いだけにこの見習ひは随分骨の折れた事に違ひない。

有史以前の我等の祖先が、巨象の獵からの戻りを祝ひつゝ、木莓及びウツボグサの實で作つた粗惡な葡萄酒に酔つた時、何が彼の荒々しい咽喉から出で得たであらう。規則に叶つた一つの旋律だつたらうか。たしかにさうではない。巖蔭の隠れ家の、圓天井を振はせ得る程の、嘎れ聲だつたに違ひない。激しさが、叫聲の價値を爲して居たのだ。居酒屋を洞窟に、咽喉が熱して來ると、今日でもなほ、原始的の歌がよみがへる。

しかもこの粗野な聲のテノールは、今彼の捕獲し來つた巨獸の姿を、燧石の先きで象牙の上に巧み

に彫る術を、既に甚だよく心得へて居たのである。彼は彼の守神の双頬を、紅殻で化粧する事を知つて居た。彼は自分の身體を、色脂肪で彩色する事を知つて居た。形と色にはモデルが豊富にあつたが、拍子を取つた音にはそれが無かつたのだ。

咽喉聲で種々試みて居る中に、次第に進歩して、遂に樂器が案出された。生木の枝からそつくり切り取つた管を吹いた。大麥の莖を鳴らした。蘆の圓筒を吹き鳴らした。蝸牛の殻を、握り拳の二本の指の間に挟んで、鷓鴣の呼聲を真似た。幅廣の樹皮を角形に捲いて作つた喇叭は、牡牛の咆哮を發した。胡蘆の空らな腹の上に、何本かの腸の糸を張り渡したのが、絃樂器の最初の符をきしませた。山羊の膀胱をしつかりした框に張つたのが、膜樂器の初めだつた。二枚の平石を拍手を、取つて打合せたのが、カスタニエツトの憂音を傳授した。原始音樂の材料はそんな風だつたに違ひない。そしてこの材料は子供によつて保存されて居るが、子供は、その藝術的純朴さに於て、古の大きな子供の思出である。

希臘、拉丁の古代とても、殆どそれ以外の樂器を知らなかつた。それはテオクリット及びヴィルジルの牧人達が證明して居る通りで『汝は輕き野笛もて鄙びし節を奏す』(Sylvestern tenui musam-mediaris avena)とメリベがチチールに云つて居る。この燕麥の莖、この輕き野笛、と私の若い頃、我々は譯させられたのだが、之れから何を期待しろと云ふのか。この詩人は、修辭上の一つの形容として輕き燕麥莖(avena tenui)と云つたのか。それとも又、一つの事實を想ひ起して居たのか。私は

彼が一つの事實を想ひに起して居たのだと思ふ。私自身、野笛の合奏を聞いた事があるからだ。

それはコルシカのアジアクシオでの事だつた。一握りの菓子を買つた御禮に、附近の子供等二三人が、或る日私の許へ、セレナードをやりに来た。いきなり、粗野なハーモニーをどつと湧き立て、不思議な音が、稀らしい優しさを帯びて、私の所まで響いて來た。私は窓に駆け寄つた。合奏團は下の方に居た。藁束程の高さの子供等が、大真面目に輪形に集まつて、指揮者が中央に居る。大多數は青い玉葱の長莖を唇にあて、それを紡錘の腹のやうに膨らませて居た。他の連中は一本の莖、未だ熱して固まらぬ蘆の切れ端し、などを持つて居た。

彼等はそれを吹き鳴らして居た、と云ふよりも寧ろ、多分は希臘人の遺物であらう、ある嚴かな旋法で一つの哀歌(voceri)を歌つて居るのだつた。勿論、それは我々の解釋して居るやうな音樂ではなかつた。さればと云つて、形をも爲さぬ騒音でもなほさらなかつた。それは模糊、飄々として、素朴な不正確さを含んだ、一種の朗吟であつた。美しい響きの混合で、藁の笛聲が、膨らんだ玉葱の長莖の震へ聲に光彩を添へて居た。私は玉葱の尾の交響樂に啞然として感嘆した。牧歌の牧人たちは輕やかな燕麥莖(avena tenui)で大體こんな風にやつたに違ひない。馴鹿時代の花嫁の賀婚歌は、大體こんな風に唱はれたに違ひない。

さうだ、あのコルシカの子供たちの古風な語は、さながら、迷迭香に群れ飛ぶ蜜蜂の羽音の如く、

消え難き跡を、私の記憶に残した。私は今でもその音が耳に満ちて居る。その音楽は、今日ではすたつてしまつたある文學が、甚だ稱揚した所のあの牧歌的な野笛の價値を私に教へた。何と我々はこれ等の素朴な時代から遠い事か。民衆を喜ばせる爲には、今日では、銅製喇叭や、サクソフーンや、トロンボーンや、ピストンや、凡そ人の想像し得る限りの銅樂器と、それに小太鼓、大太鼓が必要であり、そして延聲には大砲の音が必要だ。之れが進歩なのだ。

今から二十三世紀の昔、希臘人はデルフの神殿に集ふて、日の神、金髪のフォイボスを祭つた。彼等は、宗教的感動に捉はれながら、アポロンの讚歌を聴くのであつたが、これは數行の旋律で、時折笛及び豎琴の、貧弱な和音にやつと支持されるに過ぎなかつた。しかもこの聖歌が、傑作として喝采を博し、大理石板に刻まれたが、それを考古學者等が最近に發掘して居る。

この、音樂的記録として最古のものである、尊い歌は、これ等、音の廢墟に相應はしい、石の廢墟たるオランジュの、古風な劇場で、唱はれたが、私は、火花が東の空に打揚げられる時は、西の方へ駆けつけると云ふ私の習慣に妨げられて、この盛典に列する事が出来なかつた。私の友の一人がそれを聞いたのだつたが、彼は非常に鋭い耳を持つて居つて、私に云ふ事には『あの巨大な半圓形劇場には、恐らく一萬の聴衆が居たに違ひないが、あの古い音樂を解し得た者が、たゞの一人でもあつたかどうか甚だ疑はしい。自分の事を云へば、私は何か盲人の哀歌を聞くやうな氣がして、鉢を突出して居る犬

の姿でも見えはしないかと、我れにもあらず見廻はしたものだつた。』

いや、實に野蠻な奴だ、希臘の傑作を、愚かしい哀歌だなんて！これは彼の不敬であるか。さうではない。たゞ彼の無能を語るだけだ。彼の耳は、別種の方式に従つて育てられて居るので、不思議なものとなり、餘り古きが故に不快なものとなつた、かうした素朴さを、樂しむ事が出来ないのだ。私の友には、原始時代の繊細さが、長い幾世紀のために押し殺されて、缺けて居たのだ。そしてそれは我々すべての者に缺けて居るのだ。アポロンの讚歌を味はふ爲には、或る日私をして、玉葱の莖のさゝやきを、このもしいものと思はしめた、あの單純な氣持にまで、後戻りしなければ、なるまい。だが我々にはさうなれる筈はない。

しかし、我々の音樂は、デルフの大理石像から何等の靈感を受ける事はないにしても、我々の彫刻及び建築は、常に希臘の作品中に、完全無比のモデルを見出すに違ひない。自然の事實によつて模型を強制される事がない爲に、音の藝術は變り易い。我々の移り易い趣味の故に、この世界では、今日の完全が明日の卑俗と化する。これに反して、形の藝術は、現實の不變の基礎に立つが故に、前の世紀の人々が、美を見た所に、常に美を見て居る。

音樂の型に至つては何處にもない。かのビュフオンが、壯重な文章を以つて稱揚した、鶯の歌の中にすらもない。私は何人をも憤らせる氣はないが、どうして私の意見を述べないで居やうか。ビュフ

オンの文章も、鶯の歌も、何れも私に何の感興をも起させない。前者は餘りに修辭の臭味があつてしかも、誠の感動が足りない。後者は、素晴らしい寶石箱に、響き高い眞珠を、下手に取り合はせたもので、心に向つて語る事餘りに少なく、僅か一錢の小さい水甕に、水を一杯はつて、それに一つの呼子の笛を添へれば、子供の唇だつて、この有名な歌手の一番立派な轉音を出す事が出来る。壺師の作つた小さな道具が、出鱈目に轉つても、鶯と競争する事が出来るのだ。

小鳥は、振動空氣柱の素晴らしい試みだが、それより上になると、吠えるもの、啼くもの、唸るものがあつて、遂に人間に至るが、人間ひとり語り、且つ眞に唱ふ。小鳥より下になると、鳴き（蛙の如く）、或は黙す。肺臓の輪には、二つの開花があり、それを距て、雜音の果てしない缺陷がある。更に下ると、其處には昆虫があるが、これは他に遙かに先立つものである。この地上棲息者の中の最初に生れた者は、また最初の歌手である。聲帯を振動させるに適した輪はないが、彼は弓と摩擦とを發明した。この發明を後世人間が實に素晴らしく利用する事になるのだ。

種々の膜翅類は、二つの粗面を互に摩り合はせて、音を發する。カミキリムシは前胸甲の環を、胸廓の殘餘の部と共に、關節上に動かす。平たい大きな羽根節を持つた松のコガネムシは、翅鞘の縁で脊の最後の關節環を引かく。ダイコクコガネ、その他も亦、これ以外の方法を知らない。實を云ふとこれ等の摩擦は、一種の樂音を生ぜず、寧ろ、錆びた軸の上を廻はる風見車のやうな轆音を發する。貧

弱で途切れ、途切れで、響きがない。

是等の未熟な轆音家中、私はムネアカコガネ (*Bolboceras Callicus Muls*) だけは區別したい。之れは特記に値するものだ。球のやうに丸く、額に一本の角を戴く事、西班牙ダイコクコガネに似て、しかも彼の如く糞食趣味を有せず、この優美な虫は、私の附近の松の林を好み、其處の砂中に一つの巢窟を穿ち、夕の光薄れる頃、母の翼のかけにうづくまつた、満腹した雛の、優しい轉りに似た音を發しつゝ、その穴を出て来る。平常は黙して居るが、一寸邪魔をされてもすぐ音を立てる。一つの箱に、一ダース程の虫を入れて置くと、快い交響樂を聞く事が出来る。尤もその音は甚だ弱く、耳を非常に近く持つて行かなければ、聞き取る事が出来ない。これに較べたら、カミキリムシ、ダイコクコガネ、松のコガネムシその他は、まことに下手な樂手に過ぎない。彼等すべてに取つて、要するに、それは決して歌ではなくて、たしかに恐怖の表現なのである。私は、苦惱の叫び、呻吟とまで云ひたい程である。昆虫は、危険の際にしかそれを聞かせない。私の知る限りに於て、決して婚姻の際には之れを發しない。

弓とシンバルを持つて、己が歡喜を表現する、眞の音樂家は、更に遙かに遠く溯つて居る。その虫は、完全變態によつて各自の高い階級を斷然主張して居る大玉押コガネ、蜜蜂、蠅、蝶等の、高等の體制を持つた昆虫に先驅したものである。彼は、地質學時代の組織な試作期に屬するものである。

事實、歌の巧みな昆虫は、必、半翅類（蟬）か、直翅類（キリギリス及び蟋蟀）かに屬して居る。

彼は、その不完全變態によつて、かの片剥石炭の薄片中に記録を留めて居る原始種族に屬するものである。彼は、無生物の漠たるどよめきに、生命の響きを交へた最初のものゝ一つである。彼は爬虫類がその息を吐く事を知つた以前に唱つて居たのだ。

此處に、單なる音響の見地から見ても、かの原始細胞の中に芽ぐむ進歩の、宿命的發展によつて世界を説明しようとする、我々の學說の無能が曝露されて居る。物皆未だ黙して居るに、昆虫ひとり既に、今日と同様の正確さを以つて唱つて居る。音聲學が最初に用ひた所の器官を、長い年代は、その根本に於て少しの變化をも之れに加へずに、相傳へて居る。次に肺臟が現はれたけれども、鼻の斷聲を除いては、全く黙して居る。所が遂に或る日の事、蛙の類が鳴いた、そして間もなく、何等の準備なしにこの不愉快な合唱に、鶉の顫音や、ツグミの鋭い笛の音や、ホホジロの抑揚などが來り加はつた。美事な咽喉が生れたのだ。所でそれより後に來た者は、之れをどうしたか。驢馬と猪兒とが、その回答を與へて居る。それは休止よりも一段と悪い事だつた。次第に非常な後戻りをやつて行つて、遂に人間の咽喉に至つて、最後の大飛躍を遂げたのだつた。

この音の發生に於ては、劣惡の次に中庸を來らしめ、中庸の次に絶好を來らしめる、漸進的進歩の存在を斷言する事は出來ない。其處には亂暴な飛躍、間歇、後退、前のものによつて豫告されず、後

のものによつて繼續されない所の、突然の開花をしか認める事が出來ない。一層深く探究する勇氣の無い者に取つての、あの便利な枕である所の、細胞の内在力だけでは、どうしても解き得ぬ、一つの謎をしか見出し得ない。

しかし、起源は到底我々の登り得ぬ高い世界だから、それは描いて、事實の世界に降つて見よう。諸大陸の最初の泥土が、ようやく固まつて行つた頃に、音藝術にデビューして、唱つて見る氣になつたこの古い種族の若干の代表者に質ねてみよう。彼等に、その樂器の構造と、その樂曲の目的とを質ねてみよう。

長い、太い後腿と、劍、即ち、卵を蒔く爲の苗差とによつて、實に、注目に値するキリギリス類に昆虫合奏の大部分は歸する。但し之れと屢々混同される蟬には、一步を譲らねばならない。たゞ一つ直翅類で彼を凌駕するものがある。それは、彼の極く近似虫である蟋蟀である。先づ、額白デクチャツクを聽いてみよう。

その歌は、最初に、乾いた、鋭い、殆ど金屬性の音で、ツグミが橄欖の實をたら腹食つて居る際、警戒して發する音に似て居る。それはチク、チクと云ふ、切り離れた音の連續で、甚だ間を置いて居る。それから次第にクレツシエンドーになつて、歌は急速な憂音となり、チク、チク、と云ふ基礎音は、不斷の鈍い低音に伴奏される。終曲には、クレツシエンドーはますます盛になつて、遂に金屬性

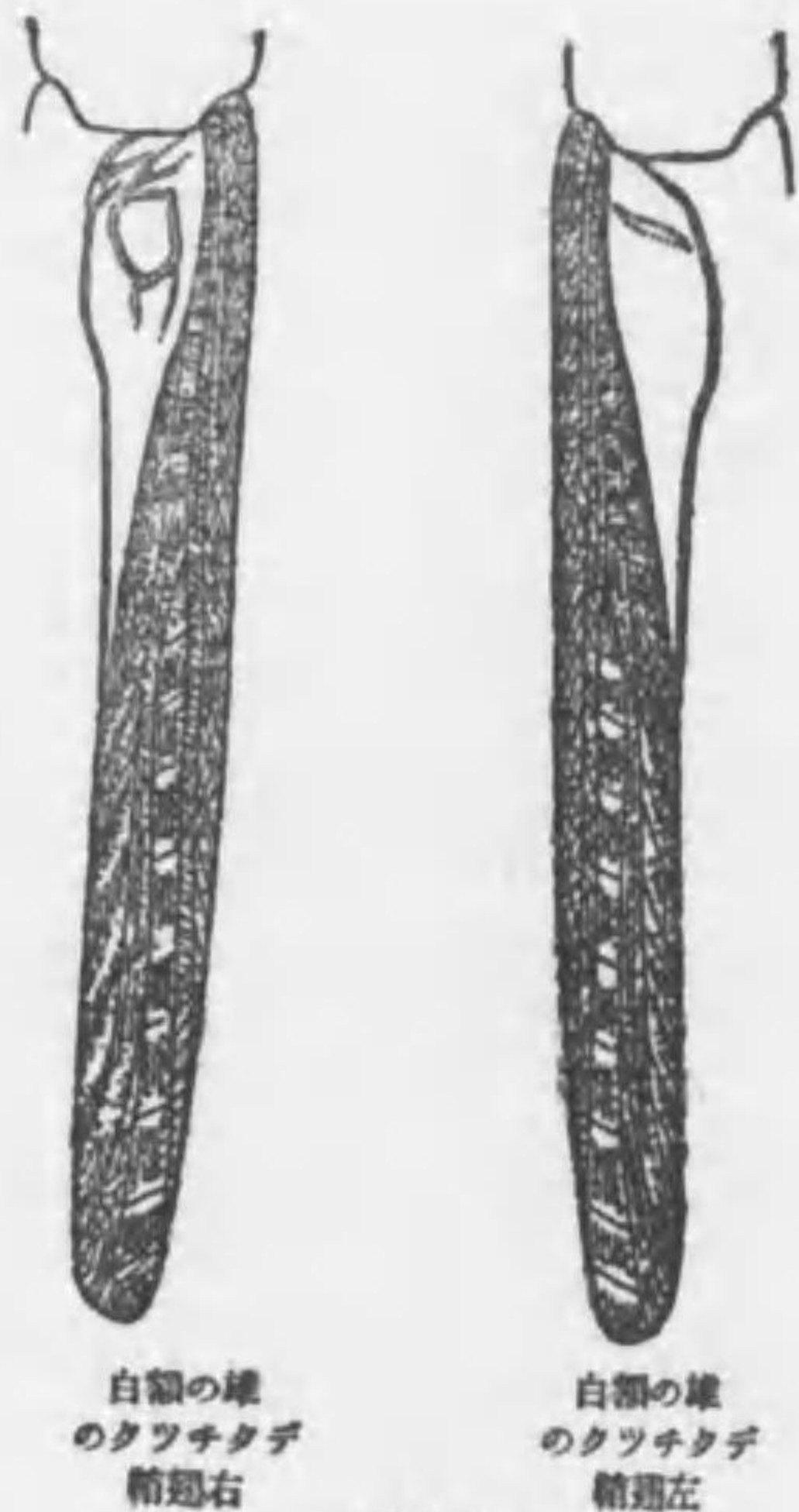
の音符が消え、音調は變じて單なる摩擦音となり、非常に速いフルルル、フルルル、フルルルとなる。

この達者な演奏家は、かうして、且つ唱ひ且つ休みつゝ、何時間も立て続けに続ける。天候の平穩な時、彼の歌が最高潮に達した時は、二十歩程の距離に於て、なほよく之れを聞き取る事が出来る。しかし、それはまこと小さいもので、蟋蟀及び蟬は、之れとは較べものにならぬ程の所まで、その聲が届く。

どう云ふ風にしてこの歌が發せられるか。この點に關して、私の調べて見る事の出来る書物は、私をまつたく途方に暮れさせる。何れの書物も、鏡(Mirrors)の事を語つてきかせて、それは、雲母の薄片のやうに薄い、薄い振動膜だと云ふ。しかしこの膜がどう云ふ風に振動させられるのか。その點に就いては何も云つてなく、或は甚だ漠然と、不正確にしか云つて居ない。翅鞘の摩擦だとか、翅脈の摩り合はせだとか云ふだけで、それ以外に何もない。

私はもつとはつきりした説明が欲しいのだ。何故かと云つて、キリギリスの樂器だつて、やはり、正確な仕掛けがある事を、私は前以つて、確信するからだ。そこで調べてみる事にしよう。尤も、多分、既に行はれて居る觀察を、繰返へすだけの事になるのかも知れないが、何しろ斯うして仙人のやうな幕しをして居る私には、本と云つては、端本になつた何冊かあるに過ぎないのだから、やむを得ない事としよう。

デクチックの翅鞘は、基部に於て擴がり、脊の上で、長三角形の、平な凹みを作る。之れが鳴響部なのだ。左の翅鞘は、右の翅鞘の上に重なり、休息状態に於ては、右の翅鞘の樂器を全く蔽ひかくしてしまふ。この樂器中、最もはつきりとして居る部分、大古の時代より最もよく知られて居る部分は



鏡である。之れは一つの翅脈の框の中に嵌め込まれて居る薄い卵形の膜の輝きの故に、さう名づけられて居るのだ。之れは小太鼓の皮であり、チンパノンの皮ではあるが、とても繊細なもので、打たれずして鳴ると云ふ遠ひがある。デクチックが唱つて居る時には、何物もこの鏡と接觸して居ない。振動は他の所で起こつて、此處に傳へられるのである。それは

どんな具合にか。次のやうにである。

その縁が、一つの鈍角の幅廣い齒によつて、基部の内角に延びて居るが、末端に一つの積を備て居るこの積は、其處此處に分布して居る他の翅脈よりも、一層突起し、一層丈夫である。私はこの積を、

摩擦翅脈と呼ばう。之れが鏡を鳴り響かせる振動の出発点である。器の残餘の部を知ると、それが明かに分るに違ひない。

この残餘の部分、即ち動力部は、平な縁で他の翅鞘を蔽ふて居る左の翅鞘の上にある。外部から見るとは何等著しいものもなく、たゞ僅かに、一本の丸ぐけのやうなものが、横にやゝ斜めに見えるが、これとても、さう云はれて見れば分る程度で、知らぬ者は、之れを單に、他の翅脈よりも少し太い一本の翅脈だと思ふに違ひない。

しかしその下面を、虫眼鏡で調べてみよう。この丸ぐけは、ありふれた翅脈よりも遙に優れたもので、それは非常に精確な一個の機械であり、鋸齒形のついた素暗らしい弓であり、如何にも小さい中に、整然たる事驚くばかりである。最も細い時計の部分品のために、人工の妙を盡して刻んだ金屬とても、決してこれ程の完全さに達し得たものはない。その形は彎曲した紡錘のやうで、一端から他端に至るまで、約二十四の三角形の齒が、まことによく揃つて、横に刻みつけられて居るが、その物質は硬く、磨滅の虞れなく、濃い栗色を帯びて居る。

この精巧を極めた小型の仕掛けの用途は一見して明かである。死んだデクチツクを持つて来て、二つの翅鞘の平な縁を少しく引上げ、鳴いて居る時の位置に置いて



大圖てめ極 弓のクツチツクの端

みると、弓はその鋸齒を、先刻私が摩擦翅脈と名づけた所の末端の翅脈の上に、噛み合はせる。齒の通る後をつけてみると、その一端から他端に至るまで、決して、振動さすべき點から離れない。そして、若し少しく巧みに之をやるならば、死んだデクチツクが唱ふ。即ち、彼の歌の符をいくつか聞かせる。デクチツクの發音法は、もう何等隠された所がない。左の翅鞘の齒のある弓が原動力なのだ。右の翅鞘の摩擦翅脈は、振動點だ。鏡の緊張した薄膜は、響鳴器で、框の振動を仲介として振動するのだ。我々の音楽にはまことに種々な振動膜がある。しかし、それ等は常に、直接打撃によつて振動する。我等の弦楽器製造者よりも一層大膽なデクチツクは、弓とチンパンとを組合はせて居る。

この同じ組合せは、他の蝨類にも見られる。その中で最も有名なのは青キリギリス (*Locusta viridissima* Lin.) で、立派な軀幹と、美しい緑の色彩の價値に、古典的名聲の名譽を合せて持つて居る。ラ・フォンテーヌに取つては、これは、朔風吹き來るに及んで、蟻の許に食を乞ひに來る蟬だつた。蠅も小虫も無くなつてしまつたので、この借手の女は、新春まで露命をつなぐ爲に、いくらかの穀物を貸してほしいと云ふ。この動物質及び植物質の兩食用法は、この寓話作者のまことによい思ひつきであつた。

事實、キリギリスは、デクチツクと同じ嗜好を有する。私の虫小舎でも、他に美味しいものゝない時は、高莖の葉を食つて居る。しかし彼の好物はバッタで、翅鞘と翅以外に何も残さずに、噛つてしま

ふ。自然の状態に於ては、青物をむさぼり食ふバツタを追ひ廻はす事によつて、我々の農作物を幾分先取りして食ふ所を、充分に償つて居るに違ひない。

若干の細目を除き、彼の楽器は、デクチツクのそれと同じである。彼の楽器は、翅鞘の基部に、暗黄色で隈取られた、褐色が、つた、曲線三角形の、廣い凹みを占めて居る。それは、紋章的形象文字を一杯に書き込んだ、貴族の紋章のやうなものである。左の翅鞘は、右の翅鞘の上に重ねられて居るが、下方から、二つの平行した横溝を刻まれて居り、その二つの溝の間が、下方に突起して、弓を形作つて居る。この弓は、褐色の紡織で、細かい歯があるが、非常に規則正しく、且つ非常に多數にある。右翅鞘の鏡は、殆ど圓を描き、しつかりと框にはめられ、太い摩擦翅脈がある。

この虫は、七八月、夕の微光に、十時頃まで唱ふ。その歌は、急速に廻る糸車の音で、聞き取り得る音の終り近くに、一つのかすかな金属性の憂音を伴ふ。腹は充分に下げ、鼓動して、拍手を取る。歌は、不規則な、幾樂章かの間続き、そして突然やむ。弓でほんの二摩り三摩り、また始まる眞似をして、ためらつて、それからまた盛にやり出す。

要するに、まことに貧弱な音楽で、響きに於てデクチツクのそれに及ばざる事遠く、蟋蟀の歌には較ぶべくもなく、況んや、あの騒々しい蟬の喧聲には到底較べられない。夕べの静けさの中に、數歩の距離に於て、ポール坊の鋭い耳を借りなければ、私にはそれが聞きつけられない。

私の附近に居る二種の小形デクチツク、即ち中間イブキギス (*Platycoleis intermedia* Serv.) と灰色イブキギス (*Platycoleis grisea* Fab.) とは、何れも、暑く日當りの、砂礫の多し、長さ芝草の中に屢々見出されるもので、捕まへやうとすると、たちまち藪の中に姿を消してしまふ。がその歌に至つては更に貧弱である。この腹太の二歌手は、各々別々に、虫小舎の歡待と倦怠とを味つて居る。

窓一杯に照りつける激しい日の光をあびて、私の小さなデクチツクたちは、野稗の青い種子と。また生餌とに、食ひ飽きた態である。多くは一番日當りのよい所に、腹逼つたり、横臥したり、後肢をうんと伸して居る。幾時間も、彼等は、じつとして、腹ごなしをして居る。彼等は、如何にも心地よいな姿態で、まどろんで居る。中に二三唱つて居る。いや、何と云ふ貧弱な歌だ！

中間デクチツクの歌は、音と沈黙とを、等しい長さに交錯させて、炭焼頬白鳥の歌に似た、急速なフルルと云ふ音である。灰色デクチツクの歌は、弓の運動の一つ／＼がはつきりとして居て、蟋蟀の朗吟を少しく模して居り、たゞ音が之れよりも嘎れて居り、殊に疊つて居る。どちらにしてもその音甚だ弱く、二メートルの距離に於ては、私には殆ど聞き取り得ない。

しかもこんなけちな音楽のために、こんなやつと聞えるか聞えぬ程の、一文の價値もない歌のため、この二つの一寸法師は、彼等の巨大な同僚が所有して居る、すべてのものを持つて居る。齒形のある弓、バスクの小太鼓、摩擦の翅脈がそれである。灰色デクチツクの弓には、四十近くの齒形を算

へ、中間デクチックのそれには二十四を算へる。その上、兩者何れにあつても、右翅鞘は、鏡の周囲

に、幾つかの透明な部分を示して居るが、これはきつと、振動部の面を、擴大するためであらう。それは兎に角、樂器だけは立派だが、その出す所の音は、まことに價値の少ないものである。

一本の、鋸齒形つき自在鉤で、一つのチニパノンを振動させる、この同じ仕掛を以て、誰か進歩を實現するであらうか。翅の大きい蠃類中唯一正とてもそれに成功して居ない。すべて、キリギリス、デクチック及びクビキリバツタ (Conocelphales) 等最も大形のものから、イブキギス (Platypleura)



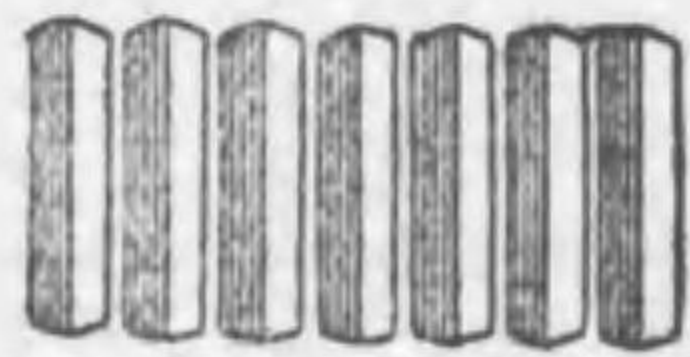
ルエジビイフエ

ササキリ (Xiphidion) ツネムシ (Phaneroptère) 等最も小形のものに至るまで、一本の弓の齒を以つて、振動鏡の框を、振動させる。すべて、左利である。即ち、弓を左翅鞘の下面に持ち、それが、タンパノンを備へた右翅鞘の上に重なつて居る。それにまた、すべてが、貧弱な、曇つた、時とすると殆んど聞取りがたい歌を持つて居る。

中に唯一正、樂器の全體の構造上は何一つ改革する所はないが、器の細部を少しく變へて、幾分強い音を出し得るやうになつて居る。それは葡萄畑のエフィビジェルで、翅はなく、翅鞘は減退して二個の中高の鱗片となり、等しく烙印形をつけられ、互に重なり合つて居る。この二

つの球帽狀被蓋は、飛行器官の名残で、絶對的に歌の器官となつたものである。一層よく唱はんが爲に、この虫は飛躍を斷念したのである。

彼はその樂器を、鞍形に曲げた前胸甲の、一種の圓天井の下に保護して居る。掬通り、左の鱗片が



第一の弓のルエジビイフエ
大擴てめ極

上部を占め、その下面に、一つの鋸齒付き自在鉤があり、虫眼鏡で見ると、二十四の刻みがあるが、他のどんな蠃類でも、これ程頑丈な、これ程はつきりと刻まれたのを持つものはない。右の鱗片は下方を占めて居るが、その少しく押

凹められた圓屋根の頂上に、一つの太い翅脈に縁取られた鏡が光つて居る。

構造の優美さに於て、この樂器は、二本の筋肉柱の收縮によつて、二個の燥いたシンバルの凸圓を、交るがはる、凹ませたり、放したりする、あの蟬の樂器より優れて居る。たゞこの樂器には、音響室、共鳴室が缺けて居るので、騒がしい樂器とはなれないのだ。それで居て、彼は、引摺るやうな、訴へるやうな、チイイ、チイイ、チイイと云ふ音を、短

旋法で聞かせるが、その音は、額白デクチックの、輕快な弓の響よりも、なほ遠くまで聞える。

平和を亂されると、デクチック及びその他の蠃類は、たちまち音をひそめるが、恐ろしさの餘りに聲が出ないのだ。彼等にあつては、歌は常に、歡喜の表現なのだ。エフィビジェルも亦、邪魔を恐れ、これを捕へんとする者を、俄の沈黙によつて、狼狽させる。しかしこれを掌中に捕へるならば

屢々亂れ勝ちな弓の運びで、再び唱ひ出す。この時は、勿論、彼の歌は、安樂を語るものではなくて、たしかに杞虞を、危險に對する惱みを語るものである。

同様に蟬も、無慈悲な子供が、その腹を引裂いて、その「御堂」をばつくりと開かせると、一段と聲張りあげて、鳴き叫ぶ。何れの場合も、歡喜に浸る虫の楽しい歌が、苦しめられた虫の歎きとなるのである。

エフィビジェルには、他の唱ふ虫の全く知らない、もう一つの特徴があつて、特記に値して居る。それは雌雄共に樂器を備へて居る事である。他の蝻斯類では雌は何時も啞で、弓と鏡とは跡すらも留めないのにこの虫の雌は、雄のそれに可なりよく似た、一つの樂器を得て居る。

左の鱗片は右の鱗片を蔽ふて居る。その縁には、蒼白い太い翅脈が形付けられて、目の細かい網を作つて居る。これに反して中央は滑かで、膨れ上つて、玉葱の皮のやうな赤茶けた色の球帽状になつて居る。この球帽は、下面に二本の會合線を有し、その中の主な線は、稜角上が少しくざら／＼して居る。右の鱗片も亦同様の構造ではあるが、たゞ次の一點が違ふ。即ち、中央の球帽は、之れまた玉葱の皮色だが、之れを横切つて一本の翅脈が、一種の迂曲した赤道を描き、虫眼鏡で見ると、その全長の大部分に亘つて、非常に細かい横の齒形がついて居る。

この特徴によつて、これが弓である事が分かるが、その位置たるや、我々の既に知る所とは反對で

ある。雄は左利で、上の翅鞘で奏で、雌は右利で、下の翅鞘で摩る。のみならず、雌には、何處を探しても、鏡、即ち一枚の雲母の薄片に似た、光つた薄膜がない。弓は、反對側の鱗片の、ぎざ／＼のある翅脈を横にこする。そしてさう云ふ風にして、重なり合つた二個の球帽が、同時に振動を起すのである。

振動體は、かう云ふ風に、二個だが、餘りに硬く、餘りに厚いので、充分の響を發する事が出来ない。その歌は、可なり貧弱な事も貧弱だが、雄の歌よりも一層哀れつぽい。虫はやたらには唱はない。私が世話をやかないならば、私の囚へて居る雌は、決して、虫小舎の伴侶たる雄たちの合唱に加はらない。その代り、捕まへて、苦しめると、たちまち、呻吟聲をあげる。

自然の状態に於ては、これとは様子が違ふものと思はれる。私の虫籠の中でこそ黙して居れ、雌が無意味に、二個のシンバルと弓とを備へて居るわけがない。恐怖にうめくこの器は、喜びの場合にも響くに違ひない。

蝻斯の鳴器は何に役立つのか、私は何も、この器が、雌雄の結合に一役受持つて居る事を否定し、これを聞く雌に取つて、やさしい、説伏せるやうなさゝやきを發する事を否認しようとは思はない。それこそ、明白そのものに反對する事にならう。しかし、その根本的の職能は其處にあるのではない。昆虫は、何よりも、生きる喜びを語らんがために、腹は満ちて、脊骨を日にさらす生活の歡喜

を唱はんが爲に、これを利用するのだ。その證據には、あの大形デクチックと、キリギリスの雄とは婚姻の直後、もう疲れ切つて、交尾などすつかり厭氣がさして居ながら、力の盡きるまで、愉快に唱ひ續けて居る。

蠡斯には蠡斯での歡喜の躍進があるのだ。しかも彼には、藝術家の單なる満足に過ぎない音によつて、これを表現する事の出来る特點がある。見て居ると、職人の小僧が夕方仕事場を引あげて、スーブが自分を待つて居るわが家へと歸つて行くが、道々、口笛を吹いたり、唱つたりする。しかしそれは自分一人の爲で、聲を聞かせるとか、聞いて貰ひたいとか云ふ氣持が、少しでもあるわけではない。殆ど無意識な無邪氣な眞情吐露によつて、彼は、辛い一日の仕事の終つた喜びと、湯氣のたつきヤベツの皿の喜びとを語つて居るのだ。鳴く虫の鳴くのも、大抵はそれと同じで、彼は生命を稱へて居るのだ。

中にはそれ以上の事をやるものもある。生活には楽しみもあるが、また惱みがないわけではない。中にはそれ以上の事をやるものもある。生活には楽しみもあるが、また惱みがないわけではない。葡萄牙の鞍擔ひ蠡斯は、その何れをも表現する事を知つて居る。引するやうな語で、彼は茂みに彼の幸福を語る。同じやうな朗吟を、殆んど變へる事なしに彼は自分の惱みや、恐怖を吐露する。彼の妻は、これまた器樂家で、この特權を彼と分つて居る。彼女は、別の型の、二個のシンバルを以つて歡喜したり、悲歎したりする。



ネガコゲヒ

要するに、鋸齒付き自在鈎のついたチンパンは、さう馬鹿にしたものではない。それは、芝生地を賑やかし、生の歡喜と苦難とをさゝやき、戀の呼聲をあたりに響かせ、獨り淋しくある者の長い待つ間を慰め、昆虫の最後の華やかな場面を語る。その弓の運びに湧き出る音は、殆ど人の聲に等しい。

しかもこの、約束に満ちた、素晴らしい天賦の才は、石炭期の亂暴な試作に屬する、粗野な性質の、下等な種族にしか、與へられて居ない。若し、高等の昆虫が、人の云ふ通り、次第に變形した祖先等から生れ來つたものであるならば、何故、最初から響高かつた聲の立派な遺産を保存しなかつたのか。

漸進的獲得論は、壯大なたぶらかしに過ぎないのか。強者が弱者を蹂躪し天賦の才の優れたものが、その劣れるものを蹂躪すると云ふ野蠻な説は、棄てねばならぬのか。進化論が、適者生存を我々に語る時、我々はこれを疑はねばならぬか。さうだとも、しかも大に疑はねばならない。

さう、ある種の蜻蛉が我々に忠告する。それは翼幅六センチメートルを超える、石炭期の蜻蛉 (Megaseia)



ボントミスウト

neura Monyi Brong)である。その鋸のやうな腮で、有翼の賤民共を恐怖にふるえ上らせて居た、あの巨人蜻蜓は消滅してしまつた。しかも、青銅色或は空色の腹をした、弱小なトウスミトンボは、相變らず我國の小川の燈心草の上を飛んで居る。

瑛瑛板で守られ、恐ろしい武裝をした、怪物のやうな蜥蜴魚は、彼と同時代のものだが、消滅してしまつて居る。彼等の極く稀な後繼者は出來損なひに過ぎない。貝殻に仕切りのある、あの素晴らしき頭足類の中には、車の輪程も大きい、或る種の渦狀貝などが含まれるのだが、今日の海には、その代表者として、小さな、消防夫の兜程の、鸚鵡螺しか居ない。斑龍 (megalosaur) と云ふのは、長さ二十五メートルの蜥蜴類だが、我が國で、壁の、灰色の蜥蜴とは、全く違つた姿を見せて居た。人間と同時代の、巨象マンモスは、建築物のやうな動物だがその遺骨によつてしか、知られて居ない。そしてその近似者たる象は、これに較べたら、微賤な羊に過ぎないのだが、相變らず榮えて居る。最强者生存の法則に對して、何と云ふ揆挫だ。强者亡びて、弱者がこれに代つて居るのだ。

一一一

青キリギリス

さあ七月の半ばになつた。曆の上ではこれから土用に入るのだが實際は、酷暑の時期が曆よりも先にやつて来て、この二三週間と云ふものは、堪らない暑さだ。

今晚、村では、國祭日を祝つて居る。お寺の鐘樓に、光を反射させて居るのが微かに見える。焚火の周圍には、子供等がはね廻はり、一發の花火が、何處かの暗い一角に、夜九時の比較的涼しい夜空に、一つ淋しく打揚げられる度毎に、太鼓がトロ、トロと鳴つて、これに壯嚴さを添へて居る間に、私は畑の祭の、收穫の祭の、音楽に聴き入つて居るのだが、この祭の方が、今、村の廣場で、火薬と、焚火と、紙の提灯と、殊に焼酎とで祝つて居る祭よりも、遙に壯嚴なのだ。それは、美そのものゝやうに單純で、力そのものゝやうに靜かだ。

夜は更けて、蟬は鳴きやんだ。光と熱とに飽き足りて、終日、交響樂に力を濫費したのだ。夜が來ては、彼等も休むのだが、その休みが屢々掻き亂される。鈴懸樹の厚く茂つた枝の中から、突然、苦惱の叫びのやうな音が、鋭く、短く起る。それは、靜に憩ふて居る所を、青キリギリスに、不意に襲

はれた蟬の、絶望的な悲鳴なので、青キリギリスは、熱心な夜の獵師として、蟬に飛びかかり、横腹をつかまへ、腹を食ひ破つて、その中をさぐる。音楽的大饗宴の後の、殺戮なのだ。

私は、我々の國民的喜悦の、至高表現たるロンシヤンの觀兵式を、一度も見た事がないし、また決して見る事がないに違ひないが、大して残念とも思はない。新聞で充分その模様は分かるし、新聞はその場所の略圖まで示してくれる。

それを見ると、其處此處の木立の蔭に、あの陰惨な赤十字の設備があつて、それに「軍用巡廻病院 市民用巡廻病院」などと記されて居る。してみると、骨の折れたのを繕はねばならなかつたり、日射病をさまさなければならなかつたり、そして殊によつたら、死んだ者を哀れまなければならなかつたりする事が、其處にはあるに違ひない。それはちやんと見越して、プログラムの中に入つて居る。

私の村は、ふだんは至極平和的なのだが、此處ですらも、祭は、歡樂の一日に是非なくてはならぬ薬味として、鐵拳の交換でもなしには、終らないに違ひない事は、私が手を火にかざして誓ふ所だ。快樂を、充分味ふには、これに、苦痛の唐辛子を加へねばならぬらしい。

聽かう。そしてあの騒音から遠く靜に考へやう。腹を裂かれた蟬が抗争して居る間に、彼方、鈴懸樹の上では、オーケストラを更えて、祭が続けられる。今度は、夜の藝術家たちの番だ。殺戮地點の附近の、青い茂みの中に、鋭い耳ならば、キリギリスのさゝやきを聞き取る事が出来る。それは糸車

のやうな、甚だ控目な、何か乾いた薄膜でもこすり合はせたかのやうな音である。この鈍い、連続的な低音部の上に、時々、性急な、甚だ鋭い、殆ど金屬的な憂音が、ぱつ／＼と聞える。それが歌と節なので、その餘は伴奏なのだ。

かうした低音部に助けられながらも、貧弱な音楽で、私の狭い附近には、約十疋の演奏者が居るに拘らず、要するに、まことに貧弱な音楽だ。その音には力が缺けて居る。私の古くなつた鼓膜は、必ずしも常に、之等の細い響きを捉へる事は出来ない。私の聞き取り得る、僅かばかりの音は、極めて優しいもので、黄昏の微光に、これ程相應しいものはあり得ない。可愛い青キリギリスよ、若しお前の弓の音に、もう少し幅があつたなら、北部地方で、お前の名と名聲とを篡奪して居る。あの嘎聲の蟬よりも、更に好ましい名手なのだ。

しかし、お前はどんな事をした所で、お前が樹の上の方で、四竹を鳴らして居る間に、鈴懸樹の根本で、順繰りに小鐘を鳴らして居る、お前の隣人の、あの愛嬌者の、鐘叩き墓には及ぶ事が出来まい。これは私の墓類中最も小さいもので、また遠征にかけては最も冒險的なものである。

幾度、暮れ残る夕の微光に、思ひを追ひつゝ、當てもなく、庭の中をさすらふ時に、お前に出會ふ事ではないか。何物かど、私の行手に當つて、逃げ出し、とんぼ返へりを打つて轉げる。風に追はれた枯葉かしら。さうではない。今巡禮の最中を、私に邪魔された可愛らしい墓だ。彼は太急ぎで、一

つの石とか、一塊の土とか、一茂みの芝草のかけに隠れる、そして間もなく、その澄んだ音をまた聞かせ始める。

この國民的歡喜の夕べに、彼等はたしかに一ダース近く、私の周圍に鐘の音を競ふて居る。大部分は、びつたりと寄せ並べて、私の住居の前に、一つの玄關を作つて居る、植木鉢の間に蹲踞まつて居る。或るものは低く、或るものは鋭く、何時も變りない一つの調子を、各自に持つては居るが、その調子は、短く、はつきりして、よく耳に満ち、且つ、快く澄んで居る。

緩りした、拍子を取つた、リズムで、彼等はまるで、何か連禱を、低吟して居るかのやう。こちらの一疋が、クルツクとやると、あちらの、もつと咽喉の細いのが、クリツクとやる。すると、一群中での高音部歌者たる、この第三番目のが、クロツクとやる。そして、それが、何か祭日の村の鐘の音のやうに、果てしなく繰返へされる。クルツク、クリツク、クロツク、——クルツク、クリツク、クロツク。

この墓の合奏隊は、私の六歳の少年の耳に、音の魔術が感じられ始めた頃の、私の渴望の的だつたあるハーモニカを思ひ起させる。それは、二本のリボン張り渡して、それに長さの違つた、何枚かの硝子の薄板を固定したものだつた。一本の針金の先端に、一個のキルクの栓を着けたのが打器だつた。オクターヴや、不調和音や、逆の調和音などを、この上なく滅茶苦茶な、亂暴さで、慣れぬ手で

出鱈目にこの鍵盤の上を叩く處を想像して見られるがよい。それが可なりよく、墓たちの連禱を現はして居る。

歌として、この連禱には、尾もなければ頭もない。純然たる音としては、まことに快いものである、自然界の音樂會に於ける音樂は、どれでもさう云つたものである。我々の耳は、其處に素晴らしき音を見出す。それから次第に精練されて、音的現實境以外に、美の第一條件たる、秩序の感情を獲得する。

所で、この一つの隠れ家から、他の隠れ家へと傳へられる、この優しい電鈴は、婚姻の歌であり、各雄より、その各自の雌への、慎み深い招きの歌である。この音樂會の結果は、之れ以上調べてみなくとも、想像は出来る。しかし、到底豫想の出来ないのは、婚禮の不思議な終曲だ。事實、婚禮が終ると、父墓は、この場合、語の高尙な意味での、眞の家族の父だが、やがて或る日の事、これは又何と意外の風體で、その隠れ家を立出でる。

彼は種族の未來を一包みにして、後肢の周圍に附けて居る。彼は胡椒の種子程の大きさの卵の房を脊負つて、引越しをするのだ。その尨大な荷物は、彼の脚腓を取り巻き、腿を包み、脊負袋のやうに脊にまで匂ひ上つて居て、彼はもう形も何もあつたものではない。

一體何處へ行くのだ。足を引摺りながら。もう飛ぶ事も出来ない程、重荷に悩まされて、彼は性來

のやさしい心から、母墓の行くを背けない所へ、行くのだ。彼は附近の水溜りへ行くのだが、その微温い水が、蝌蚪の孵化と生命とに、必要缺くべからざるものなのだ。産みつけられた卵が、何か一つの石の、むつとした屋根裏で、彼の脚の周囲で、恰度好い具合に熟すと、暗い乾いた所を熱愛する彼が、敢然として、濕氣と白日とを冒す。一寸行つては一休みしながら、疲労に肺臓を充血させながら、進んで行く。水溜りは多分遠いかも知れない。しかしそんな事は構はない、この執拗な巡禮は必ずこれを見出すに違ひない。

たうとう、着いた。早速彼は、非常に水浴が嫌ひなものにも拘らず、飛込む、そして、兩脚を摩り合はせて、たちまち、卵の房を落してしまふ。そこで卵は彼等の世界に置かれたわけで、あとはひとりで成される。卵を水に浸す役目が済むと、父墓は大急ぎで、乾燥して居る自分の家に歸る。彼が脊を向けたか向けずに、小さな黒い蝌蚪は孵化して、びち／＼動き廻はる。彼等は、その殻を破る爲には、たゞ水の接觸だけを待つて居たのだ。

七月の黄昏時の歌手の中で、たゞ一ツ、若しもその調子に變化があれば、墓の調和の好い小鐘と競ひ得るに違ひないと思はれるものがある。それはスコプス即ち、小公子と云はれる鳥で、金色の丸い眼をした、優しい夜の肉食鳥だ。額に二本の小さな、羽根の角を立てゝ居るが、それがために、この土地では、角鼻 (Machoto banarud) と云ふ名を頂戴して居る。その歌は、夜の静けさを、獨りで

満し得る程豊かではあるが、また堪らない程單調である。何物も掻き亂し得ぬ規則正しさを以つて、チヨ、チヨ、とこの鳥は、幾時間でも引續き、月に向つてその歌を咳きかける時には、やるのである。

恰度今、民衆歡樂の騒ぎに、廣場の鈴懸の樹を追はれて、その一羽が私の許に、一夜の宿を求めて來た。附近の糸杉の天邊にその鳴く聲が聞える。その高みから、歌の集ひを見下しつゝ、彼は均等の樂章を以つて、キリギリスと墓のごちや／＼したオーケストラを區切つて居る。

彼のやさしい調子に對して、時折、猫の鳴聲のやうな音が、他の地點から起る。それはあの、ありふれた鼻の呼聲だが、パラス、アテネの冥想鳥だ。終日、うつろな橄欖樹の隠れ家に、小さくなつてひそんで居て、夕昏の落ちた時に、やうやく、遍歴に取りかゝつたのである。鞆のやうに揺れながら、うね／＼と飛んで、何處か近くのあたりから、庭の老松へやつて來たのだ。そして其處から、全員總出の合奏に、不調和な彼の猫啼音を交へて居るが、距離が遠いので少しは、やはらいで聞える。

かうした騒がしい連中に混つては、青キリギリスの憂音は、餘りに繊細で、よくは聞えない。少しく四邊が静かになつた時、やつとかすかな夕立のやうに、聞えて來るに過ぎない。彼には、樂器として、貧弱な、弓付きの、タンパノンがあるに過ぎない。所が、彼等特權者たちは、肺臓と云ふ襦があつて、振動空氣柱を投げる。これでは較べものにならない。再び昆虫に戻つてみよう。

その中の一つは、大きに於て劣り、その樂器、また至つて貧弱ながら、しかも、夜の音樂に於て遙に



伊太利蟋蟀

キリギリスを凌駕する。それは蒼白い、ひよろ／＼の伊太利蟋蟀 (*Ecantus pellucens* Scop) で、いかにも虚弱さうなので、潰しさうで危なくつて捉まへ得ない程である。彼は、一方、螢が、祭をして遺憾なからしめんが爲に、彼等

の提灯に、青い火を點じて居る間に、あたり一帯の迷迭香の上で、合奏する。

この繊細な、器樂家は、何よりも先づ、雲母の薄片のやうにきら／＼した、薄い、非常に廣い麻の皮から成つて居る。このかさ／＼な、帆のやうな翅のお蔭で、彼は、暮の歌を壓倒し得る程の強さで唱ふ事が出来る。これで、弓の運びに、一段と光彩があり、一層の顫音が伴ふならば、ありふれた黒い蟋蟀の歌とも聞かれやう。この大暑の候には、春の合唱隊員たる、眞の蟋蟀は、既に姿を消して居る事を知らぬ者に取つては、この混同は避けがたい事であらう。この蟋蟀の優しいヴィオロンに代つて、なほ一層優しいもう一つのヴィオロンが奏でられて居るのだが、之れは特別に研究するだけの價値がある。適當な時機に再説する事としよう。

そこで、これがまあ、一粒選りの連中だけに止めれば、この音樂の夕の、重立つた合唱隊員であらう。即ち、哀音切々たる獨唱家スコプス、鐘でソナタを演奏する暮、ヴィオロンの細紋を摩する伊太

利蟋蟀、極く小さな鋼鐵の三角棒を叩くかの如き青キリギリス。

我々は今日、バスチューユ奪取以來政治的に開かれた新世紀を、實際確信して居るよりも、より以上の騒ぎを以つて祝ふ。所が、彼等は、人事には素晴らしく、無關心で、太陽の祭を祝つて居る。彼等は生きる事の喜びを唱つて居る。彼等は灼くやうな土用の讚美を唱つて居る。

人間とその歡喜の、かくまでも移り易きを、彼等に取つて何のかかはりがあらう！ 尻の役にも立たぬ、あの續け様の揚げ花火は、數年後には、誰の爲に、何の爲に、どんな思想の爲に、鳴りはためく事だらう。餘程先見の明ある者でない限り、それを云ふ事は出来まい。流行は變る。そして思ひがけないものを我々に持つてくる。氣の好い信管は、今日は偶像となつた昨日の惡者の爲に燦々たる火花を空に咲かせて居る。明日は誰れか他の者の爲に昇る事だらう。

一二世紀も経つたら、學者以外の間に於て、バスチューユの奪取がなほ問題にされるであらうか。甚だ疑はしい。我々は他の喜びを持つ事であらう、そしてまた他の嫌厭をも。

更に遠く未來を考へてみよう。どの點から見ても、必ずや他日、進歩に進歩を重ねた結果、人間は彼が文明と呼ぶ所のものゝ過度の爲に殺されて、亡びてしまふ日が來るに違ひない。彼は、餘りにも神を摸するに急で、禽獸のやうな冷靜な長壽を期待する事が出来ない。人間が消え失せてしまつた時
もなほ、あの小さな暮は、相變らず、キリギリスや、スコプスや、その他の虫と共に、彼の連禱を誦

して居るに違ひない。彼等は、この地球上にあつて、我等以前に唱つて居た。彼等は我等の後にも太陽の不易と、その灼熱の光榮とを稱へつゝ、唱ふに違ひない。

これ以上何時までも、この祭にぐづついて居る事はやめよう。そして、再び、禽獸の内生活を學び知らんと欲する博物學者に戻らう。青キリギリス (*Locusta viridissima* Lin.) は私の附近では、普通のものとは思はれない。昨年、この蠡斯類を研究しようとして、採集の結果が空だったので、私はある森林監守人の好意にすがらねばならなかつたが、彼は、樺の木がヴァントゥー山を攀登り始めて居る寒い地方の、ラガルドの高原から、この虫を一番、私の許に届けてくれた。

氣紛れから、幸運は、辛抱強い者に微笑みかけるものだ。昨年はどうしても見出せぬものが、今夏は殆どありふれたものになつた。私の狭い庭を、足一步も出ずして、私は欲しいと思ふだけ、キリギリスを取る事が出来る。夕方になると、あらゆる青草の茂みの中で鳴いて居るのが聞える。二度とこんなうまい事はないかも知れないから、出来るだけ利用しよう。

六月に入ると早速、私はこの發見物を、十分の番數だけ、金網の鏡形籠に入れ、これを鉢に盛つた砂床の上に伏せる。いや、まことに素晴らしい虫で、全身若緑に、兩横腹に沿ふて、二本の白みがかつた線が流れて居る。その柄の大きい所、その均勢のすらりとした所、その輕羅の大きな翅など、我が蠡斯類中、最も優美なものである。私は私の囚人たちに、すつかり喜んでしまつた。彼等は何を私

に教へるであらうか。それは先の事として、差當り、彼等を養はなければならぬ。

此處でまた、あのデクチックを飼つた時と、同じ困惑に陥つた。芝生に反芻する直翅類一般の食法に鑑み、監禁者等に高苜の葉を與へてみる。果して彼等はそれに食ひつくが、甚だ小食で、それにまた、如何にも輕蔑したやうな食ひ振りである。そこでもう、直ぐ分つてしまつた。彼等は餘り確信のない菜食主義者なのだ。彼等の望んで居るのは他の物なのだ。たしかに、生餌なのだ。だが、どの生餌だらうか。幸にも偶然の事から、私はそれを知つた。

未明に、私が戸前でお百度を踏んで居ると、そばの鈴懸の樹から、何かと、鋭い軋るやうな音を立て、落ちて來た。驅寄つてみると、それは一疋のキリギリスで、進退谷まつた一疋の蟬の、腹を空にして居る所だつた。蟬が如何に叫び、もがいても、その甲斐がない。相手はどうしても放さず、頭を臟腑の底に突込んで、それを少しづつ食ひ取つて居る。

これで分つた。攻撃は、早朝、蟬の休んで居る間に行はれたのだ。そして、生きながら解剖されたこの不幸な蟬の躍動が、攻撃者と被攻撃者とを一包みにして、落したのだ。その後も幾度となく、之れと同じやうな虐殺の光景を目撃する機會を、私は缺かなかつた。

そればかりではない。大膽さも此處まで來れば頂上だが、キリギリスが、夢中になつて飛んで逃げる蟬を、追ひかけて居るのを見た事すらある。まるで隼が、大空の眞只中を、雲雀を追ひかけて居る

やうだ。しかし、この掠奪の鳥も、この場合、この虫には及ばない。彼は自分よりも弱いものを襲ふが、この蠃斯は、反對に、自分よりも遙に大きい、一段と力の強い、一個の巨人を攻撃するのだ。しかも、この均衡の取れぬ一騎打の結果は、決してあやふやなものではない。キリギリスは、砥ぎすました鉄のやうな、彼の強大な顎で、その捕虜の腹を食ひ裂き損じする事は稀である。捕虜の方では、何も武器が無いので、僅かに叫んで身體を動かすだけだ。

そこで、要は、之れを取つて押へる事にあるのだが、夜の眠りの間なら、これは可なり容易い事だ。どんな蟬にしても、夜の巡羅中の殘虐な蠃斯に出會つたが最後、無惨な死を遂げねばならない。これで、あの、夜おそく、飛んでもない時分に、もう夙うにシンバルが音をひそめてしまつた頃に、時として、枝の間から、俄に起る苦惱の軋音の正體がわかつた。しやれた緑の衣を纏ふた、悪漢が、どれか睡眠中の蟬を捕へた所なのだ。

私の寄宿生たちのお好みの品が分つたので、私は彼等を蟬で養ふ事にした。この献立が大變彼等の氣に入つて、二三週間で、虫小舎の地上は、頭や、空の胸廓や、引千切られた翅や、關節の脱れた肢などの散亂した、一つの骸骨置場と化してしまつた。腹だけが、殆ど全部、消え失せてしまふ。これが特選の品で、大して實質的ではないが、非常に好味のものらしい。

事實、其處には、この虫の胃袋の中には、蟬が錐で、軟かい樹皮から湧出させた、甘い樹液が集まつ

て居るのだ。この美味の故に、この生餌の腹は、どんな他の部分よりも、一層好まれるのであらうか。或はさうかも知れない。

事實、食餌法に變化を與へようと思つて、極く甘い果實や、梨の一片や、葡萄の粒や、メロンの切れなどを與へて見ると、何でも非常に美味さうに賞味される。青キリギリスは、英國人みたいで、血のしたゝるピフテキにジラムをあしらつたのが大好きなのだ。さう云ふわけで、多分、彼は蟬を捉へると、肉と甘味との混つて居る腹を、先づ第一に食ひ破るのでらう。

砂糖味の蟬を食ふと云ふ事は、何の國へ行つても出来る、と云ふわけにはいかない。青キリギリスの豊富な、北部地方では、當地で彼を熱中させて居る所の料理を、見出す事は出来まい。他に何か手段があるに違ひない。

それを確める爲に、アノクシー (*Anoxia pilosa* Fab.) を與へて見る。これは春の黄金虫に相當する夏の虫だが、この膜翅類は早速受容れられる。たゞ翅鞘と、頭と、肢とを残すばかりである。あの素晴らしい、太つた、松の黄金虫 (*Melolontha fullo* Lin.) を與へてみても、結果は同じで、翌日になつて見ると、この豪勢な虫の身體が、私の屍體分解者の一隊の爲に、腹を食ひ破られて居る。

これ等の例の教へる所でもう充分である。それによると、キリギリスは熱心な昆虫食ひで、殊に、餘り硬い装甲に守られて居ない昆虫を嗜食する事が分かり、又、彼が非常な肉食家ではあるが、生餌以外

は何物をも受付けられない蟻螂のやうに、絶對的肉食虫ではない事が分かる。蟬の斬罪執行者は、餘りにも腹のやける食物を、野菜で緩和する事を知つて居るのだ。肉と血との後では、甘い果肉を食ひ、時として、已むを得ない場合には、少しばかりの草を食ふ。

しかし、それでもやはり、同類相食は依然として行はれて居る。尤も、私のキリギリス籠では、あの競争者に銚を打込んだり、愛人を食食したりする、尼蟻螂の間に頻々と見かけるやうな、あんな蠻風は決して見られないが、しかし、若し、どれか弱い奴が斃れると、生き残つた連中は、普通の生餌をでも食ふやうに、その屍體を食ふ事を、殆ど缺かさない。食糧缺乏の口實もないのに、彼等は死んだ仲間の肉を食ふ。尤も、劍を帯びた連中は、どれもこれも、程度に差こそあれ、不具に陥つた仲間の肉で、腹拵らえをする傾向はある。

この點を除けば、キリギリスは甚だ平和的に、私の鐘形虫籠の中に共棲して居る。決して彼等の間には、大喧嘩はない。たかゞ、食糧の事で、少しばかり競争する位の事である。例へば、一つの生餌を入れてやると、一疋のキリギリスが、早速それに獅嚙みつゝ。そして、この美味しい肉塊を嚙りに来るものがあれば、誰でもかまはず、意地悪く、足蹴にして、追ひのける。利己主義は到る處に見られる。このキリギリスが満腹して、その場所を誰か他の者に譲ると、其奴が今度は頑固に他のものを寄せつけない。一疋づゝ、虫小舎全部の虫が、順々に來て、腹を拵らえて行く。胃袋が一杯になると

臆の端でちよつと足の裏を搔き、肢を唾液で濡らして、額と眼とを磨き、それから、金網にぶら下るか、冥想的姿勢で砂上に伏して、如何にも幸福氣に腹ごなしをし、一日の大部分、殊に暑熱の最盛りを、午睡に過ごす。

夕方、日が落ちると、この一群は動き出す。九時頃が、賑はひの頂上である。亂暴に突き進みながら、圓屋根の天邊に攀登り、同じ急がしさで下り、そしてはまた登る。騒がしく往つたり、來つたり。圓い馬場を驅けたり、跳ねたり。美味しいものにぶつゝかると、足も止めずに、一寸それを味はつてみたりする。

雄たちは、こちらから、あちらから、わきの方で鳴き立て、通りがりの雌を、觸角で愛撫する。未來の母は、劍を半ば空さまに舉げて、嚴かな足取りで歩き廻はる。これ等の落着かない、熱に浮かされた連中に取つて、目下の最大事は、交尾である。經驗のある眼で見れば、それを見過る事はない。

これはまた私に取つて、重なる観察の目的である。私は虫小舎にキリギリスを飼ふに當つて、あの額白デクチツクが我々に知らしめた所の不思議な結婚風俗が、どの點まで普及して居るかを知る事を、殊に目的としたのだつた。私の望みは叶へられた。しかし完全にではなかつた。それは、事件の起る時刻が遅くて、婚姻の最後の幕を見る事が出来ないからで、夜非常に更けてか、朝早くかでなければ事は行はれないのである。

私を見る事の出来た僅かばかりの事は、何時果てるとも思はれぬ序曲に限られて居る。戀着の二三足は面々相對し、殆ど額と額と相接して、その軟かな觸角を以つて、互に相觸れ、相尋ねて居る。まるで二敵手が静かな竹刀を、交へては離れ、交へては離れして居るやうである。時々、雄は少しく唱ひ、弓を振つて斷音を發するが、ちぎに黙つてしまふ。多分餘りにも胸がせまつて續け得ぬのであらう。十一時が鳴る。それでも戀の告白はまだ終つて居ない。まことに遺憾至極だが、睡氣には勝てぬので、私はこの一組を見棄てる。

その翌日、朝の中に、雌は、あのデクチツクにあつて、幾度となく我々を驚かせた不思議な代物を、産卵管の基部に、ぶら下げて居る。それは蛋白石色の硝子球で、大きな豆程の大きさで、少數の卵形小囊に細分されて居る。雌のキリギリスが歩くと、その物は地面に觸れて、ねばり着いた砂粒に汚される。

あのデクチツクの母虫の、最後の饗宴は、キリギリスに於ても同様に、その醜惡さを悉く示して居る。一時間程経て、この精囊が、その内容を乾しつくされると、雌のキリギリスは、それを小さく喰ひ切る。そして永い間、そのねち／＼した塊りを、嚙んで嚙んで、遂にそれを全部吞下してしまふ。半日足らずにして、その蛋白石の荷物は、味はれ、最後の一片まで食はれて、無くなつてしまふ。まるで、他の遊星からでも持つて來られたかのやうな、それ程、この地球上の慣習からかけ離れて

居る、想像も出来ぬ事が、大した變化もなく、デクチツクの後には、キリギリスの生活に、再び見られるのである。陸上動物中の最古參者の一たる、蠃斯類の世界は、何とまあ奇妙な世界なのだ！ しかしかうした不思議な數々は、蠃斯類全部に亘つての通則と思はれる。もう一つの帶劍者をしらべてみよう。

私はエフィビジェル (*Ephippigera vitina Serv.*) を選んだが、之れは、生餌と、莖葉の葉で育てる事が實に容易である。事件は七月及び八月に行はれる。

雌は少し離れて唱つて居る。その弓の運びは、熱情的に區切られ、虫の身體全體を振動させて居る。招く雄と、招かるゝ雌とは、徐々に、緩りとした、そしてどうやら儀式張つた足取りで、相接近する。面々相對し、何れも沈黙し、不動で、觸角をゆるやかに揺り、前肢を不器用に擧げて、時折、握手のやうなものを取り交はす。この穩かな差し向ひは數時間續く。何を云ひ交はして居るのか。どんな誓ひを取り交はして居るのか。彼等の秋波は何を意味するのか。

しかしまだ時機は來て居ない。袂を分かち、仲違ひして、各々勝手な方に立去つて行く。しかし、氣不味さは長くは續かない。そこで再び相寄る。やさしい戀の告白が、また始まるが、やはりうまく行かない。遂に、三日目に、私は序論の終りを見る。雄は、蟋蟀の慣例に隨つて、後ずさりに、遠慮勝ちに、雌の下に身體をすり込んで行く。後方に、仰臥して、彼の支柱たる産卵管に獅嚙みつゝ。そ

こで交尾が行はれる。

その結果一つの巨大の精囊が出来るが、まるで粒の大きな、蛋白石様の木苺のやうである。その色及びその形は、蝸牛の卵包を想ひ出させる。この外觀は、あのデクチックが一度私に見せてくれたものだが、デクチックにあつては、それほどかつきりはして居なかつた。また之れは青キリギリスの精囊の外觀でもある。中央に浅い溝があつて、全體を均整的の二つの房に分ち、各房には七つ或は八つの小球が含まれて居る。産卵管の基部の左右に位する、二つの結節は他のものよりも一段と透明で、強い橙紅色の中核を含んで居る、その全體は、透明な物質を練り固めたやうな、一つの幅廣い小さな足で附着して居る。

その物がちやんとその場所に附着すると、へとへとになつた雄は、早速逃げ出して、一塊の梨の上へ行つて、今の命がけの壯擧の疲れを慰やす。相手は、そんな事には一向お構ひなしに、可なり歩みにくさうに、大さから云つて、虫の腹部の半分に相當する程の、怪物のやうな荷物たる、彼の木苺を少しく引上げながら、籠の金網の上を、小股に歩きまはる。

かうして二時間、三時間の時が経つ。それからエフイビジェルは身體を輪に曲げて、腮の端で乳頭狀の小袋の薄片を摘み取るが、それを破る事なく、内容を潰ぼさないやうにする事は、云ふ迄もない。極くその表面の皮を剥ぎ、その細かい切れを取り上げ、永々と咀嚼して呑み下す。午後一杯は、

かうした微分子程の大きさの切れを、こつ／＼と食ふのに費される。翌日になつてみると、木苺は、夜の間に全部嚙下されて、消え失せて居る。

また時には、終曲がそれ程迅速でなく、殊にそれ程醜惡でない場合がある。私の記録してある一疋のエフイビジェルは、時折、その小袋をちよい／＼と噛みながら、それを地上を引ずつて居た。地は、最近にナイフの先端で引搔いてあるので、不平均に凸凹して居る。硝子球のやうな木苺は、砂粒や、土塊がねばり着いて、著しくその重さを増したが、虫は一向それを氣にかける様子もない。

時には、その塊が、どうしても動かし得ない何かの土塊にくつ／＼してしまつて、運搬がまことに困難な事がある。それを取り除かうとして随分努力をしても、その物は産卵管下の懸垂點から離れない。相當しつかりと附着して居る證據だ。

宵の中一杯、或は金網の上を、或は地の上を、エフイビジェルはあてもなく、心配さうな様子でさまよつて居る。それよりもなほ屢々、彼はじつと立止まつて居る。硝子球は少しく凋むが、大して容積を減じない。最初幾口かむしり取りはしたものの、その後は最早それを繰返へさず、むしり取られた僅かの部分もたゞ表面だけにしか及んで居ない。

翌日になつても、同じ状態に止まつて居る。その翌々日になつても、何も變つた所はない。たゞ、硝子球が一層凋んで、しかし、その二つの眞赤な點は、最初と同じやうに強い色を保つて居る。遂に

附着して居る事四十八時間の後に、この物は、虫が何もしないのに、ひとりで脱落する。

小塚はその内容物を譲り渡してしまつたのだ。今ではかさ／＼のからで、皺が寄つて、原の姿もなく、大道に捨てられて、早晚、蟻の獲物となるだけだ。他の場合には何時も、エフィビジェルがあれ程までこの塊を、嗜み食ふのを見たのに、之れは何故かうして捨てられるのか。多分、この婚禮の料理は餘りにも砂粒に汚されて、齒を加へるに堪へない爲だらう。

もう一つのキリギリス類で、ファネロプテール (Phaneroptera falcata Scop.) と云ふのは、鎌形に彎曲した、短い新月刀を帯びて居るが、私の飼育の辛勞を、一部償つてくれた。幾度か、しかし何時も、完全な観察を行ふには不十分な條件の下に、私は彼がその劍の基部に授精器をぶら下げて居る所を、不意に發見した。それは透明な、卵形の、三四ミリメートルの小瓶で、水晶の糸で支へられて居て、その頸は、膨らんだ部分と殆ど同じ長さである。虫はその小瓶に觸れる事なく、そのままに涸れ、涸れるにまかせて居る。(註。この面白い題目に關し、一層廣汎な細目を述べると云ふ事は解剖及び生理が



ル - テ プ ロ ネ ア フ

必ずしも常に自由に論じられない本書の如き書物に於ては、相應しい事ではあるまい。それを見たいと思ふ者は蠡斯に關する私の研究——一八九六年、自然科學年鑑——を見られ度い)

この問題は之れ位に止めて置かう。デクチツク、アナロツト、キリギリス、エフィビジェル、ファネロプテール等、實に種々と異なつた種類によつて供給された、右の五つの例によつて、蠡斯が蝸蠃及び頭足類と同様に、古代風俗の、死に遅れた代表者である事が證明された。彼は古い時代の、奇異な生殖習慣の、貴重な一見本を我々に保存して置いてくれる。

蟋蟀——巢窟——卵

名聲殆ど蟬に等しい、鄙の蟋蟀は、芝生地の賓客で、古典的昆虫の數に入つて居る。尤もこの數は甚だ制限されては居るが、しかし甚だ名譽あるものである。彼がこの名譽を博したのは、彼の歌と彼の住居の爲である。たゞ一つ彼の名聲には缺けて居る點がある。どう忘れたものか、まことに遺憾な次第だが、あの禽獸をして語らしむる術の達人は（譯者註、ラ・フォンテーヌの事）、彼のために、やつと二行程を献げて居るに過ぎない。

彼は、彼の寓話の一つに於て、兎が自分の耳の影を見て、恐怖に捉えられる所を語つて居るが、それは口の悪い奴等が、角を持つて居ると云ふ事が危険な際に、この耳をきつと角に決めてしまふに違ひないからであつた。そこでこの用心深い動物は荷拵へをして立退く、

おさらば、隣りの蟋蟀さん、私は此處を立退きますよ。

私の耳だつてしまひには角にされるかも知れませんかね。

すると蟋蟀がそれに答へて、

角だつて、それが！人を虚假におしでないよ！

立派に神様から授つた耳ぢやないか。

兎はなほも云ひ張る。

きつと角に決めてしまふよ。

そして、それつ切りである。ラ・フォンテーヌが、この昆虫に、もつと長々としゃべらせなかつたのは、何と云ふ残念な事だ！既に巨匠の才の片鱗を示して居る二行の詩句に、愛嬌者の蟋蟀は描かれて居る。いや、慥かに、彼は虚假ではない。彼の大きな頭を以つてしては、何か立派な云ひ草を見出す事が出来たに違ひない。だが結局、兎が訣別の辭を手短かに切上げたのは、多分過りではなかつたのだらう。人の誹謗が身邊に迫つて來た時は、逃げるのが一番だからだ。

フロリアンは、別の主題で、彼の物語に幾分の幅を與へて居る。だが、フロリアンとなると、あの好々爺（ラ・フォンテーヌの事、譯者註）の奇想と何と遠く隔つて居る事か。彼の寓話「蟋蟀」の中には、花の咲いた草と蒼空とがあり、時流を追ふ青年と自然婦人とがあり、まあ、語のために實を忘れる、生命のない修辭學の冗言がある。それには、眞の素朴さが缺けて居り、それに又、必要缺く可らざる藥味たる辛辣味が缺けて居る。

それに又、わざ／＼、蟋蟀を、己が身の上を嘆く、不満者とし、絶望者とするなどは、何と云ふ

馬鹿氣た考へだ。蟋蟀の生活をよく見て居る者は、彼が、それとは反對に、彼の技能と彼の穴とに甚だ満足して居る事を知つて居るのである。尤もそれは、この寓話作者が、蝶の失敗後に、彼をして告白させて居る所ではある。

さあこれで私はどんなに私の深い隠家が好きになるだらう！
幸福に暮すには、隠れて暮さう！

私は、既に「蟬と蟻」(La Cigale e la Fourmigo)と云ふプロヴァンス語の一篇を拜借した事のあるあの無名の友の訓話の方に一層の力と、一層の眞理とを見出すのである。私は茲にもう一度、彼を、彼の意思に反して、危険な型文字の名譽に曝すが、どうかゆるして貰ひ度い。

蟋 蟀

虫の歴史の云ひ傳へによれば
曾て一疋の貧しい蟋蟀が
戸口で日向ぼつこをしながら見ると
一疋の立派な蝶が飛んで行く、

その蝶は二本の長い尾をもつて
素晴らしく、何と立派に飾られて
青い月形が列に連なり

黒線に、大きな金の點がぼつん。(註1)

『飛べ、飛べ、と隠者は蝶に云つた、

花の上を、朝から晩まで

お前の蒼薇も、お前の菊も

私の賤しい小舎には及ばぬ』

彼の云ふのは本當だつた。暴風雨が來ると、

蝶は泥濘の凹みに溺れ

汚泥は碎かれた彼の遺骸の

天鵞絨を汚し辱かしめる。

しかし暴風雨にびくともしないのは

蟋蟀で、その隠れ家にあつて

雨が降らうが、風が吹かうが、雷が鳴らうが、

平氣な顔をしてコロコロと唱つて居る。

いや、何も世間を騙け廻はつて

快樂や花を求めるものはない

賤しい家庭とその深い平和は

我等に多くの涙を免れしめる。

〔註一〕 描寫の常に正確な私の友は、若し私の思ひ違へでなければ、此處に黃揚羽蝶 (Machanon) の事を歌つて居るのである。

これはたしかに私の虫だ。私には、腹を涼風に、脊骨を日に當てて、巢窟の入口で觸角をひねつて居る蟋蟀が目に見える。彼は蝶に嫉妬して居ない。彼は、寧ろ反對に、往來に面して破風作りの店を持つたブルジョアが、げげしい装ひをした何處かの宿無し女が戸口の前を通るのを見る時によくやるような、あの嘲笑的な憐憫の様子を以つて、蝶の身の上を憐れんで居るのだ。彼は自分の住居と彼のヴィオロンに就いて、不平を云ふ所ではなく、甚だそれに満足して居るのだ。本當の哲人らしく、彼はすべての物の空しさを知つて居るのだ。彼は道樂者たちの騒がしい世界を他所に、佗住居の樂しさを充分に味ふ事を知つて居るのだ。

さうだ、まあ大體さうだが、まだ甚だ不充分だ。永遠に消えぬ跡を残す程、極印で印をつけられて居ない。ラ・フォンテーヌの忘却以來、蟋蟀は、彼の功績確立に必要な數行を今もなほ待つて居るし今後も永く待つ事であらう。

博物學者たる私に取つて、右の二ツの訓話の主な特徴は、そしてこの特徴は、若し私が、一枚の縦板の上に並べた若干の端本しか持たぬ境涯に陥つて居なかつたならば、必ずや、他にも見出すに違ひない特徴だが、それはこの教訓の基礎たる巢窟である。フロリアンは深い隠れ家を語り、もう一人は

賤しい小舎を稱えて居る。それ故、先づ何よりも人の注意を惹かすには置かないものは、そして概して事實と云ふものに無頓着な詩人の注意をまでも惹かすには置かぬものは、それは住居なのである。

事實、この點に於て、蟋蟀はまことに世の常のものとは變つて居る。我國の昆虫の中で彼獨り、成年に達すると、彼の手作りである所の、定まつた住居を持つて居る。悪い季節には、他の昆虫の大部分は、無代で手に入れ、惜氣もなく捨て、しまふ假りの避難所の奥に潜り込み、蹲踞まる。中には、綿の革袋だとか、葉の籃だとか、セメントの小塔だとか、素晴らしい物を、子等の住居の爲に作り出すものもある。

生餌で育だつ若干の幼虫は、常設の伏兵所に住して、獲物を待つて居る。就中、キクスイダマシ (Ciandale) の幼虫は、自ら一ツの豎孔を穿ち、平な銅色の自分の頭でその蓋をする。何でもうっかり



クゴチリア

この陰險な橋の上を通らうものなら、その揚げ戸がたちまちぐらつと引くり返へつて、通りかゝつたものゝ足下に陥没するので、そのまま深淵の中に姿を消してしまふ。蟻地獄は砂の中に斜面の非常に崩れ易い一ツの漏斗を設ける。そしてその斜面を蟻が滑り落ちると、噴火口の底に居る獵師の頸筋が、弩に變つて、彈丸をシャベルで浴びせるやうに投げかけて、蟻を石打ちにしてしま

ふ。だが、これ等はやはり、一時的の避難所であり、巢であり、陥穽であるに過ぎない。

骨を折つて住居を作り、其處に住み込んだが最後、最早、春の歡樂にも、冬の窮乏にも其處を引移らないと云ふやうな住宅、獵や子供等の事は考へずに、全く自分自身の平和のために打建てた眞の住居、さうしたものは蟋蟀のみの知る所である。何處か芝生に蔽はれて、日當りのよい傾斜地に、彼は一つの隱宅を所有するのである。他の連中が皆浮浪して、野天に伏し、或は裂けた樹皮、枯葉、石、等の偶然の庇の蔭に伏すのに、彼獨り、不思議な特權によつて、住宅を持つて居る。

實に重大問題たる住宅問題は、蟋蟀により、兎により、遂に人間によつて解決された。私の附近では、狐と狸とが巢窟を持つて居るが、その大部分は、岩の凹凸によつて作られて居るに過ぎない。これに若干の修正を加へたならば、完全な隱家とならう。これよりも賢い兎は無料でト居し得るやうな天然の穴の無い場合には、自分で住居を作り何處か適當と思ふ場所に穴を掘る。

蟋蟀はそれら全部を凌駕する。出來合ひの住居などは輕蔑して、何時も自分の住宅地を、日當りの好い、衛生的な土地に選ぶ。彼は決して不便な、粗末な、偶然の凹みなどを利用しない。彼はその住居を入口から奥の間に至るまで、全部自分で掘るのである。

住宅建築術に於て、彼に優るものとしては、私は人間しか知らない。しかもなほ人間は、漆喰を捏ねて切石を接合し、粘土を練つて枝組みの小舎に塗る前は、巖の蔭の避難所と洞穴とを野獸と争ひ取

つたのである。

一體、本能の諸特權はどう云ふ風に分け與へられて居るのか。こんな最も賤しい昆虫の一つが住居の術を完全に知つて居るのだ。彼には一つの自宅があるのだ。これは多くの文明人でも知らぬ一つの特典だ。彼には安樂の第一の條件たる靜かな隱家がある。しかも彼の周圍には、己が住居を作り得るものは誰も無い。我々まで溯らなければ、彼の競争者を見出す事は出來ないのだ。

彼のかうした天賦の才は何處から來たのか。何か特別な道具を備へて居る賜物であるか。さうではない。蟋蟀は何も特別の發掘者ではない。彼の有する手段の薄弱さを觀るならば、その結果に寧ろ意外な感をすらも抱かさせられるのである。

表皮が特別に敏感なので、その必要があるとでも云ふのだらうか。さうでもない。彼の近似虫の中で、彼に劣らず敏感な表皮を持つ連中は、大氣を少しも惧れて居ない。

それならば解剖學的構造に個有の傾向か、有機體の深奥から湧き出る力に餘儀なくされる技能か、さうでもない。私の附近には他に三種の蟋蟀 (*Gryllus bimaculatus* de Géar, *Gryllus desertus* Pall-as, *Gryllus burdigalensis* Latr.) があるが、外觀と云ひ、色氣と云ひ、構造と云ひ、實によく鄙蟋蟀と似て居て、一寸見たのでは之れと見間違へる程である。第一の蟋蟀は、大さが鄙蟋蟀と同じ位か、或は之れを凌駕するものすらある。第二の蟋蟀は約その半分の大さであり、第三はそれよりも更に小

さい。所で、こんな忠實な模造品、こんな鄙蟋蟀の影武者共は、どれ一つとして、自ら一ツの巢窟を掘る事を知らない、ビマキュレー蟋蟀は、濕地の腐れかゝつた草の堆重ねた中に住み、友無し蟋蟀は畑掘りの鋤に掘り起こされた、かさ／＼の土塊の割目の中を放浪し、ポルドー蟋蟀は我々の住居に侵入し来る事を惧れず、其處で、八九月の頃、何處かの暗い、冷いやりした片隅で、つゝましまやかに鳴く。

これ以上續けてみる事は無益だ。我々の問の一ツ一ツに對して、否と云ふ答が繰返へされるに違ひない。本能は此處に現れたかと思ふと、體制の全然同様であるに拘はらず、彼處では姿を消して、決してその理由を我々に告げる事はあるまい。また本能は、道具によつて左右される事、まことに少なく、如何なる解剖學上の材料を以つてしても、之れを説明する事は出來ず、況んや之れを豫想する事は猶更出來ない。これ等四種の蟋蟀が、殆ど同様であつて、しかもその中の唯一種だけが巢窟を設ける術を知つて居るなどは、既に與へられた幾多の證據に、更に證據を附加へるものである。彼等は本能の起源に關する我等の深い無智を、明かに斷言して居るのである。

誰か蟋蟀の居住を知らなからう。誰か、芝生に喜戯する年頃に、この隠棲者の小舎の前に足を止めなかつたものがあらう。どんな軽い足取りにも、彼は人の接近をきゝつけて、はつと後ろに身を引いて、彼の隠れ家の奥深く下つてしまふ。行き着いてみると、その住宅の入口にはもう何者の影もな

50

その一たん姿を隠した奴を引張り出す方法は、誰でも知つて居る。一本の藁を巢窟の中に差込んで、靜かに動かす、すると虫は、上の方に起つた出來事に驚き、撲ぐられて、彼の密室から登つて來る。玄關まで來ると、足を止めて、躊躇して、その細い觸角を動かしながら様子をみる。彼は、明るみまで來て、穴を出る。もう彼を捕へるのは何でもない。この事件はそれ程彼の哀れた頭を掻き亂してしまつたのだ。若し一度遣り損つて、彼が一層疑ひ深くなつて、藁で撲ぐつても出て來なかつたならば、コップ一杯の水を流し込んでやるがよい。どんな頑固な奴でも出て來る。

蟋蟀を籠に入れて、高苜の葉で養つた、あの樂しかつた頃よ。芝生の小徑のほとりで行つた少年時代の無邪氣な獵よ。今日、私の研究用の虫小舎に入れんがための虫を捜しに、巢窟々々を調べて歩いて居ると、その頃の様がまた目に見える。私の仲間のポール坊が、もう一ぱし藁の戰術に長じて居て、その剛情な奴と長い間、忍耐と技巧とを闘かはせた、擧句がばと起き立つて、その握りしめた手を空に振りかざし、すつかり胸を躍らせながら「捕まへた！ 捕まへた！」と叫び出すと、私にはその頃の様が、殆どその頃と變りないあざやかで、また見出だされる。さあ早速、紙袋の中に入つた、小さな蟋蟀め、可愛がつてやるぞ。だが、何か我々に教へなければいけない。そして先づお前の住家を我々に見せてくれ。

それは、何處か、雨の流れ易い、日當りの好い傾斜地の、芝草の間の、やつと指位の太さの、斜の地下道で、土地の有様に従つて、曲つて居たり、眞直だつたりして居る。精々、七寸程の長さである。

必ず、一茂みの芝草が、虫が附近の青草を食ひに出掛ける時にも、手をつけずに残されて居て、住居を半ば隠し、その庇の役をし、入口につまましい影を投げて居る。闕は緩い傾斜をなして居て、入念に搔かれ且つ掃かれ、若干距離に延びて居る。四邊一帯が静かな折に、この物見臺の上に、蟋蟀は立ち停まつて、弓を搔き鳴らすのだ。

住居の内部は極く質素で、壁も裸だが、しかし粗雑ではない。長い暇があるので、餘りに不愉快な凹凸は、消しさる事が出来るのだ。廊下のどんづまりに、休息の間がある。行き止まりになつた寢間で、他の部分よりも少しは滑らかに磨かれて居り、直徑も少しく広い。要するに、甚だ簡単な住居で、非常に清潔で、濕氣と云ふものがなく、衛生と云ふものをよく了解して、その必要に應じて作られて居る。のみならず、虫の貧弱な發掘手段に較べたら、まことに巨人の隧道とも云ふべき、大工事である。その仕事の有様を見るとしよう。また何時この工事が始められるかを調べてみよう。それには是非卵まで溯つてみなければならぬ。

蟋蟀の産卵を見たいと思ふ者があつたら、何も大騒ぎして準備するには當らない。少しばかり忍耐心

があれば足りるのだ。之れをビュフォンは天才と稱したが、私はそれよりも慎ましく、觀察家の至上の徳と呼ぼう。四月、遅くも五月に、この虫を、別々に一番づつ、植木鉢に土を盛つて、入れて置かう。食料品は、高菫の葉を時々取かへてやる。一枚の硝子板でその上を蔽ふて脱走を豫防する。

この極く簡単な設備に、要せば、最善の虫小舎たる、金網製鐘形籠を用ひて、まことに面白い研究材料を手に入れる事が出来る。それは後に再説する事として、差當り、産卵を監視する事をしよう。そしてどうか警戒怠りなく、適當な時機を逸しないやうにし度いものだ。

六月の第一週中に、私の熱心な訪問は、ほんの少し満足させられた。私は母虫が、産卵管を垂直に土中に突立て、凝つとして居る所を不意に見舞つたのだ。この不遠慮な訪問者には一向頓着しないで、彼女は永い間、同一地點に止まつて居る。それからたうとう、その曲線を引き抜き、その探り孔の跡を大して執拗くもなく、消し、一息入れてから、歩き廻はり、他の場所へ行つて、あちらこちらと彼女の勢力範囲内の、全面積に亘つて、何度でもそれを繰返へす。それは全く、デクチックが我々に示した所の事の反覆で、たゞ、運動がそれよりも緩慢なだけだ。二十四時間で、産卵は終つたやうに私には思はれたが、一層確める爲に、私はなほ二日間待つてみた。

そこで私は植木鉢の土を發掘してみた。卵は藁のやうな黄色で、兩端の圓くなつた圓筒形をなし、長さ約三ミリメートルを算する。土中にあつては各々孤立し、垂直線に従つて並べられ、或は數多く

或は數少く相接して居るが、それは相次いで行はれた産卵に相當して居る。鉢の全面積に亘り、深さ二センチメートルのあたりにそれが見出される。一塊の土を虫眼鏡で調べるには種々の困難があるが、その困難の許す範囲内で調べた所によると、たゞ一疋の母虫の産卵は五六百と算定される。これ程の多數の子は、きつと短い期間に、ひどく間引かれるに違ひない。

蟋蟀の卵は機械學上の小傑作だ。孵化後は不透明白色の鞘形で、頂上に甚だ規則正しい圓形の氣孔を開き、その縁には一つの球帽が附着して居るが、これは貝蓋になつて居たのである。新しく生まれた虫が、押すとか、銜み切るとかして、いゝ加減に破るのではなくて、この蓋は、特に準備された弱抵抗線に沿ふて、自分から開くのである。そこでこの不思議な孵化の有様を是非見てみなければならなかつた。

産卵後約十五日にして、二ツの圓い、赭色を帯びた黒色の、大きな眼點が、前端を暗色に染める。すると、この二ツの點の少しく上方、圓筒の極く端に、一ツの微かな輪形の丸縁が現れる。之れは破裂線が準備されるのである。間もなく、卵の透明さによつて、小虫の細かい分節が認められる。いよいよ、警戒を更に嚴にし、訪問の回數を増加すべき時機がやつて來た。殊に午前中はさうである。

幸運と云ふものは忍耐強い者が好きで、私の熱心に酬いてくれた。この上ない繊細な仕事によつて弱抵抗線の準備されて居る、あの丸縁に沿ふて、卵の端が、蟄居者の額で押しつけられ、分離し、持

上がり、そして一方にばたんと落ちる。恰度、極く小さな小塚の蓋のやうである。蟋蟀は、吃驚箱のお化のやうに出て來る。

蟋蟀が出て行つてしまふと、殻は膨らんだまゝに残つて居るが、滑かたで、少しも傷がつかず、純白で、貝蓋の球帽を出口にぶら下げて居る。鳥の卵は、そのために特に雛子の嘴に出来る揉で叩かれて滅茶々に壊される。蟋蟀の卵は、それよりも優れた仕掛けで、まるで象牙の筒のやうに開く。額で押しさへすれば、それだけで蝶番が働らくのである。

蟋蟀の卵の孵化は、糞虫のそれと速さを競ふもので、一年中の最好季節に刺戟されて、殆ど觀察者を待ちくたびれさせる事はない。まだ夏至にもならぬのに、私の研究のために硝子板の下に監禁してある十組の夫婦は、もう澤山の子供たちに圍繞されて居る。それ故、卵で居る期間は、約十日程である。

私は今、象牙の筒の蓋が持上つて、若い蟋蟀が出ると云つた。だがそれは全く正確と云ふわけには行かない。出口に姿を現すのは襪襟に包まれた小虫で、薄い鞘にびつたりと納まつて居るので、まだそれと見別け難いものである。私はこの外被を、この初期の産衣を期待して居た。デクチツクの孵化の際に、之れを豫想したと同じ理由によつてである。

蟋蟀は地下で生まれる、彼も亦非常に長い觸角と、途法もなく長い腿を持つて居る。何れも脱出の

際に邪魔な附属品だ。そこで彼も何か脱出衣を持つて居るに違ひない、と私は考へて居たのだ。

私の豫想は、原理としては正しかつたのだが、半分しか證明されなかつた。如何にも、生れ出る際の蟋蟀には、一時的の形がある。しかし、彼は外部へ攀ち登るためにそれを用ひる所ではなく、恰度卵の出口で、その弊衣を脱ぎ捨て、しまふ。

かうした例外は、どう云ふ事情に歸せねばならぬか。多分かうであらう。孵化前に、蟋蟀の卵は、僅かの日數しか、地中に滞在しない。デクチックのそれは八ヶ月間も其處に滞在する。前者は、稀には例外もあるが、乾燥する事に決まつて居る季節に、かさ／＼な、埃っぽい、脆い、薄い土層の下に横はつて居り、後者は、之れとは反對に、秋冬の長雨によつて押しつけられて、非常に掘り悪くなつて居るに違ひない土中に横はつて居る。

のみならず、蟋蟀は、デクチックよりもぐんぐりして居て、それ程長脚を高々と立て、は居ない。それやこれやが、この二種の昆虫の、湧出方法の相違の原因となつて居るらしい。デクチックは、押しつけられた土層の中、一段と深い所で生まれるので、何か脱出衣が必要だが、蟋蟀は、それ程厄介物も無いし、地面にはもつと近いし、埃っぽい土層を横切りさへすればよいので、そのやうなものを用ひないでも済むのだ。

それならば彼が、卵の出口を踰へるや否や早速脱ぎ捨て、しまふあの産衣は何のためか。この間に

對する答として、私はもう一つの問を出さう。廣大な發音器と化してしまつた蟋蟀の翅鞘の蔭に、二ツの眞白な退化器管があるが、そしてそれは蒼白い二ツの翅の下圖なのだが、あれは一體何のためか。それは實に貧弱な、痺弱げなもので、蟋蟀はきつと之れを何にも用ひないに違ひない。恰度、犬が脚の後方に、力無くぶら下つて居る拇指を、何も利用しないやうなものであらう。

時によると、均齊の必要上、家の壁面に、眞の窓と相對して、窓の繪を描く事がある。美の至高條件たる秩序は、さうした事を命するのである。同様に、生物界にも生物界特有の均齊があり、一般的原理の反覆と云ふものがある。一ツの器管が不用になつて、廢止されると、その跟跡を残して、根本的配置の調和を維持するのである。

犬の、發育不完全の拇指は、高等動物の特徴たる、五指足を確證するものである。蟋蟀の退化した翅は、この虫が掟によれば飛翔し得るものである事を證據立て、居る。卵の出口で殻を脱ぐのには、地下で生まれた蠱斯類の七面倒な脱出に必要な産衣の回憶である。これ等は均齊の無駄事であり、無用に歸して居ながら、しかも廢止されて居ない法律の殘骸である。

薄い上衣を脱ぎ捨て、しまふと、まるで蒼白い、殆ど眞白な、若い蟋蟀は、早速、頭上の土と戦を開始し、臆で叩き、掃き、埃っぽい、何の抵抗もない障害物を、足蹴にして後方に押しやる。そして遂に地面の、太陽の歡喜に浴すのだが、同時に、やつと蚤程の大さしかない、實に痺弱な彼が、生物

混戦のあらゆる危険の中に投出される。二十四時間にして、着色され、素晴らしい黒ん坊となり、その黒檀色は、成虫のそれとよく拮抗する。最初の蒼白さの面影は、僅かに一本の白帯となつて残り、彼の胸を取巻いて居るが、やつと歩き初めの幼児の、胸紐を想はせる。

彼は甚だ軽快で、その長い觸角を振らせて空間をさぐり、小走り、將來肥つてからは到底出来ないやうな飛躍をやる。この時代はまた胃のデリケートな時代だ。彼を養ふには何を與へねばならぬか。

私には分つて居ない。成虫の御馳走たる高苴の葉を與へてみると、いやがつて食はうとしない。或は事によると、食つても私には分らないのかも知れない。それ程食ひ跡は小さいのだ。

數日ならずして、十夫婦を抱へて居る私は、家族の負擔に悩まされるに至つた。この五六千疋の蟋蟀をどうしたらよいのだ。それは如何にも可愛らしい虫の群には違ひないが、どう云ふ世話をしてやつたらよいのか、全然分らないので、育てやうがないのである。私の可愛らしい虫たち、私はお前たちを放してやるよ。私はお前たちを、至上の飼育者たる自然におまかせする。

私はさうした。あちら、こちらと、一番好きさうな場所を選んで、庭の中に、この無数の虫を放してやつた。若し皆満足に育つたならば、來年は、私の戸前に、何と云ふ合奏が開かれる事だらう。いやそんな事はない。交響樂は多分默樂とならう。何故と云つて、母虫の多産に必然つきものゝ恐ろしい間引きが直きに行はれやうとして居るからだ。殺戮をまぬかれて生残つた二三組、それがまあ期待

し得る全部である。

尼蟻の子の時と同様に、第一番にこのマナに駆け着けて、一番熱心に追剥ぎをやるのは小さな蟻と蟻である。殊に蟻と來たら、憎むべき強盗で、私のために一疋の蟋蟀をも、この庭に残して置かないのぢやないかと案じられる。可哀さうな小さな奴を、取捕まへては、腹を裂き、狂氣のやうにそれを嚼る。

いや、何と云ふ非道い畜生だ！ しかも我々は此奴を、第一位に祭り上げるのだから呆れる。どの書物を見ても彼を稱揚し、彼のために讃辭を呈して盡きる所を知らない。博物學者等は彼を尊重し、毎日彼の名聲をいよゝ高からしめて居る。之れでみるとどうも、動物界も人間界と同様に、歴史に名を爲す種々な方法の中で、一番確實な方法は、害をする事であると云ふのが本當の所らしい。

糞虫や、埋葬虫は貴重な清掃夫だが、誰一人その身の上を尋ねるものはない。しかもあの吸血鬼たる蚊や、毒劍を携へた怒りつばい刺客の蜂や、南部地方の村々では、無花果樹を空にすると同じ熱狂さを以つて、住宅の梁をくり抜き、危険に瀕しさせる蟻は誰でも知つて居る。これ以上私が餘計な口出しをするまでもなく、人類の記録中には、有用な者が認められず、災害を齎す者が稱讃される事に就いて、右同様の例を誰でも見出す事が出来るのである。

蟻及びその他の殺戮者の虐殺振りは實に盛なもので、初めの中さしにも數多かつた私の庭の植民が

次第に数を減じて、遂に私は研究を續ける事が出来ず、外部からの情報を仰がねばならぬやうになつた。

八月に、葉屑の間の、土用の暑さにも芝草が灼きつくされなかつた小さなオアシスの中に、私は若い蟋蟀を見出す。彼はもう相當大きくなつて、成虫のやうに眞黒で、生れたばかりの頃の白帯の跡は、もう少しも留めて居ない。彼には住居が無い。一枚の枯葉、一個の平石でもあれば充分なので、休息地帯などは一向氣にかけない遊牧の民の天幕と心得て、その蔭に身を寄せる。

秋の半ば頃まで、放浪の旅を續ける。その頃になると、翅の黄色い穴蜂が、このさすらひ者を、樂な獲物として追ひ廻はし、幾籃もの蟋蟀を、地下に倉入れする。彼は蟻の襲殺をまぬかれて生き残つた蟋蟀を、更に十分の一に減らしてしまふ。何時も定まつた時期よりも二三週間早く、定住の家を穿てば、さうした奪掠者の手をまぬかれ得るのだのに、この辛い試練を受ける連中は、それを考へない。幾世紀に亘る、辛い經驗も彼等に何物をも教へて居ない。既に保護穴を掘るに足る程の力を持つて居ながら、彼等はどうしても昔ながらの慣例を遵守して、假令穴蜂に種族の最後の一疋までも刺殺されねばならなからうとも、彼等は遍歴するのである。

十月も末になつて、そろ／＼寒くなり出すと、巢窟の發掘に取りかゝる。虫小舎の中の蟋蟀を観察して知り得た、僅かばかりの材料によると、この仕事は甚だ簡單である。發掘は、この團の中の裸な

地帯には決して行はれない。何時も食べ残りの蒿苳の、萎れた葉の底下に行はれる。住居の神祕に缺く可らざる芝生の帷は、之れで代用されて居るのだ。

坑夫は前肢で土を掻き、大きい砂利を引出すには、腮の缺を用ひる。見て居ると彼は、棘の二列に並んで居るその太い後肢で足踏みし、除土を後退りに掻き寄せ、掃き寄せ、そしてそれを一つの傾斜面に擴げる。方法と云つたらそれだけである。

仕事は最初の中は可なり速く進む。私の虫小舎のやうな、掘り易い土地では、發掘者は、一回二時間位の仕事で、地下に姿を消してしまふ。合間々々に、彼は入口へ戻つて来るが、何時も後退りで何時も掃きながらやつて来る。勞れを覺えると、出来かけの住居の團の上に停まつて、頭を外の方に向けて、觸角をだる氣にふるはせて居る。それからまた入つて行つて、再び缺と熊手の仕事に取りかゝる。やがて休息の時間が長くなつて、私は監視に倦んでしまふ。

一番急ぎの部分は出来たのだ。二寸もあれば、差當り、宿として充分である。残りの部分は、どうせ永の歲月を要する仕事だ、毎日少しづつ、暇にあかせて、こつ／＼と、季節の次第に寒くなるに連れ、また住む者の成長に連れて、次第に深め、擴げればよいのだ。冬でさへも、氣が暖かで、太陽が住居の入口に笑つて居る時には、蟋蟀が除土を戶外に運び出して居る所を見かける事が稀ではない。これは修繕か、新しい發掘のしるしだ。春の歡樂の最中ですらもなほ、家屋の維持は引續き行はれて

居て、持主の死ぬまでは、絶えず修理され、改善される。

四月が終ると、歌が始まる。最初の中は稀で、遠慮勝ちな獨唱だが、やがて、全員總出の大合奏となる。さうなると、どの芝生の塊にも演奏者が居る。私は新春の合唱者の先頭に蟋蟀を置き度い。我等の荒蕪地で、タチジャカウサウとラヴァンドの花が咲き亂れる頃、彼の歌の合棒には、あの冠毛を戴いた雲雀がある。咽喉を音符で膨らせて、花火のやうに唱ひつゝ、昇つて、その天邊で、雲の中に姿をかくして耕地の上に、その優しい歌を注ぐ。下の方から蟋蟀の朗吟が之れに答へる。如何にも單調で、技巧に乏しくはあるが、そのまた素朴さによつて、一新せる天地萬物の鄙びた歡喜に、何と似つかはしい事か。それは眼醒めの讚歌であり、芽ぐむ種子と生え出づる草とに理解される聖い讚美歌である。この二重唱で、どちらに賞を與ふべきか。私だつたら蟋蟀に與へたい。彼の方が數に於て、またその連続的の歌によつて優勢である。雲雀が聲をひそめても、ラヴァンドの暗縁の野は、樟腦の匂をこめた香爐を太陽に向つて揺りながら、彼獨りから、その慎ましい、壯嚴な頌榮を受ける事であらう。

一四

蟋蟀——歌——交尾

此處へ解剖學と云ふ奴が口出しをして、亂暴にも蟋蟀に向つて『お前の樂器を見せろ』と云ふ。この樂器は、すべての眞の價値のある物と同様に、極めて簡單である。それは、蝗虫の樂器と同じ原理に基づいて居て、鋸齒形の弓と、振動膜とから成つて居る。

右の翅鞘が左の翅鞘の上に跨がり、それを殆ど全部蔽ふて居る。たゞ急角度をなして折曲つた部分が、腹の側面をしつくりと包んで居る。恰度、青キリギリス、デタチツク、エフィビジェル及びその同族が我々に示した所とは恰度反對である。蟋蟀は右利であり、他の連中は、左利なのだ。

この二ツの翅鞘は等しく同一の構造を有する。一方を知る事は、他方を知る事である。右の翅鞘を描寫してみよう。それは脊の上に當る部分が殆ど平で、急に側面に傾いて、直角の襞を爲し、斜に平行の細かい翅脈のある翅端を以つて腹部を包む。背面上の薄板は、眞黒な、強い翅脈を有するが、その翅脈全體は、一つの複雑な、奇妙な模様を構成し、何處か、アラビヤ文字のし書きに似て居る。透かして見ると、極く薄い赭色を帯びて居り、たゞ相隣る二ツの大きな空所だけが別で、一方はよ

り大きくて、前方にあつて、三角形をなし、他方は、より小さくて、後方にあつて、卵形をなして居る。各々、一本の太い翅脈に縁取られ、幾つかの軽い皺がワツプル模様をつけて居る。前者は、その他に、四五本の、補強用の椽木を有し、後者はそれが唯一本で、弓形に曲つて居る。この二ツの空所は蟋蟀類の鏡に相當するもので、響面を構成して居る。事實、その膜は、他の部分よりも薄く、少し曇つては居るが透明である。

前方の四分の一は、滑かで、ほんのりと赭味を帯び、後方を、平行の、彎曲した二本の翅脈で境されて居るが、その翅脈の間には、一つの凹所が残されて居り、その凹所には、極めて小さな梯子の棧に似た、五六本の、黒い小さな鬚がある。左翅鞘の上には、右翅鞘の有様が、そのままそっくり反覆されて居る。これ等の鬚は、摩擦翅脈を構成し、弓の接觸點を増加する事によつて、振動を一層強大ならしめる。

下面に於ては、梯子の棧のある凹所を界限して居る翅脈の一つが、鋸齒形に切り込まれた隆起線となつて居る。之れが弓なのだ。算へてみると約百五十の齒があるが、この齒と云ふのが、實に美事な幾何學的完全さの三角柱なのだ。

まことに立派な楽器で、デクチックのそれよりも遙かに優れて居る。反對の翅鞘の梯子の棧に噛み合ふ弓の、その百五十の三角柱は、下方のチンパノンを直接摩擦により、上方のチンパノンを摩擦器

の餘動によつて、同時に四ツのチンパノンを振動させるのだ。それ故、何と云ふ強い音だ！ デクチックは、たつた一つの貧弱な鏡しか備へて居ないので、數歩の距離でやつと聞える程度だ、蟋蟀は、四ツの振動面を持つて居るので、その歌を數百メートルの彼方にまで投げる。

彼は蟬とその響を競ひ、しかも蟬のやうな不愉快な嘎聲をして居ない。それより更に好い事がある。この特權者は弱音器の使用法を知つて居るのだ。兩方の翅鞘は、各々腹側に伸びて、幅廣の縁をなして居ると我々は云つて居るが、これがその弱音器なので、これを擧げるか、下げるかによつて、音の強さを變へ、その軟い腹部との接觸面の廣さに従つて、或は低聲微吟し、或は高聲放吟する事が出来るのだ。

兩方の翅鞘が正確に等しいと云ふ事は注意に値する。私には、二方の弓の役目と、それが振動させる四ツの振動面の役目とは甚だよく分かる。しかし、下方の、左翼の弓は何のためか。何物の上にも載つて居ないので、その鋸齒形には噛みつき場所が無い。しかも、他の弓と同じやうに入念に齒形が附けられて居る。この弓は絶対に必要なものだ。尤もこの楽器がその二ツの部分の順序を變更して下にあつたものを上に持つて來れば、それはまた別である。

かう云ふ風に入れ替えてみると、器が完全に均齊を得て居るので、必要な仕掛は全部再び作り出され、そして、虫は、現在用の無いその弓で唱ふ事が出来るだらう。下の弓が上の弓になつて、彼はそ

の弓で何時もの通り掻き鳴らすだらう、そして歌は少しも前と變らないだらう。

かうした役目の轉換は、彼の手段の中にあるのか。蟋蟀は、この齒形の附いた二ツの弓を、交る交る用ひ、疲労の肩替りをさせる事が出来るのか。出来れば永く唱ひ続けるにまことに好都合なのが。少なくとも常に左利の蟋蟀が居るかどうか。

私はそれを期待して居た。何しろ兩方の翅鞘が、餘りにも嚴密に均齊を保つて居るからだ。所が實際観察してみると、その反對を確信させられてしまった。どんな蟋蟀の不意を襲ふてみても、必ず一般の掟通りにやつて居る。私の調べてみたのは、随分多數に上るが、唯一つの例外もなく、皆右翅鞘を左翅鞘の上に重ねて居た。

そこで、上下を入替へて、天然の條件が我々に拒む所の事を、人工で實現してみよう。ピンセットの端で、出来るだけ靜にやるのは勿論だし、また逆に挫るやうな事をせず、双方の翅鞘の位置を逆に置替へる。之れは少し器用で、忍耐力があれば、苦もなく出来る。そこで出来上つた。萬事整然として居る。兩方の肩に少しも脱臼を起しては居ないし、膜に少しの黴もない。普通の状態に於てすらも之れ以上整然として居る事はない。

この入替へられた楽器で、蟋蟀は唱ふだらうか。私は殆どそれを期待して居た。それ程外觀は立派だつた。だが間もなく私は迷妄を醒まされた。しばらく靜にして居たが、虫はかう翅鞘を逆にされた

のでどうも具合が悪く、一努力して楽器を普通の順序に戻してしまつた。私はもう一度やつてみたが無駄だつた。彼の執拗さの方が私の執拗さを負かしてしまつた。位置を變へられた翅鞘は、必ず、普通の位置に戻される。この方法ではどうしても唱はうとしないのだ。

まだ翅鞘が生えかけの時分に、さうしたらもつとうまく行くだらうか。今となつては、最う硬い膜で、形を變へようとしても容易に云ふ事をきかない。もう癖がついてしまつたのだから駄目だ。布に細工をしようと思つたら、最初の中にやらなければいけない。眞新しい、まだ軟かな器官を、出来たばかりの所で、入れ替へたら、どう云ふ事になるか。これはたしかに實驗してみる價值がある。

之れがために、私は幼虫を調べてみる事にして、その變態の時期を覗つた。之れは第二回の誕生のやうなものだからだ。未來の翅と翅鞘とは、四ツの裾を成して居るが、その形と云ひ短さと云ひ、四散して居る所と云ひ、オーヴェルニユの乾酪製造人の短い上衣を想はせる。適當な時機を失したくないばかりに、實に熱心に觀察したものだ。たうとう私は脱皮の現状を見る機會を持つた。五月初めの、午前十一時頃に、一疋の幼虫が、私の目の前で、その鄙びた弊衣を脱ぎ捨てた。この時、變態したばかりの蟋蟀は褐赤色で、たゞ翅鞘と翅だけが素晴らしい白さだ。

筒から出たばかりの翅と翅鞘とは、何れもまだ短い出来かけの器官で、くちや／＼になつて居る。前者はほどこの最初の状態に留まつて居るが、後者は徐々に擴大され、開かれ、伸べられる。その内

縁は目に見えぬ程の緩慢な運動で、互に、同平面上の、同じ高さに、接近して行く。どちらの翅鞘が他の翅鞘の上に跨がるかを豫言させる何等の徴候もない。遂に兩縁が相接觸する。もう少ししたら、右の縁が、左の縁の上に乗つてしまふ。手出しをするのは今だ。

一本の葉屑をもつて、私は重なり合ひの順序を、靜かに變へる。左の端を右端の上に乗せる。昆虫は一寸反抗して、私の組合はせを崩さうとする。私はなほもやり續けるが、出来るだけ手柔らに取扱ふ。諸器官が如何にも軟かで、まるで極く薄い濡れ紙を切り抜いたやうなので、それを傷つけるといけないと思つたからだ。大成功だ。左の翅鞘が右の翅鞘の上を前進する。しかしまだほんの僅かで、やつと一ミリメートル程だ。そのままにして置かう。それから先きは萬事獨りで進んで行かうから。

實際美事に進行する。左翅鞘は益々擴がつて行つて、遂に右翅鞘を全部蔽ふてしまふ。午後の三時頃に、蟋蟀は赤味がかつた色から黒色に變つた。しかし兩方の翅鞘は依然として白い。更に二時間程経つと、この翅鞘も普通の色合ひになるのだ。

いよいよ終つた。翅鞘は人工的配置のまゝで成熟してしまつた、私の計畫通り、擴げられ、型附けられてしまつた。大きさも硬さも出來てしまつた。云はゞ、逆の重ね合ひの順序で生まれたやうなものだ。この状態では、この蟋蟀は左利だ。これつきり何時までも左利で居るだらうか。私にはさうらしく思はれる。私の期望は、その翌日及び翌々日と増して行つた。何故かと云ふに、兩翅鞘は、何等

の支障なくこの見慣れぬ配置を續けて居るからだ。私はこの藝術家が間もなく、家族中の誰もが決して使つた事のないこの弓で、演奏するのを見る事と期待した。私はそのヴァイオロンの試奏を見ようと益々嚴に監視した。

第三日目に、この新進樂家の弾き初めがあつた。いくつかの短い軋むやうな音が聞えた。調子の狂つた機械が、その齒車を適當な順序に戻す時のやうな音だ。それから歌が、何時もの音色と、何時ものリズムで始まつた。

お前の葉屑の惡戯を餘りにも信頼した、無能の實驗者よ、お前の顔を蔽ふがよい。お前は何か新式の器樂家を創り出したつもりで居た。所がお前はまるで何物をも獲て居なかつたのだ。蟋蟀はお前の術策の裏を掻いてしまつた。彼は右の弓で擦つて居る。何時になつてもそれで擦るに違ひない。苦痛な努力を忍んで、彼は、もう成熟して、逆に硬まつてしまつた兩方の肩の番ひを引外したのだ。もう決定的に型附けられてしまつたと思はれて居たに拘らず、彼は下にあるべきものを下に、上にあるべきものを上に、ちゃんと舊の位置に戻してしまつたのだ。お前の貧弱な智識は、彼をして一個の左利たらしめやうとした。しかし彼はお前の技巧などは嘲笑して、右利として成長した。

フランクリンは左手のために雄辯な辯論を残して居るが、左手も、その姉妹たる右手と同様、念を入れて訓練すれば、必ずその効があると云ふ。さう云ふ風にして、同じやうに器用な、二個の従僕を

持つ事が出来たら、何と大して便利な事ではないか。如何にも、その通りだ。しかし、極く稀な二三の例を除けば、かうして両手が、力も器用さも同じ程度に達すると云ふ事が、果してあり得やうか。否、と蟋蟀は答へる。左側には先天的の弱さがあり、何か均衡上の缺點がある。習慣と教育とは、ある程度までそれを矯正する事が出来るが、それを根絶する事は決して出来ない。左翅鞘の生れ出る所を捕まへて、教育して、型に嵌めて、右翅鞘の上方に固定してしまつても、それでもやはり、昆虫が唱はうとすると、左翅鞘は下方に戻つて来てしまふ。この先天的劣勢の原因に就いては、胚生學に説明して貰はねばならない。

私の失敗によつて、左翅鞘は、技巧の助けを受けてさへも、その弓を使ふ能力がない事が證明された。それならば、右翅鞘に少しも劣らぬ程の美事な正確さを持つたこの鋸齒附自在鉤は、一體何のためにあるのか。それは均齊の必要によるとか、原型の反覆に過ぎないとか、先刻私が、卵の筒の出口で若い蟋蟀が脱皮する事に就いて、他に好い考へもないので、述べたやうな事を、理由として擧げられないでもないが、どうも私としては、そんな事は説明の見せかけに過ぎず、えらさうな言葉で誤聞化すものだ、白状した方がよいやうだ。

實際、デクチックや、キリギリスや、その他の蝗斯類がやつて来て、或る者はたつた一つの弓しかなく、またある者は一つの鏡しかない彼等の翅鞘を我々に示して、かう云ふだらう。「我々に極く近い

蟋蟀には何うして均齊があるのか。そして、我々蝨斯類は皆、蝨斯類である限り、均齊が取れて居ないのか」と。この反對論に對しては、何とも價值ある答を與へる事は出来ない。我々の無智を告白し、謹しんで「分りません」と云はうではないか。我々の學理中で、一番えらさうな奴を、壁際へ押着けるには、小蠅の翅一枚で澤山なのだ。

樂器はこの位にして、その音樂を聴く事としよう。蟋蟀の唱ふのは、住居の入口の、太陽の歡喜の中でであつて、決して住居の中ではない。双の翅鞘は引上げられて、傾斜した二ツの平面をなし、もう互に一部分しか蔽ひ合はず、トレモロのやうな優しい調子で、コロ、コロと鳴く。充實した、響の高い、拍手のよく整つた、無限に續く歌である。かうして、一春中、孤獨の餘暇を樂しむ。この隠者は、先づ第一に自分のために唱ふ。生きる事に感激して、彼は彼を訪れる太陽を、彼を養ふ芝草を、彼をかくまふ平和な隠家を、稱え唱ふ。生の喜びを述べる事が、彼の弓の第一の動機である。

この隠者はまた、附近の雌のために唱ふ。蟋蟀の婚姻の有様を、捕虜の憂目を見せず、仔細に跡づけてみる事が出来たならば、それはまことに面白い場面だらうと思ふ。しかしこの場合、その機會を探し求める事は無駄だ。それ程この虫は憶病だからだ。まあその機會を待つより他はないが、果して何日の日にそれを見出し得るであらうか。どれ程難かしくとも、困難故に絶望する私ではないが。差當つては、推定と、虫小舎とが我々に教へる所を以つて満足しよう。

この兩性は別居して居り、何れもこの上なく出稼らひである。一體どちらから出かけるのか。呼ぶ雄が、呼ばれる雌の許へ會ひに行くのか。呼ばれた雌が、呼ぶ雄の許へ來るのか。若し、交尾に際して、音のみが、随分遠隔の兩家の間の道しるべであるならば、啞の雌の方から八釜敷屋のランデーヴーに出掛けて行かなければならない。しかしそれではちと暗みが足らぬ事になるし、それにまた虫小舎で育てて見た虫の教へる所によると、どうも雄の蟋蟀には、彼を導いて無響の雌に近づかしめる特別の方法があるらしい。

何時、どう云ふ風に、出會ひが行はれるか。私の推測によると、事は黄昏のつゝまじやかな微光に、妹が住居の入口で、あの砂を敷きつめた前庭で、あの入口前の大庭で、行はれるに違ひない。

夜、二十歩程の距離のある、こんな旅は、蟋蟀に取つて大事業である。巡禮が濟んでから、どうして自分の住居を再び見出すか。一體が出嫁ひで、地理に暗い彼ではないか。我が家に歸ると云ふ事は彼には不可能に違ひない。彼は、あてもなく、宿もなく、さまよふのではないかと案じられる。身を守るべき新巢窟を掘るだけの暇も無く、勇氣もなくて、夜の巡邏墓の御馳走となつて、悲惨な最後を遂げる。雌蟋蟀への訪問が、彼をして屋敷を失はしめ、彼を殺したのだ。しかしそれが何だ！ 彼は蟋蟀としての彼の義務を果たしたのだ。

野原での推定と、虫小舎での事實とを組合はせて考へて見ると、事はこのやうに運ぶらしい。私の同じ虫小舎には幾組かの夫婦が居る。一般に私の捕虜たちは、一ツの住居を掘る事を差控へて居る。長い期望と、長い事業の時機は最う過ぎてしまつて居るのだ。彼等は團の中を放浪して居て、一定の住居を設ける氣は一向にない。高草の葉の蔭にうづまつて居る。

これ等同室者間には平和が瀰つて居るが、それも、交尾期の闘争本能が俄然眼醒めたら、もうおしまひで、さうなると求婚者の間に、争ひが潮々と起り、随分激しいが、重態と云ふ程でもない。二個の競争者は相對して立上り、互に頭蓋を噛み合ふが、これがなか／＼頑丈な兜で、缺位では齒が立たない。それから轉がり、再び起上り、別れる。負けた奴は大急ぎで退散する。勝つた方は凱歌を擧げて負けた奴を侮辱する。それから、調子をやはらげて、目指す雌の周圍をぐる／＼と廻る。

彼は氣取つて見せたり、恭順の風を示したりする。指先で一本の觸角を腮の下へ持つて來て、捻ねつたり、唾液のコスメチックを塗つたりする。拍車を附けて、赤い綬飾のついた、長い後肢で、焦れつたさうに地踏踏み、空中に足蹴を飛ばす。胸が迫まつて黙つて居る。翅鞘は、迅速に顛へて居るのだけれど、もう音が出ないか、よしや音が出ても、整はぬ擦音しか出ない。

無駄な告白だ。雌の蟋蟀は驅けて行つてサラダの巖の中に隠れてしまふ。しかし彼女は帷を少しく排して、そして眺めて居る。そして見られ度がつて居る。しかしして柳の方へと遁れ、しかしして隠るゝ前に見られん事を欲す」(Et fugit ad salices, et se cupit ante videri) と二千年も前に、かの牧歌に

うまく歌つて居る。戀の無邪氣な戯れよ、何とお前は何處でも同じ事だ。

歌はまた始まるが、沈黙と低聲の顫音トビキが交じる。これ程の熱情に遂に心を動かされたガラテア、と云ふのは雌の蟋蟀の事だが、はその隠家を立出でる。相手は雌の前に進み來り、當然くるりと振向いて、雌に脊を向け、地に腹這ふ。後退さりに逼り寄つて、幾度か、雌の下に滑り込まうと試みる。この不思議な後退運動が遂に目的を達する。まあ、さう急ぐなよ、お前！ 平べつたくなつて、遠慮勝ちに、それでもお前はたうとううまく入り込んでしまつた。たうとうやつた。番が出来上つた。一つの精囊が、針の頭よりも小さい微粒だが、定めの場合にぶら下がる。來年は芝生にうんと蟋蟀が出来るぞ。

それから直きに産卵が行はれる。さうなつて一つの團の中に、幾組もの番を入れて置くと、よく夫婦喧嘩をやる。親父がなぐられて、不具にされる。ヴィオロンは散々に打破られる。これが私の虫小舎の中でなく、自由な野原だと、非道い目に會ふ雄は、逃げる事が出来るのだ。そして明かにさうするのだが、尤と云はねばならない。

實に考へさせられるのは、かうして最も穩な虫にあつてすらも、母虫が父虫を恐ろしく嫌惡する事だ。今までの愛人が、若し女の齒にかゝらうものならば、何處かしら喰はれる。最後の會見を終つて引揚げる時には、必ず肢を切断されて居るか、翅鞘をぼろ／＼にされて居る。ある舊世界を代表して

生き残つて居る蠃斯と蟋蟀とが我々に教へる所は、雄は、生命の原始的機制に於ては、補助的齒車に過ぎず、短期間に姿を消して、眞の發生器たり、眞の働き手たる母虫に自由の餘地を残さねばならぬと云ふ事である。

將來、もつと高等の種類に於て、時としては昆虫の中にあつてすらも、雄が協同者としての一役を受持つ事になるとしても、それ程結構な事はない。子供等はそれによつて一層得をするばかりだからである。しかし、蟋蟀は昔の傳統を忠實に守つて居るので、まだ其處までは行つて居ない。そこで、前日欲求の對照だつたものが、今日では嫌惡すべき物となり、それを虐待し、その腹を裂いて之れを味ふと云ふ事になるのである。

例令、疍癩持の妻をのがれる自由がある時と雖も、もうお役済みの蟋蟀は、間もなく死んでしまふ。生命のために殺されるのだ。六月には私の捕へて居る虫は皆斃れる、あるものは自然死により、或るものは横死をする。母虫はしばらくの間、孵化した子等に圍繞されて生き残つて居る。しかし、獨身と云ふ事情に助けられると、趣は全然一變する。その場合には雄は素晴らしい長壽を享ける。その事實は次の如くである。

聞く所によると、希臘人は、音樂の熱愛家だが、蟬の歌を一層よく楽しまんがために、之れを籠に入れて養つて居たさうであるが、私は敢てその一言をも信じまいとするものである。第一に、蟬のあ

の鋭い憂音は、之れを狭い所で長い間やられたら、少しでも鋭い耳を持つた者には一つの體刑に等しい。希臘人の耳は充分訓練されて居たのだから、野外で、遠距離で聞く一般的の合奏以外に於ては、到底こんな嘖聲を好んで聞いた筈はない。

第二に、蟬を籠の中に捕へて置いて育てると云ふ事は絶対に不可能だ。尤も鐘形籠の中に、橄欖の木か、鈴懸の樹でも入れて置けば別だが、それでは虫小舎が飛んだ大仕掛になつてしまつて、到底窓縁になどは置けない。狭い園の中に一日も入れて置いたら、廣い所を飛廻るこの虫は無聊の餘り死んでしまふ。

惟ふに蟋蟀と蟬とを混同したのではあるまいか。恰度、青キリギリスとも混同するやうに。蟋蟀ならば、まことに結構だ。これならば囚はれの憂き目にも快瀾に堪へて行く。出稼らひの習慣なので、前からその下地が出来て居るわけだ。握り拳程の大きさの籠の中でも、毎日サラダの葉を入れてやりさへすれば、結構幸福に暮して、歌を止めない。之れを雅典の子供等が、小さな籠に入れて、窓框に吊るして、育てて居たのではなからうか。

プロヴァンス地方の、と云つても實は全南部地方もさうだが、その地方に於ける彼等の子孫等はかうした趣味を今だに保つて居る。都會では、子供に取つて一疋の蟋蟀を所有する事は一つの寶である。この虫は、嘗めるやうに可愛がられて、彼に、野の素朴な喜びを、小唄に唱つてきかせる。その

死は一家中の者に取つて一つの小さな喪である。

所で、かうした蟄居者、かうして己むなく獨身を守る者は、遂に族長となるのだ。芝生にある彼等の仲間が、もうとうの昔に斃れてしまつて居るのに、彼等は、依然として壯健で、九月まで唱ひつゞける。更に三ヶ月を加へて、實に永い時間だが、彼等は成虫の形で、二倍の生命を生きているのである。

この長壽の原因は明かである。凡そ、生命程消耗的なものはない。自由の蟋蟀は、彼等の精力の貯へを、附近の雌たちと元氣に消盡してしまつた。彼等は自己の力を消耗するに熱心ならば熱心なだけ、それだけ早く斃れてしまつた。他の連中、監禁されて甚だ平穩な生を送つた連中は、餘りにも消耗的な歡樂を、餘義なく節したので長生する事が出来たのだ。彼等の蟋蟀としての最後の義務を果さなかつたので、彼等は之れが最後と云ふ限度まで、執拗に生き續けたのだ。

私の附近に居る他の三種の蟋蟀は、簡単に研究して見た所で、何一つ、いくらかなりとも興味ある事を、私に教へなかつた。定まつた住居も無く、巢窟も無く、或る者は枯草の蔭に、或る者は土塊の割目に、暫しの宿を求めつゞ、彼方此方と放浪して居る。それ等の凡てに取つて、鳴器は鄙蟋蟀のそれと同じで、たゞ細かい點に幾分の變化があるだけである。何れの歌も似たり寄つたりで、たゞ音の幅に程度の差があるに過ぎない。この科の中で一番小さい、ポルドー蟋蟀は、私の戸前の、黄楊の植込みの蔭で鳴いて居る。彼は豪所の薄暗い隅まで危険を冒して進出するが、その歌は如何にも弱い

で餘程注意して聴かないと聞き取り得ず、また、その虫がどの地點に躊躇まつて居るかを突きとめる事が出来ない。

此處には家蟋蟀が居ない。之れは製麵麴所と田舎の爐邊の賓客だ。しかし、私の村では、煖爐の板の



伊太利蟋蟀

下の割目に唱ふ音は聞き得ぬにしても、その代りに、夏の夜は北部地方の餘り知らない、可憐な朗詠調で、野を満して居る。春は、眞晝時に、鄙蟋蟀の交響樂があり、夏は、夜の静けさの中に、伊太利蟋蟀 (*Ecanthus pellucens* Scop.)

が唱ふ。一は晝に、他は夜に、各々この好季節を分ち合つて居る。前者の歌のやむ頃になると、間もなくもう一つの方のセレナードが始まる。

伊太利蟋蟀は、この種の特徴たる、黒装束と、鈍重な形とを持つて居ない。それとは反對に、ほつそりとした、痺弱げな、極く蒼白い、殆ど眞白な虫で、如何にも、夜の習慣にふさはしい。手に取つてみたばかりで、押し潰してしまひさうな氣がする。あらゆる種類の灌木の上、丈の高い草の上に、空中生活を營んで居て、地上に降りる事は稀である。彼の歌は、穩かに暑い夕の優雅な音樂だが、七月から十月まで、日の入頃に始まつて、夜の大部分の間續く。

この歌を、この土地では皆が知つて居る。と云ふのは、どんな小さな藪の茂みにでも、その交響樂

團が居るからである。また屋根裏納屋の中までその音を聞く事があるが、これは、時として、この虫が、芻秣に誘はれて、迷ひ込んで來たのである。しかし、何人と雖も、このセレナードの出所を正確に知る者はない。それ程この蒼白い蟋蟀の習性は神祕的なのだ。そこでこのセレナードを人々は、あのありふれた蟋蟀の歌だとして居るが、之れは大間違ひで、この蟋蟀ならば、この頃にはまだ極く若くて、唱はない。

彼の歌は、緩りとした柔い、グレイイ、グレイイと云ふのであるが、かすかな顫音のために一段と表現的になつて居る。之れを聞くと、振動膜が極めて薄く、且つ廣い事が察しられる。下葉にとまつたこの虫を、何物も妨げる物がないならば、その音は少しも變らない。しかしちよつとの物音にも、この演奏者は腹話術者に變つてしまふ。つい今し方まで其處の、すぐ側の、目の前あたりに聞えたのに、忽ち二十歩も彼方に當つて唱ひ續けて居る音が、距離のために鈍くなつて聞えて居る。

其處へ行つて見ると、何もない。音は、最初の地點から聞えて來る。所がそれでもない。音は、今度は左手から聞えて來る。かと思ふと、右手から、また、後方から聞えて來る。虫の鳴いて居る地點を、耳で聞き定めようとしたら、全く見當がつかず、どうしても不可能である。忍耐力をたつぷり持つて、それで慎重な注意を以つてして、はじめて、角燈の光を頼りに、この歌手を捕へる事が出来るのだ。こう云ふ具合にして捕へて、虫籠に入れた所の、若干のその虫が、我々の耳をかくも巧みに迷

はせる、この妙手に就いて私の知つて居る、僅かばかりの事を私に供給してくれたのだ。

翅鞘は左右何れも、かさかさな、透明な、玉葱の白い薄皮のやうに薄い、一枚の幅い膜から成つて居て、その全面に亘つて振動する事が出来る。その形は、上端の方を細めた、一ツの輪の切斷面の形である。この切斷面は、一本の太い縦の脈に沿ふて直角に屈折し、翅鞘の縁をなして下り、休息状態にある虫の側腹を包む。

右翅鞘が左翅鞘の上に重なつて居る。その内縁の下面、基部に近い所に、一ツの硬結があり、それから、五本の脈が派生して居るが、二本は上方に向かひ、二本は下方に向ひ、第五本目はほぼ横一文字である。この第五本目は、かすかに赭色を帯びて居るが、之れが鳴器の基礎を爲す部分、即ち、弓に相當する事は、之れを横に、細かい齒形が刻まれて居るので分かる。翅鞘の残りの部分には、なほ二三の脈があるが、それ等は決して重要なものではなく、單に膜を張つて居るだけで、摩擦器の一部を爲しては居ない。

左翅鞘、即ち、下方の翅鞘は、同じ構造だが、弓、硬結及びそれから派生する脈が、今度は、上面を占めて居るだけが違つて居る。更に、この二ツの弓、即ち、左右兩弓が、斜に交叉して居る事を確かめる事が出来る。

歌が最高潮に達した時には、双の翅鞘は、高々と掲げられて、まるで輕羅の廣い帆のやうで、内縁

が相觸れて居るばかりである。その時には、二ツの弓が互に斜に噛み合つて、その相互の摩擦が、張られた二枚の膜の響高い振動を生ずる。

音色は、各々の弓の齒が、反對の翅鞘の、それ自體ざら／＼の硬結に加へられるか、それとも又、それから派生する、滑かな四本の脈の一ツに加へられるかによつて、變るに違ひない。さうだとすると、この臆病な虫が、警戒する場合に、歌が此方から聞えて來たり、彼方から聞えて來たりするやうな、錯覺の起る原因が一部分了解出来る。

弱い音、強い音、はつきりした音、鈍い音等の錯覺、隨つて、距離の錯覺は、この腹話術者の技巧の主要手段だが、これはもう一つの原因があつて、それを見出す事は容易である。はつきりした音を出す時には、翅鞘は充分に掲げられて居る。鈍い音を出す時には、多かれ少なかれ下げられて居る。この後の方の姿態に於ては翅鞘の外縁は、虫の軟かい側腹に、いろ／＼な程度で押しつけられて居る。それだけ振動部の廣さが減じ、音が弱まるわけである。

ノツブを鳴らして置いて、指を靜かに近づけると、響きが押えつけられて、曇つて、はつきりしない音に變はり、何處か遠くから聞えてくるやうに思はれる。この蒼白い蟋蟀は、この音響學上の秘密を知つて居るのだ。彼は誰かゞ彼を捕へやうとすると、その振動板の縁を腹の軟い所に押しつけて、面喰はせる。我々の樂器にも音を押へる、弱音器がある。伊太利蟋蟀の弱音器は、よく之れと競争す

る事が出来るばかりか、手段の簡單なものと、効果の完全なものによつて、それを凌駕して居る。

鄙蟋蟀及びその同類も亦、翅鞘の縁を以て、腹部を深く、或は浅く包みつゝ、弱音器として使用する。しかしどれ一つとして、伊太利蟋蟀のそれ程、人を迷はす効果を、この方法から擧げる事は出来ない。

この距離の錯覚は、一寸した驚きの種子で、我々の極く小さな足音にも、この驚きが繰返へされるのだが、それに加ふるに、その音は澄んで、柔かいトレモロをなして居る。八月の宵の、深い静けさの中に、之れに優さる優雅な虫の音を、私は知らない。幾度か、優しい静かな月の光に、迷迭香の蔭に地に伏して、快きアルマスの音楽に聴き入つた事だらう。

夜の蟋蟀は庭内に満ちて居る。赤い花をつけたゴジアフヒのどの茂みにも、その合唱隊員が居り、どのラヴァンドの株にもその合唱隊員が居る。繁つた楊梅、テレピンの木が、演奏席となる。そしてこの小さな虫の群が、一つの灌木から他の灌木へと、可愛らしいほがらかな聲で、尋ね合ひ、答へ合ふ。と云ふよりは寧ろ、他の歌などには無頓着に、自分獨りで、自分の歡喜を唱つて居る。

仰げば、恰度私の頭上に高く、白鳥星座が、その大十字を天河の中に横たへて居る。伏せば、私の周圍一帶の地上に、虫の交響樂が浪打つて居る。己が喜びを語る微分子が、私をして満天の星の光景を忘れさせる。我々はあれ等の天の眼に就いては、何も知らぬが、彼等は目ばたきに似たきらめきを以

つて、靜に、冷かに、我々を視て居る。

科學は、彼等の距離、彼等の速度、彼等の本質量彼等の容積に就いて我々に語る。科學は巨大な數を以つて我々を惱まし、無限の大さを以つて我々を呆然たらしめる。しかし、どうしても我々の胸琴の一線をなりとも動かす事は出来ない。何故か。蓋、科學には肝腎の大秘密が缺けて居るからだ。それは生命の秘密だ。彼の天空には何があるのか。これ等の太陽は何を温めて居るのか。我々の世界と同じやうな世界だ、と理性は確言する。生命が果てしない變化の中に進化する種々の地球だ、と云ふ。

宇宙に對する素晴らしい觀念だ。しかし、それは要するに純然たる觀念であつて、何人でも知り得る、至上の證人たる、明白な事實によつて支持されて居ない。あり得べき事、甚だあり得べき事は、どうしても認めないでは居られない、何等疑の餘地を残さない、明白な事ではない。

所が反對に、私の蟋蟀たちよ、お前と一緒に居ると、私は、我々の土塊の魂たる、生命の戰慄を感じる。それだからこそ、私は、迷迭香の生垣に倚りそふて、白鳥星座には、氣のない一瞥を投げるだけで、私の全注意を、お前のセレナードに傾けて居るのだ。僅かばかりの蛋白が生命を宿して、悲喜を感じ得ると、果てしもなく巨きな無機物よりも、遙かに興味がある。

蝗虫類——その任務——發音器

『明日は、日が暑くならない中に、仕度するのだよ、子供たち。バツタ捕りに行くのだ』。さう告げると、就寝時の家の中が湧く。彼等は何を夢に見て居るのか、私の小さな協同者たちは。青い翅、赤い翅、が突然扇のやうに擴げられる。鋸の齒を植えたやうな、碧い、或は紅い、長い脚が、我々の手の中で蹴る。太い腿が、發條のやうに働いて、何か芝生の中に待伏せて居る小人の弩砲から發射された彈丸のやうに、昆虫を躍ねさせる。

彼等がこの楽しい睡りの幻燈の中で見て居る事を、私も亦見る事がある。人世の旅は、その兩極端に於て、同じ他愛もない物で、我々をあやすのだ。

若しも、老人に取つて手頃であると同時に、少年に取つても手頃で、危険がなくて、平和的な獵があるとなれば、それはまさに、バツタ獵だ。いや、實に楽しい朝々を我々はこの獵に負ふて居る。桑の實が黒く熟れて、私の助手たちに、藪中で少しばかりこつそりと失敬させてくれる頃は、何と云ふ楽しい頃だ。日に灼かれて積くなつた、硬い、稀な芝生の傾斜地に、何と思出の深い遠足をした事か。

私は強いその思出を保つて居るが、私の子供等も永くそれを保つて居るに違ひない。

ポール坊は、脚鬮がしなやかで、手が敏捷で、目が鋭い。彼はハハゴグサの茂みを調べてみる。其處にはトリユクサルが尖つた頭をして、嚴かに冥想して居る。彼は藪を穿鑿する。すると突然、不意を襲はれた小鳥の飛立つやうに、大きな灰色バツタが飛び出す。獵師の落膽はなかくに深い。彼は最初全速力で追ひかけるが、やがて足を止めてぼかんとして、この雲雀まがひの遠くに逃げ去るのを眺めて居る。この次には、もつとうまく行くに違ひない。この立派な獲物を二三手に入れないでは家に歸らないつもりだ。



伊太利バツタ

ポールよりも年下の、マリー、ポリーヌは、翅の紅い、後肢の洋紅色の伊太利バツタを辛抱強くねらつて居る。しかし、彼女の最も好む所は、もう一つの、装束の一番優雅な跳ね虫だ。このお氣に入りのバツタは脊の着け根を、四本の白線が、斜に交叉して描き出して居る、恰度聖アンドレーの十字のやうな、十字形で飾つて居る。彼の服には、古代記念牌の鏽を模した、緑青色の板がついて居る。手を宙に浮かせて、何時でも伏せられるやうにして、極く靜かに彼女は近づいて行き、ばつと手を被せる。甘く行つた。早速紙袋を差出してやる、この大發見物は、頭を眞先きに、紙袋の口に向けられ

て一跳びに、漏斗の底へ飛込んでしまふ。

かう云ふ風にして、紙袋が、一ツ一ツ、膨れて行く。かう云ふ風にして、すべての箱が虫で一杯になる。暑さが堪へ難くならない中に、我々は種々な虫を豊富に手に入れた。これ等を虫小舎で育て、甘い具合に訊ねてみたならば、多分我々に何事かを教へてくれるだらう。我々は歸路に着く。かうして殆ど費用をかけずに、バツタが、三人の者を幸福ならしめたのだ。

私が第一に私の寄宿生にかける問はかうである。「野に於けるお前等の任務は何か。」お前等が一般に評判の悪い事を、私は知つて居る。何れの書物も、お前たちを、害虫として取扱つて居る。この非難に、お前たちは値して居るのか。生意氣なやうだが、私はそれを疑ふ。勿論、それには例外はある。あの近東及び亞弗利加の災害たる、怖るべき荒掠者は別だ。

これ等の大食ひ共の悪評が、お前等全部の上に及んだわけで、お前等は、私のぼんやり知り得た所では、反對に、なか／＼有益で、害虫所ではない。私の知る限りでは、この土地では、曾て百姓がお前たちの害を訴へたのを聞かない。お前たちがどんな損害を興へると云つて、百姓がお前たちを責め得べきや。

お前たちは羊の食はぬ硬い芝草の先端を噛み切り、耕作地の肥えた草よりも、脊せた芝生の方を好み、お前たち以外の何物も食物を見出し得ないやうな不毛地に草を食む。お前たちは、お前たちの強

健な胃の助けを借りないならば到底利用出来ないやうなものを食つて生きて居る。

のみならず、お前たちが畑を訪れる頃は、お前たちを誘惑し得るだらう唯一の物、即ち青麥は、とうの昔に種子が出来て、消え去つて居る。若しお前たちが畑の中に入り込んで、少しく食ひ荒すやうな事があるとしたつて、それは大して憎むべき悪事ではない。サラダの葉を二三枚食ひ裂かれた位で諦めがつくのだ。

物の重要さを量るに、自分の畑の蕪の量を以つてするなど、云ふのは、甚だ怪しからぬ方法で、これは下らぬ末節のために、根本を忘れるものである。短見者流は、宇宙の秩序を擾してまでも、一ダースの梅の實を保存しようとするであらう。さうした男が昆虫の事を論ずると、昆虫を皆殺しにする事をしか云はない。

所が幸な事には、そんな事は彼に出来る事ではなく、また決して將來とても出来はしまい。事實、例へば、天産物のほんの僅な屑を盗むと云つて非難されるバツタが、その姿を地上から消した場合、どう云ふ結果に立至るかを考へて見たらよい。

九月から十月にかけて、二本の長い蘆を持つた子供に連れられて、七面鳥の群が、麥の刈株の中をやつて来る。この群が、グルー、グルーと云ふ音を、咯き出しながら、ゆつくりとさまよつて居る地域は、乾いて、裸で、日に灼かれて居る。せいぜい、やつれた二三の薊が、散り残りの毛玉を突立て

て居るに過ぎない。飢餓の氣の立ちこめる、こんな砂漠で、これ等の鳥はどうするか。

彼等は其處で、基督降誕祭の族長的な食卓を稱へんがために肥える。彼等は其處で、しつかりした美味しい肉を養ふ。一體、何を以てあるとお思ひになるか。バツタを食つてある。腿の美味さうに膨らんで居る奴を、あつちではつくり、こつちではつくりやるのだ。降誕祭の宵に、あれ程食はれるあの美味しい焼肉は、一文も金のかゝらぬ、しかも高味な、この秋のマナによつて、一部分作り出され、完成されるのだ。

あの小紋鳥と云ふのは、獵の獲物を家禽化したものだが、あれが鋸の目立てのやうな軋音を立てながら、農家の附近をほつき歩く時、何をあんなに熱心に探して居るのか。きつと穀物も探しては居るのだから、先づ何よりもバツタを探して居るので、そのバツタ故に、腋の下には小坐蒲團のやうな脂が乗り、その肉が一層美味くなるのだ。

牝鶏も亦、我々に取つて甚だ有難い結果となるのだが、之れが大好物だ。牝鶏は、彼の體質を刺戟して、彼をして一層産卵に適せしめるこの美味しい物を、とてもよく知つて居る。自由に抛つて置くと牝鶏は必ず雛を麥の刈株の中に連れて行つて、この美味しい御馳走をどんな風にすばしく吞込むかを彼等に教へる。要するに、家禽は、若し思のまゝにほつき歩く事が出来るならば、蝗虫類に、甚だ價値多い補食料品を負ふのだ。

我々の家禽以外に至つては、問題は一段と違つて来る。若し諸君が獵師であり、佛國南部地方の丘陵の誇りたる紅鷓鴣の眞の味を賞味する事が出来るのだつたら、只今打落した奴の餌袋を開いてみるとよい。あれ程悪く云はれて居る虫が、どれ程の働きを爲して居るかと云ふ事の、立派な證據を、其處に見出すに違ひない。鷓鴣は其奴が大好きなので、程度に差こそあれ、バツタを一杯に詰め込んで居るのを見るに違ひない。鷓鴣は其奴が大好きなので、其れを捕まへ得る限りは、穀物の種子よりもその方を好んで食つて居る。この食物は、香ばしくて、味があつて、温まるので、若し一年中之れがあるならば、鷓鴣は殆どそのために穀物を忘れてしまふであらうと思はれる。

今度はトウニスネルがあれ程までも稱揚して居るあの有名な足黒鳥の一族を調べて見よう。先頭はあのプロヴァンス人たちが「尾じろ」と呼ぶ所の鷓鴣で、これは九月になるとみつともないまでに肥つて、とても美味しい小串焼の材料になる。

私は、鳥類の採集をやつて居た頃、よく餌袋や砂囊を取出して、鳥の食物を調べてみた。所で鷓鴣の食物は次のやうなものだつた。第一にバツタ、次に穀象虫、スナムグリ、クリゾメル(葉甲虫の類)カシド(葉甲虫の類)ゴモクムシ等の鞘翅類、第三に、蜘蛛、蜈蚣、鼠婦、小さな蝸牛等、最後に、そして稀れに、山菜萹及茨の漿果等である。

之れでも分る通り、何でも見當り次第に、小さな生餌を少しづつ食ふ。それで之れは食虫鳥な

のだが、他に食ふものがなくて、腹の空いた時だけ漿果を食ふのである。私のノートに書きつけてある四十八件中、植物食を見出したのはたゞの三度で、それもほんの僅かの足し前に過ぎない。頻出度數に於ても、又量に於ても、最も優勢なのはバツタだが、一番小さくて、鳥の嚙下力を超過しないやうなのを選んで居る。

秋になると、プロヴァンス地方に羽根を休めて、之れからの大巡禮の門出の準備に、脂肪の行糧を臀部に貯める、他の小さな渡り鳥等もやはりさうである。皆、バツタが大好物で、之れなら實に豊富な貯藏食料なのだ。皆、荒蕪地や、耕して未だ種子蒔かぬ畑地で、先を争つて、飛翔の力の源泉たる、このびよん／＼と跳ねる餌食を啄んで居る。バツタ類は秋の小さな渡り鳥のマナである。

人間とても、之れを嫌ひはしない。ドーマ將軍が、その著『大砂漠』中に引用して居る一亞刺比の著者はかう云つて居る。

「キリギリス（註。一層正確に云へば、バツタで、之れをあの劍を持つて居る眞のキリギリスと混同してはいけない）は人間及び駱駝に取つて好い食物である。生のもの、或は乾物にしたのを、肢と翅と頭とを取り去り、炙り、或は茹で、麥の捏粉の肉汁煮に載せて調理して食べる。

日に乾かして、粉に磨り潰し、牛乳と混ぜ、或は麥粉と練り合はせ、之れを脂肪或は牛酪及び鹽と共に煮込む。

駱駝は之れを甚だ好む。炭を二段に積んだ間の、大きい穴の中に之れを積み上げて、乾かし或は炙つて、之れを駱駝に與へる。又黒人もさうして之れを食ふ。

メリエム（註、聖處女マリア）神の恵により、血の無き肉を食はん事を乞ふたので、神は彼女にイナゴを送つた。

預言者の妻たちは、人からイナゴを贈物に貰ふと、之れを籠に入れて、他の女たちに贈つた。

回教^カ徒^フの王オマール、一日、イナゴを食用に供する事の許されるや否やを人に問はれ、答へて云ふには『余も籠一杯欲しいものだ、食ふのだ』と。

これ等すべての例が證して居る通り、疑ひもなく、神の恵により、益は食用にとて人間に與へられたものである』

この亞刺比の博物學者の云ふやうに、之れを食用にするとしたら、胃の腑が餘程丈夫でなければならぬまいし、そんな丈夫な胃の腑は誰にでもあるものではないからして、私は其處までは極言はしないが、たゞ、バツタは多くの鳥に取つて天の賜物であると、云ふ事が出来ると思ふ。私が調べた多數の砂囊が、それを證據だてゝ居る。

他にもまだ澤山之れを珍重するものがあるが、殊に爬虫類が之れを好む。プロヴァンス地方の少女たちが慄毛をふるつて居るラツサド、即ち、眼状斑のある蜥蜴は、灼熱の太陽のために、蒸汽室のや

うになつてしまつた小石の蔭を好むのだが、その腹の中に之れが入つて居た。また私は壁に住む灰色の小さな蟻蝨が、その細い鼻面の端に、長い間覗つた一疋の蝨の大戦利品を咬えて、運んで行くのを何度見かけたか知れない。

魚すらも、運好く之れが手に入つた時には、喜んで之れを食ふ。バツタが跳ねる時、何處と云つて決まつた目的がない。そこで、彼は、無計算に發射された弾丸のやうに、彼の發條の盲目的な弾力のはじき飛ばす所に落ちる。若し落下點が水中だと、魚が其處に居て、早速この溺れた奴を吞んでしまふ。時とするところの御馳走が、身の破滅となる事がある。と云ふのは、魚の好きさうなものを、釣針の餌にする爲に、釣人がバツタを釣糸の先につけるからである。

私は之れ以上この小さな生餌の食ひ手を列擧するのはやめるが、これだけでも充分、バツタ類の大きな効用は極めてはつきりと分つて居る。彼は、次から次へと甚だ間接にはあるが、貧弱な芝草を、甚だ美味な料理に變じて、一番濫費的な食ひ手たる人間に、傳へるのである。そこで私も心から、あの亞刺比の筆者と同様にかう云はう『神の恵により、イナゴは食料にとて人間に與へられた』と。

たゞ一ツ私を躊躇させる點がある。それは直接食用と云ふ事である。鵓鳩だとか、七面鳥の仔だとか、その他種々の動物の形に於ける、間接の食用に就いては、誰一人として、彼に讃辭を呈する事を拒まうとはしない。それならば、この直接食用と云ふ事は、それ程不快なものであらうか。

回教々徒の大王オマールはさうは思つて居なかつた。彼はアレクサンドリーの圖書館を焼き拂つた亂暴者だ。胃の腑も頭と同様に粗野だつた彼は、一籠のイナゴを喜んで食ふであらうと云つて居た。

彼よりすつと以前に、尤も之れは賢明な粗食主義からだが、他に之れを食つて満足して居た者があつた。駱駝の毛の粗布を纏ふた洗禮のヨハネ、福音の先驅者にして、ヘロデ王の時代の賤民の大煽動者たるヨハネは、砂漠に住み、イナゴと野の蜂蜜とを食つて生きて居た。Esca autem ejus erat locustae et mel sylvestre とマタイ傳に云つて居る。

野の蜂蜜と云ふものを、カリコドムの壺によつてだけではあるが、私は知つて居る。相當に食へる。残る所は、砂漠のイナゴだ。云ひ換へればバツタだ。幼い頃、誰でもよくやるやうに、私はイナゴの腿を、生のまゝ嚼るのが好きだつた。相當に美味い。今日、我々も一つ偉くなつたつもりで、オマールと、洗禮のヨハネの料理を試みてみようではないか。

大きなバツタを捕まへて、極く簡単に料理する。あの亞刺比の著者の教へに従つて、牛酪と鹽で揚げたのだ。晝食に、この奇妙なフライが我々、大人も小供も、皆の間に分けられた。あの回教々徒の王様の御馳走は餘り評判が悪くはなかつた。アリストテレスが稱揚して居る蟬よりは遙に美味い。何處か芝蝦の味があり、焼いた蟹の香がある。若しあれ程僅かの肉に對して、あんな硬い皮がなかつたら、私は、これは美味しいものだと思つたかもしれない。しかしもう一度食つてみたいとは思はな

私の博物學者としての好奇心は、之れで二度古代の料理、即ち、蟬の料理と、バツタの料理に、誘惑されてしまつたが、どちらも大して私の感興を惹かなかつた。之れは黒人の頑丈な顎に、あの有名な回教々徒王が示した旺盛な食欲に、まかせて置かなければいけない。

我々の胃がお上品になつて、バツタなど食へないからと云つて、それは少しもバツタの價値を減ずるものではない。この芝生地（シベリヤ）の小さな反芻動物は、食物製造工場で一ツの大きな任務を持つて居る。彼等は無数の群を成して不毛の荒蕪地に生息し、其處に食をあさつて、利用し難きものを變じて、食用品となし、多數の消費者に之れを傳へる。その中で、第一に位するのは鳥であるが、その肉は、甚だ屢々人間が之れを頂戴する。

腹が減ると、腹の虫が、頑として聽かずに責め立てるので、生物の世界には、食物の獲得程緊急已み難いものはない。食堂に席を贏ち得んがためには、各動物は、その最大量の活動、技巧、疲勞、奸計、鬭争を消費する。そして世を擧つての大饗宴は、一ツの歡喜である可きものが、却つて多數のものには、一つの苦しみとなつて居る。人間も亦、なか／＼この餓者の混戰の悲惨をまぬかれ得ない。否それ所か、却つて、餘りにも屢々、情ない事には、その萬斛の苦澁を味はつて居る。

あれだけ惻愍な人間の事だ、どうにかしまひには、之れから脱却し得るであらうか。出来る、と科

學は我々に告げる。化學は、さう遠くない將來に、食糧問題を解決してみせると約束してくれる。その姉妹たる物理學が、之れがためにその道を準備して居る。既に物理學はあの太陽をして一層効果的に働かせやうと考へて居るのだ。何しろ太陽と來ては、柄ばかり大きい怠け者で、葡萄の房を甘くし麥の穂を色づかせれば、それでも我々に對する義務は済んだものと思つて居るのだから始末が悪るい。そこで、物理學は、太陽の熱と、その光線とを、樽詰めにし、鐵管で導いて、何處でも我々の望む所で、働かせよう云ふのだ。

かう云ふ風に貯藏したエネルギーで、家々の爐を暖め、車仕掛けが廻はり、杵が捏ね、荒鐘が卸ろし、圓筒が粉末にする。そして、季節々々の天候不順に災されて、あれ程浪費的な百姓の仕事も、費用はかゝらず、能率の確實に擧がる工場の仕事とならうと云ふわけである。

さうなると巧妙な反應に富んだ化學が働いて、食物をそつくりと作り出してくれるが、その食物たるやその精分だけ凝集してあつて、全部消化吸収され得べく、殆ど滓を残さない。麵麩は一個の丸薬となり、ピフテキは一滴のジュエリーとならう。野良仕事は、野蠻時代の苦役となつて、今はたゞ思出に残るばかり、たゞ歴史家のみが之れを語るであらう。最後の羊と最後の牛とは、剝製にされて博物館に祭り込まれ、西比利の氷原から發掘された巨象と同じ資格で、珍奇なものとして飾られるであらう。

家畜の群だ、種子だ、果實だ、野菜だと云つたやうな、そんな古いものはすべて、何時かは消ゆべきものだ。それが進歩と云ふものださうだ。思ひ上がつて、何等不可能な事を認めぬ化學は、さう確言して居る。

かうした食糧の黄金時代が、私にはどうも信じられない。之れが何か新しい毒物を作るのだと云ふと、化學は實に怖ろしい程巧妙であつて、我々の化學實驗室の蒐集品と來ては、まことに毒物一式を備へた兵器倉庫の觀がある。何か蒸溜器を發明して、折角の馬鈴薯を潰ぶして、我々を痴呆者の群と化せしむ可き酒精の激流を、流れ出でしめる段になると、工業は實に測り知れぬ行動方法を知つて居るのだ。

然し、眞に營養價値ある物質を、たゞ一口だけなりとも、人工によつて作り出す段になると、それは全く別問題だ。決してそんなものは變形蒸溜場の中で、作り出された事はない。將來とても、そんなものゝ得られない事は、夢疑ふ餘地がない。有機物こそ、唯一の眞の食糧なのだが、これは實驗室で調合されるものでは、決してない。生命こそはその化學者なのだ。

そこで我々は農業と牧畜とを保存して置く方が賢いと云ふ事になる。我々の食物は、植物と動物との辛抱強い働きによつて、作り出されるに任せて置かうではないか。あの亂暴な工場と云ふものに警戒しようではないか。さまざまな繊細な方法、殊に基督降誕祭の七面鳥製造に協力する、あのバツタ

の腹に對する我々の信頼を持ち續けやうではないか。この腹には特別の料理法があるので、變形蒸溜場がいくら之れを嫉視した所で、何時になつたつて決してそれを眞似る事は出来ないのだ。

營養に富んだ微分子を集積し、之れを以つて多數の貧しい者の餓を満たさしめるこの虫は、彼の喜びを表現するために、一種の音楽を有して居る。満腹の身體を、一杯に射す日光に曝して、陶然として憩ふて居るバツタを観察してみようではないか。亂暴な弓の摩擦音を、三四度繰返へしては休みつゝ、彼は彼の歌を唱ふ。太い後腿の、或は右で、或は左で、或は兩方一緒に使つて、彼は自分の側腹を擦する。

まことに貧弱な音しか出ない。餘りに微かなので、私は已むを得ずボール坊の耳を借りて、やつと實際に音が出て居る事を確めた程だ。それは針の先で紙の面を擦つた時の音に似て居る。それが彼の歌の全部であつて、實に沈黙に近い。

尤もこれ程簡単な樂器では、それ以上を期待するのが無理だ。この樂器には、あの蟋蟀類に見たやうなものはない。齒形の附いた弓もなければ、タンパノンのやうに張られた振動膜もない。

例へば、伊太利バツタ (*Caloptenus Italicus* Lin.) に我々の注意を向けてみよう。他の蝗虫類はその鳴器を模して居るに過ぎないのだから。後腿が、上面及下面に於て、龍骨形に隆起して居る。更に、各方面には、二本の太い縦の脈がある。この親脈の間に、上下面どちらも、V字形をなした一聯

の小脈が並んで居る。そして、その全部が、こちら側の外面も、あちら側の内面も、同じやうに突起し、同じやうにはつきりと隆起して居る。そして、この両面が同様である事よりも、一層私を驚かしたのは、これ等の脈が全部滑かな事である。更に又、翅鞘の下端は、弓の役をする腿が之れを擦るのだが、その下端がやはり何の變哲もないのだ。翅鞘の全面に於けると同様、其處には丈夫な脈が見られるが、しかし、鐘のやうなざら／＼もなく、何等の齒形もない。

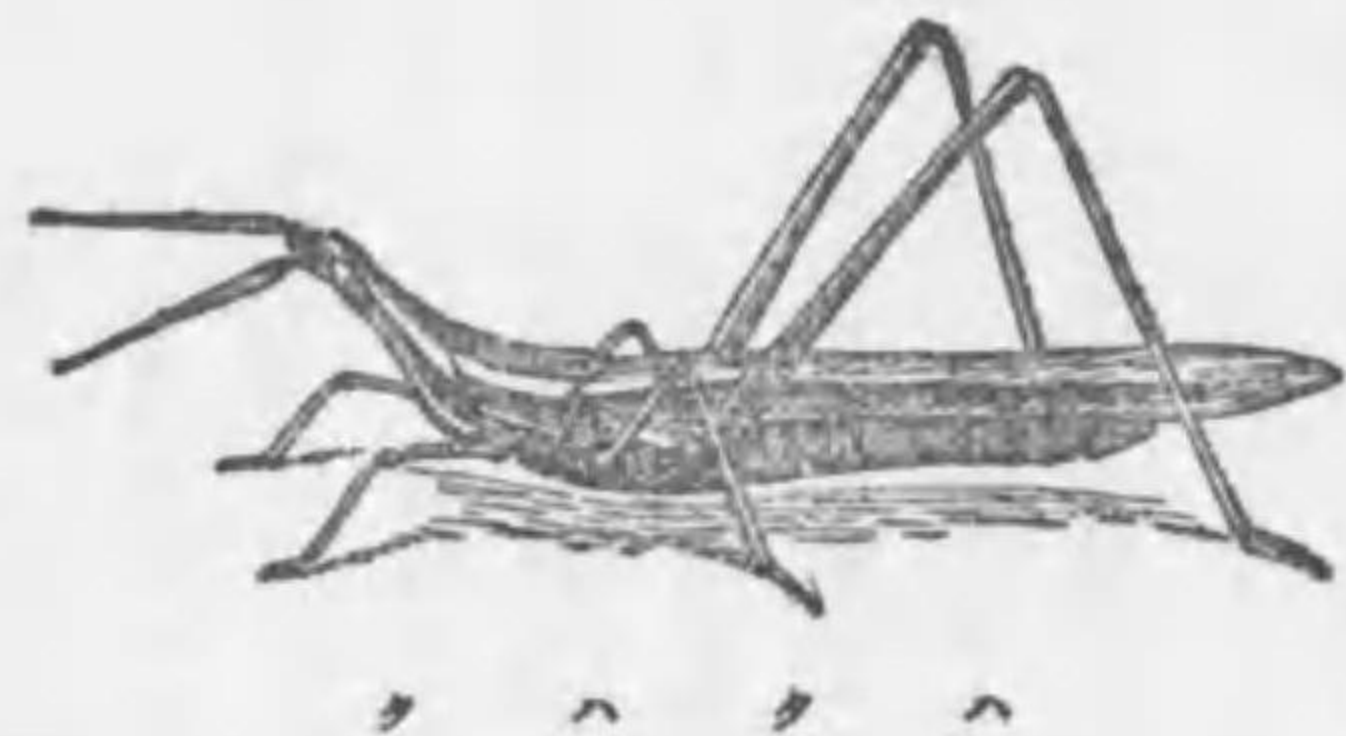
こんな他愛もない樂器の眞似みたいな物で、どんな音が出せるのか。やつと何かかさ／＼な膜を軽く擦つた位の音だ。しかもその聞える程の音を出すために、虫は激しく後腿を擧げ下げして、その結果に満足して居る。彼が側腹を擦るのは、まあ恰度、我々が満足を感じた瞬間に、何等音を出さうと云ふ氣もなく、兩手を擦り合はせるやうなものだ。それは彼の喜びを表現する彼獨特の方法なのだ。

空に斷雲が飛んで、日が照つたり、翳げつたりする時の彼を調べてみよう。瞬間が現はれると、早速双腿が擦り出す。そして日の光が暖くなるに連れて、益々活潑に擦る。歌は極く短い、日射しの續く限り、反覆される。影が再び落ちて来ると、歌は即座に止み、次の晴れ間を待つて、再び續けられるが、相變らず短い斷音の反覆だ。之れでみると、もう間違ふ餘地がない。この歌は、これ等光の熱愛者にあつては、單なる安易感の現れに過ぎない。餌袋が一杯で、太陽の光が愛撫してくれると、バツタにはバツタの喜びがあるのだ。

すべてのイナゴ類が、陽氣に側腹を擦るわけではない。ハタハタ (*Truxalis nasuta* Lin.) は途方もなく長い後肢を持つて居るが、太陽がどんなに熱心に彼を擦つたつて、彼はむつ／＼と黙り込んで居る。私は彼がその腿を弓のやうに動かししたのを見た事がない。この腿は跳ねる事以外には用ひやうがないのだ。それ程長い腿なのだ。

大きな灰色バツタ (*Pachytillus cinerascens* Fab.) も黙りやだが、之れはたしかに、後肢が餘り長過ぎるからで、彼には、特殊な歡喜表現法がある。この巨怪は私の庭を屢々訪れて来るのだが、冬の最中ですらもやつて来る。天氣が穏かで、日が暖かいと、彼が迷迭香の上で、翅を擴げて、まるで飛立とうとするかのやうに、何時までも、急速にそれを動かして居るのを見かける。その動かし方は、極めて早いのだが、如何にもやさしいので、殆ど耳に聞える程の音を立てなく。

中には之れよりも遙に歩の悪い連中もある。例へば、ヴァントウー山の嶺で、アルプスのアナロットと好い相棒の、徒歩バツタ (*Pezotettix pedes- stris* Lin.) がそれで、彼れはアルプス地方に銀布のやうに擴げられて居る葦藪 (*Paronychia serpyllifolia* D.C.) の間を歩き廻はる徒歩虫であり、附



近の雪と同様に眞白な小花が、紅色の眼で微笑んで居るアンドロサス (*Androsace villosa* Lin.) の賓客として、短いモーニングコートか何かで跳ねて居る虫だが、その常住の花畑の植物と同じやうな、新鮮な色彩を帯びて居る。

光は、かうした高地では、霧に遮られる事が少ないので、彼の装束を簡素にも優雅なものとした。春は縞子のやうに滑かで、薄い褐色を帯び、腹は黄色く、太腿の下面は珊瑚の紅を差し、後脚は素晴らしい碧青で、前方に象牙の腕環をはめて居る。しかし、幼虫の形態を脱却する事拙くして、この伊達者も甚だ衣裳の裾が短い。

翅鞘としては、ざら／＼した二ツの短裾が互に間を距てゝ居り、殆ど腹部の第一環節以上には達しない。翅は更に小さな二ツの發育不全器管である、それら全部が彼の腰の上部の裸をやつと蔽ふて居るに過ぎない。初めて之れを見たものは、何かの幼虫だと思ふが、それは思ひ違ひだ。これでも立派な成虫なので、交尾出来るまでに成熟して居るのだ。この虫は、かうした略装で一生を終るのだ。

これ程までも布を惜しんで裁たれた上着を着て居たのでは、唱ふ事が出来ない事は、云ふ必要もあるまい。それでも弓だけは立派にある。後の太腿だ。しかし、それで擦すつて鳴らす面、翅鞘の縁が缺けて居るのだ。他の蝗虫類は餘り音を立てないのだが、此奴になると全くの啞である。私の周囲の一番耳の鋭い者が、一生懸命になつて聴いてみても駄目である。三ヶ月飼つてみて、たゞの一度も極

く小さな音さへ聞えた事がない。この黙り屋は、何か他の方法で彼の歡喜を表現し、雌を招くに違ひない。どんな方法だらうか。私には分つて居ない。

又、彼の近似虫が、同じアルプスの芝生地で、素晴らしい飛翔具を備へて居るのに、どう云ふ譯でこの虫が、飛行器管を節約して、重々しい徒歩者の状態に止まつて居るのか。それも全然分らない。彼は翅鞘と翅の萌芽を持つて居る。これは卵が幼虫に爲す所の贈物だ。しかも、彼はこの萌芽を發達させて、之れを利用する事に氣がつかない。彼は頑固にびよ／＼と跳ね續けて、それ以上の野心を起さない。彼は徒歩で行く事に満足し、分類學の所謂、徒歩バツタで何時までも居る事に満足して居る。しかも、運搬の最上機關たる翅を獲得する事は、やつて出来ない事ではないと思はれるのだが。

一ツの嶺から他の嶺へと、雪の一杯に詰つた小谿の上を急速に飛び翔けり、或は、草を食み盡した牧場から、まだ利用されぬ他の牧場へと容易に飛んで行くと云ふ事は、彼に取つて問題とするに足らぬ便益だとも云ふのであらうか。明かにさうではない。他の蝗虫類、殊に嶺々に於ける彼の同胞は、翅を持つて居て、甚だ結構な事だと思つて居る。どう云ふわけでその眞似をしないのだらうか。帆をああして、その發育不全器管の中に、曇み込んで使はないで置かず、その袋から取出した方が大した利益だらうと思はれるのに、彼は決して何もしない。何故か。

人々はいかう答へる。「發育の停止だ」と。宜しい。生命がその仕事の途中で手を止めてしまつたの

だ。この虫は、見積りを自分の中に藏して居る最後の形態に達しないで居るのだ、と。この答へ方は一見極めて巧みではあるが、之れでは答へにならない。これでは質問は形を變へてまた現れて来る。その停止は何處から来たのか、と。

幼虫は、成年に達したら飛翔し得る希望を抱いて生れて来る。この素晴らしい未來の保證として、幼虫は脊に四ツの袋を持ち、その中に貴重な萌芽が眠つて居る。萬事、普通の進化の捷通りに按配されて居る。所が、後になつて見ると、虫の體組織がその約束を果さない。その契約を反古にしてしまつて、成虫を無帆で捨て、置き、帆は減退して無用の襤褸切れになつてしまつて居る。

この裸の状態は、之れをアルプスの生活條件の峻厳さに歸しなければならぬか。決してさうではない。何とならば、他の跳ね虫等は、同じ芝生地に棲みながら、幼虫時代の萌芽によつて豫告された翼器に、極めてよく達するからである。

人の確言する所に據ると、必要に促されて、試みに試みを重ね、進歩に進歩を重ねて、動物は遂にそれ／＼の器管を獲得するのださうで、必要以外には何等の創造的干渉をも認めて居ない。例へばバツタ類、就中ヴァントウー山嶺に飛んで居るあのバツタ類も、さう云ふ風にして出来たのださうだ。彼等はそのけちくさい幼虫時代の短裾から、幾世紀に亘る年月によつて養はれた、隱密の働きによつて、翅鞘と翅とを作り出したのださうだ。

まことに結構な説である。高名な先生たち。それならば、あの徒歩バツタは、どう云ふ理由から、彼の飛行器管を、お粗末な下圖以上に出でしめまいと決心したのか、どうか聞かせて貰ひ度いものだ。彼とても亦、きつと、幾世紀も幾世紀の間、必要の鞭を強く感じたに違ひない。小石の間に轉落して、苦しい思をする時に、彼は飛翔によつて身體の重さから脱却する事が、彼に取つて如何に便益であるかを感じたに違ひない。しかも、彼の體組織のあらゆる試みは、より好き運命を目指して如何に努力しても、未だその翅の萌芽を一枚の板に伸ばす事が出来ないうで居るのだ。

諸君の學説をうかゞふと、差迫つた必要と、食物と、氣候と、習慣との同一條件に於ても、あるものは成功して飛翔し得るに至り、他のものは失敗して何時までも鈍重な徒歩者で居ると云ふ事になる。私も言葉だけで満足して、膀胱を提灯と思ひ違へて居れば好いのだが、さうも出来ないから、私はそれ等の説明を抛棄する。いつそ簡單に知らぬと云つた方が、何物にも害を及ぼさぬだけ、ましである。

だがこんな時代遅れは捨て、置かうではないか。彼は同じ仲間の中で、どう云ふ理由からか、一時代遅れて居るのだ。體組織の中には、後退も、停止も、飛躍もあつて、我々の好奇心の窺知を許さない。不可測な起源の問題に出會つたら、最善の方法は謹しんでお辭儀をして通り過ぎる事だ。

蝗虫類——産卵

我が國のバツタ類は何をする事を知つて居るか。技巧としては殆ど云ふに足らぬ。彼等の世にあるのは、鍊金術師としてゝあつて、彼等の蒸溜壺の中で、より高等な仕事に用ゆべき材料を、作り出し精練して居るのである。夜を更かしつゝ物思ふ時刻に、爐端で、彼等の任務に關するこのノートに鉛筆を走らせるに方り、私は、彼等が、物々の姿を映し出す魔鏡たる、思想の目醒めに、直接になり或は間接になり、貢獻して居るとは斷言しない。彼等の世にあるは、彼等として出来るだけ榮え、且つ繁殖するためであるが、それこそ食物製造係に任せられた禽獸の、至上の掟である。

一見したゞけでは、時に阿弗利加を危殆に瀕せしめる貪食な種類を除いては、バツタ類は殆ど人の注意を惹かない。彼等はほんの僅かばかりの物をぼつ／＼と嚙つて居る連中で、私の鐘形籠の中に居る虫全體に、たつた一枚の高莖の葉でも呉れてやれば、實に大盤振舞と思はれる程である。所がその繁殖に至ると、全く問題は別で、一時私等の注意をそれに向けて見るだけの價値はある。

しかし、キリギリス類の婚姻奇風と同様の奇風を期待してはいけない。バツタ類は構造こそ極めて似ては居るものゝ、これは、習性上、性格上、全く新しい別個の世界である。蓋し、バツタ類は、平和的な種類で、交尾に關する一切は端然と行はれて、何等の醜狀を呈せず、昆虫界の慣例に少しも戻る所がない。生殖的陶醉の時機に之を訪れ見た者は、バツタの出現が、キリギリス類に遅れて居り、原始的直翅類が、その放縱な發情期の馬鹿真似をし盡した直後である事を認めるのである。そこで、どんな場合にも、やゝもすれば猥らになり易くて取扱ひ難いこの問題に就いて、何等特記すべきものがない。まことに有難い事だ。それで一足飛びに産卵の事に移るとしよう。

八月の末頃、正午少し前に、伊太利バツタ (*Gedipoda carulescens* Lin.) をよく監視してみよう。之れは私の附近で一番氣の荒い跳ね虫だ。彼は脊が丸く、蹴飛ばし方が亂暴で、翅鞘に蔽はれる事まことに短く、やつと、腹端に達するか達しない位である。大部分は赭味を帯びて居て、それに褐色の斑點がある。中にはもつと洒落て、前胸甲を縁取つて、白味がかつた一本の笹縁を飾り、それが頭上と翅鞘上に伸びて居る。翅は着根が薔薇色で、他は無色である。後方の脛節は葡萄酒様の赤色である。

日當りの好い所で、必ず籠の縁に、母虫はその産卵に適當な場所を選ぶが、これは、籠の網目が、必要に應じて、支據點を提供するからだ。彼女は、緩漫な努力で、その鈍角な消息子たる腹部を、垂直に砂中に突込むが、腹部は全部姿を隠してしまふ。別に穿孔器が無いので、なか／＼地中に入り悪

く、とかく躊躇勝ちであるが、それでも遂には、あの弱者の強力な挺たる、堅忍を以つて、目的は達せられる。

其處で母虫は、體を半分砂中に埋めて、身構へが出来た。彼女は一寸身體を仰け反るが、それが規則正しく間を置いて繰返へされる。これは明かに卵を押し出す産卵管の努力に相當して居る。頸筋にも一つの搏動が傳はり、それが頭を、びくり／＼と擧げたり、下げたりする。かうした頭部の振動を除くと、躰は、その前半分だけしか見えて居ないのだが、全く不動である。産婦はそれ程までも、自分の仕事に没頭して居るのである。一疋の雄が、比較的に見るとまるで一寸法師だが、ひよつこりその近くへやつて来て、不思議さうに、お産中の母虫を、何時までも眺めて居る事が稀ではない。時とすると更に、數疋の雌が、その大きな顔を仕事中の仲間の方へ向けて、すらつと見物して居る事がある。彼女たちはこの出来事に興味を感じて居るらしく、多分は「直きに私の番だ」と思つて居るのであらう。



約四十分程凝つとして居た後で、母虫は急に腹部を砂中から引抜き、遠方へ跳びのく。産みつけた卵に一瞥を投ずるでもなく、孔の口に砂を掃きかけて之を蔽ひ

隠すでもない。孔の閉塞は、砂の自然的崩解によつて、どうやらかうやら、獨りで行はれる。これこそ實に、この上なく簡單な、この上なく母虫の配慮を無用にした遺方だ。母バツタは母性愛の手本と云ふわけには行かない。

中にはこれ程無頓着に、産卵を見捨てないものもある。例へば青い翅に、黒い横線のある、ありふれたバツタ (*Eidipoda coerulescens* Lin.)とか、或は又、黒線バツタ (*Pachytillus nigrofasciatus* de Géer) と云ふバツタがそれだが、これなどは、孔雀色様の緑の斑點なり、前胸甲の白十字なりを想起させるやうな名前を附けたらよささうなものなのに、これでは一向特徴が現れて居ない。

産卵の際は、兩者共に、伊太利バツタの姿勢を繰返へして居る。腹部は垂直に地中に突込まれ、躰の残りの部分は、崩壊土の下に、一部分隠れて居る。之れ亦長い間凝つと動かずに居るが、その時間は半時間を超へる。頭部が微かにびく／＼と動くが、之れは地下に於ける努力の徴候である。

この兩種の産婦はそれでも遂に、身體を抜き出し、後肢を高々と擧げて、少しばかりの砂を孔の口に掃き寄せ、急がし氣に足踏みして、之れを踏み固める。空色の、或は薔薇色の、彼女等の細つそりした脛節を急がし氣に動かして、塞がねばらぬ口の上を、左右の踵で、交互に打叩く光景は、若干の優美さが無いわけではない。かう云ふ風にして住居の入口は、陽氣な足踏みで、閉され、隠される。卵穴は姿を隠し、實によく跡を消されるので、悪い企らみを持つた者も、たゞ目だけを頼りとした

のでは、到底発見し得ない程である。

そればかりではない。この二つの撞杆のモーターは太腿であつて、その太腿が、揚つたり下つたりする際に、翅鞘の縁を少しく擦るのである。そしてこの弓の運動の結果、極めて微細な音が起こるが、この虫が日向で、静かな午睡の夢を揺つて居る、あの歌に似て居る。

牝鶏は、卵が産まれると、歡喜の歌を以つて、之れを稱へる。彼女は、その母性の喜びを四邊一帯に告げるのである。それと同じ様な事を、多くの場合、バツタもやるのだ。彼の貧弱な弓を振つて、彼は子の出生を祝ふのである。彼は云ふ、「我は全然死するに非ず (Non omnis moriar)。私は未來の寶を地下に埋めた。私は私に代るべき一樽の芽を大孵化器の孵化に託した」。

一寸の間に、巢の在り場所は、萬事整頓する。すると母虫はその場所を去り、幾口かの青草を食つて、仕事の勞を癒やし、再び仕事に取りかゝる準備をする。

我が國のバツタ類中で一番大きい灰色バツタ (*Pachytillus cinerascens* Fab.) は、阿弗利加のそれと軀幹の大を競ふが、しかしそのやうな災害的習性は持つて居ない。これは平和な、食物の淡白な、農作物に就いて何等非難すべき點のないものである。彼は飼育して容易に観察し、若干の参考材料を得る事が出来る。

産卵は四月の末頃、交尾後日ならずして行はれるが、可なり永くかゝる。母虫は、程度に種々の差

こそあれ、他のバツタ類の雌と同様に、腹端に四本の短い發掘器を装ふて居るが、その四本は對をなして配置され、鈎形に曲つた爪のやうな格をして居る。上方の一對は、下方の一對よりも強大で、その鈎先を上方に向けて居り、下方の一對は、之れより小さく、其の鈎先を下方に向けて居る。この鈎先は、小爪のやうなもので、産卵期には硬くて黒い。のみならず、その中低面は少しく匙狀に掘られて居る。之れが鶴嘴であり、圓鋸であり、穿孔の道具である。

産婦はその長い腹を躰の中軸と直角に曲げる。その四つの圓鋸でもつて、地に噛みつき、乾いた土を少しく持ち上げる。それから、極めて緩りと、腹を突込むのだが、見た目には如何にも楽しさうで何の騒ぎもなく、そんなに辛い仕事とは思はれない。

虫は凝つとして、心を潜めて居る。例令穿孔器を柔かい肥料土の中に突込む時だつて、これ以上に控へ目には仕事をしはしまし。まるで牛酪の中で仕事をして居るかのやうに見えるが、實は堅い、緻密な土を、消息子は貫きつゝあるのだ。

若し出来る事ならば、この穿孔器たる四つ目錐の働きを見る事は興味ある事であらう。不幸にしてすべては地下の神祕の中に行はれる。極く僅かの除土すらも外部に撥び出されないので、何一つ地下の仕事の有様を語るものはない。少しづつ腹部が静かにめり込んで行く。まるで我々の指を、柔かい粘土の塊の中に突込むやうである。

四つの圓錐が通路を開き、土を粉碎し、腹が恰度、植木屋の木鍬のやうに、その土を側面に押しつけるに違ひない。

産卵に適當な場所は、必ずしも常に、一度で見つかるわけでない。私の見た或る産婦などは、腹を全部突込んで抜き、突込んで抜き、五つも井戸を掘つてから、やつと適當な場所を見出して居る。孔は缺點があると認められると、之れを穿つたまゝの状態に捨てられる。それを調べてみると、豎の圓筒形の孔で、太さは太い鉛筆程で、その清潔さは驚くべきものである。轉把錐を以つてしても之れ以上には出来まい。その長さは、虫の腹部を、環節の伸張力の許す限り伸ばした程の、長さである。

第六回目の試みで、場所は適當と認められた。其處で産卵が行はれる。しかし外部からは少しもそれらしい様子が見えない。それ程母虫は凝つと動かさず、腹部はその基部までめり込んで居り、それがために、長い翅は地面に食附いて、皺になつて、口を開けて居る。この作業はたつぶり一時間続く。

それから遂に、腹部が少しづつ、抜き出される。今や地面近くまで登つて来て、最も觀察に適した状態だ。四つの瓣は不斷の運動で動かされて、一種の粘液を泡立たせるが、その粘液が固まつて牛乳のやうな白さの泡になる。それはほど、卵を泡で包む蟻螂の仕事と等しい。

泡状物質は穴の入口で固まつて、乳頭のやうな、卸のやうな形を取つて、大々と突起するが、地面

の灰色の地の上に、眞白に浮上つて居るので、厭でも人の目を惹かすには居ない。それは軟かく、ねば／＼して居るが、可なり速かに硬くなる。この閉鎖用の卸がすつかりと出来上ると、母虫は其處を去つて、もう今産みつけた卵の事などは忘れてしまひ、僅かの日數の間を措いて、また他所で産卵を繰返へすのである。

また時によると、この最後の泡塗りが、表面に達せず、地面より一寸低い穴の中で止まり、間もなく、縁の崩壊土によつて蔽はれてしまふ事がある。その時には、外から見たのでは、少しも産卵の場所が分らない。

私の捕へて居る、大小種々なバツタは、砂を掃き寄せて、孔の口を蔽ひ隠しても、私が熱心に監視して居るので、私の好奇心の裏を搔く事が出来なかつた。私は、各々のバツタに就いて、卵子の小樽の藏してある場所を正確に知つて居る。今や之れを調べてみる時が来た。

三四センチメートルの深さを、ナイフの先きで掘つてみると、容易にそれを發見する事が出来る。その形は種類によつて可なり異つて居るが、根本の構造に於ては何れも同じであつて、必ず、泡を固めた一個の筒であり、その泡は、尼蟻螂の巢の泡と同様の泡である。

この粗末な被覆、防壁の築工に、産婦は直接働いては居ない。この礦物質の外被は、最初の中半流動體で、ねち／＼して、卵の産み出される時に一緒に出て来る所の物質の、單なる滲透の結果であ

る。孔の壁面に之れが滲み込み、それが急速に硬化して、セメントで固めたやうな筒になるので、何等特別の技巧が加へられて居るわけではない。

内部には少しの異物も混じて居らず、たゞ泡と卵子があるだけだ。卵子はたゞ下部を占めるだけで、一種の泡の母岩の中に浸つて居り、斜に、整然と楯詰りになつて居る。

上部は、或はよく發達して居り、或はそれ程發達して居ないものもあるが、單に泡ばかりで出来て居り、ざく／＼で、脆い。若い幼虫が初めて日の目を見る際に、果たさねばならぬその役目の故に、私は之れに「登リ口」の名を與へやう。更に注意して置く事は、すべての殻が、地中にほとゞ垂直に突込まれて居て、その上端は殆ど地面とすれ／＼である事である。

今度は、虫小舎の中で得た産卵の種類を細かく記してみよう。

灰色バツタ (*Pachytilus cinerascens*) の産卵は長さ六センチメートル、幅八ミリメートルの圓筒形で上端は、地面の外に頭を出して居る時は、膨れて一つの鉤のやうになつて居る。殘餘の部分はすべて同じ太さである。卵子は灰褐色で、伸びて紡錘形をなして居る。泡の中に浸され、斜に並んで居て、僅かに全長の約六分の一をしか占めて居ない。筒の他の部分は細かい白泡で、甚だ脆く、外部が土の微粒で汚されて居る。卵子の数は大したものではなく、約三十程である。しかし母虫は數回産卵する。黒線バツタ (*Pachytilus nigrofasciatus*) のそれは、少しく彎曲した圓筒形で、下端が圓味を帯び、

上端は直角に切斷されて居る。その大きさは長さ三四センチメートル、幅五ミリメートルに達する。卵子は、その數約二十で、橙褐色を帯び、細かい點からなる、優美な網目で飾られて居る。卵子を包んで居る泡状母岩は少量である。しかしその上には、極めて細かい硝子様の甚だ滲透性に富んだ、泡の長柱が立つて居る。

翅の青いバツタの産卵は、コンマのやうな形を取り、太い頭を下に向け、尖つた先を上に向けて居る。蒸溜壺の腹のやうな、その下部に卵子を藏して居るのだが、やはり大して數多くなく、精々三十程で、可なり濃い橙褐色だが、點々はない。圓錐形の、曲つた蓋が、この容器に續いて居る。

高峰を好む徒歩バツタは、平原の住者たる青翅バツタの方式を採用して居る。彼の作品もやはり、不正確なコンマ様の形で、先端が上方を向いて居る。卵子は約二ダースで、濃い赤茶色で、その裝飾は素晴らしく、編目の凹んだ、精緻なレースをつけて居る。かうした思ひ付けぬ優美な裝飾の上を、虫目鏡で見廻はしてみると、全く驚かされてしまふ。美は到る處にその足跡を残すもので、飛翔力を獲得する事すら出来ぬ、天恵の少い一種のバツタの、つまらぬ殻にまでもその足跡を残して居る。

伊太利バツタは、先づその卵を一つの小樽に詰め、それから、今やその容器を閉さうとして、彼が氣がつくのである。何か肝腎な物が缺けて居る。登リ口だ。上端の、小樽が終つて、閉される筈だと思はれるあたりに、一つ急な溢れ込みが出来て、仕事の進行を一變させて居る。そしてその先きは掟

通り泡の突起となつて伸びて居る。かうして出来た住居は、二層より成り、外部から見ると、一つの深い溝によつて、截然と區別されて居る。下部は卵形で、胚種の塊を含み、上部はコンマの尾のやうに細く尖り、泡のみで出来て居る。この兩層はほぼ自由な一つの孔で相通じて居る。

バツタの技巧は、まだ他に種々な産卵保護筐を随かに知つて居るに違ひない。彼は、種々な建物で卵を保護する、そしてその建物は、簡單なものもあれば、巧妙を極めたものもあるが何れも我々の注意に値する。それに關して既に知れて居る事は、未だ知られぬ事に比してまことに僅なものである。しかし構はない。虫小舎の飼育が我々に啓示する所は、一般の構造に就て我々に教へるに足りる。残る所は、下部が卵子の倉庫であり、上部が、泡状の小塔をなして居るこの建造物が、如何にして作られるかを知る事である。

直接観察はこの場合實行不可能である。若し地を掘り起して、目下仕事中の腹部を露出しようなどとしやうものならば、産婦は我々の無遠慮さの餘りにも身近く迫るを厭ふて、遠方に飛び跳ねてしまひ、我々に何事をも教へる所がないであらう。幸にして、私の地方で一番奇妙な一種のバツタが、彼の秘密を我々に洩してくれる。それはハタハタ (*Truxalis nasuta* Lin.) で、灰色バツタに次で、バツタ類中最大のバツタである。

彼は灰色バツタに比して、容積こそ劣れ、身體つきのすらりとした所、殊にその形の獨創的な所に

於て、如何に之を凌駕して居る事か。我が地方の日に灼けた芝生地で、彼の發條に比し得べき發條を以つて飛び跳ねる虫は一疋も居ない。後方に何と云ふ肢を持ち、何と云ふ途法もない腿を持ち、何と云ふ長脚を持つて居るのだ。その長さは實に、虫躰の全長を超へて居る。

しかし實際の結果は、この誇張に殆ど相應じて居ない。この虫は葡萄畑の邊の、少しく芝生のある砂利地の上を、危つかしい足取りで歩き廻つて居るが、その長脚が、運動に手間取られて、困つて居るやうに見える。かう云ふ道具を以つてしては、過度の長さのために却つて効果を殺がれて、跳躍は不器用となり、その描く所の拋物線も短い。たゞ飛翔だけは、一度飛び立つてしまふと、相當の距離に達するが、それは極上等の帆具を備へて居るお蔭だ。

それにまた、何と不思議な頭だ！ まるで一個の圓錐體を引伸したやうな、或は一個の砂糖棒のやうな形をして、先端が空を向いて居るが、そのためにこの虫は *nasuta* (鼻長が) と云ふ奇妙な名を頂戴して居る。この岬のやうな頭蓋の天邊に、卵形の二つの大きな眼が輝き、平で、尖つて、短劍の刃に似た、二枚の觸角が突立つて居る。この二本の長劍は、謀報器管だ。ハタハタは、それを下へ向けて、ぼきりと折つて、彼の注意を惹いて居る物なり、之れから嚙らうとして居る物なりを、その先端でさぐり調べる。

この異様な恰好に加ふるに、更に一つの特徴があつて、この長い長脚虫をして、一種例外のバツタ

たらしめて居る。他のありふれたバツタは、平和的な連中で、餓に迫られた場合でさへも、お互の間に諍無しに生活して居る。ハタハタは少しくキリギリス類の同類相食を事とする。私の虫籠の中でも、豊富な食料品に圍繞されながら、彼はその食養法を變へ、菜食から、容易に肉食に移つて行く。青物に飽きると、彼は遠慮會釋無く、弱つた仲間を嚙ちる。

所でこれが、産卵方法に就いて、我々に教へる事の出来る奴なのである。私の虫小舎で、きつと幽閉の身の憂さから来る精神錯亂によるのであらうが、彼は決してその卵を地中に産んだ事がない。見て居ると何時も大氣中で仕事をし、時には高い所へ留まつて仕事をする事すらある。(註。大きな灰色バツタも時とすると同様の變態的行爲をやる)。十月の初め、虫は、鐘形籠の金網に爪でぶら下つて、極めて緩りとその産卵を射出する。見て居ると、それが細い泡の流れとなつて湧き出で、忽ち、節くれ立つた、出鱈目に曲つた、一本の太い圓紐になつて固まる。一時間近くを要して、全部の射出を終る。さうすると、その物は地上に落ちるが、何處へ落ちやうが、産婦は一向平氣なもので、もうそんな物は決してかまはない。

その不恰好なものは、産卵の度毎に大變形が變つて居るが、最初は藁色の黄色で、それから次第に褐色になり、その翌日には、鐵錆色に變る。前部、即ち最初に出て来る部分は、普通、泡しか含んで居ない。たゞ後部のみが生産力があつて、泡の母岩に埋もれた卵子を含んで居るが、卵子は琥珀様の

黄色で、其の數約二十個あり、尖りの鈍い紡錘形で、長さ八九ミリメートルである。

不毛の方の端は、少くとも大さだけは他の端と等しいが、之れによつて見ると、泡發生器の方が産卵管よりも前に活動を始め、それから、産卵管の仕事に伴つて仕事をする事が分かる。

どう云ふ仕掛けによつて、ハタハタはその粘液を泡立て、先づ氣孔に富んだ柱を作り、次に卵子の蒲團を作るか。彼はきつと、匙形の瓣を用ひて蛋白質を攪拌し、之れを膨れたオムレツに變へる所の、あの尼蠅螂の方法を知つて居るに違ひない。しかし、バツタにあつては、泡立て作業は内部で行はれて居て、外部には何一つ之れを證據立てるものがない。この蠅は、大氣中に現れた時、既に泡立つて居る。

蠅螂の建物は、實に複雑を極めた傑作だが、其處には、母虫の驅使による、何等特別の才能も働いては居ない。この驚嘆すべき卵筐は、道具の働き一つで決定されるので、單なる躰制の結果に過ぎないのである。況んや、ハタハタは、その粗大な腸詰を射出するに當つて、純然たる機械に過ぎない。それは自然に行はれるのである。

バツタに就いても、それと同じやうな事を云はなければならぬ。卵子を泡の小樽に詰め、之れを引伸して一つの登り口を作るに、彼等には何の技巧も無い。母虫は、腹部を砂中に突込んで、同時に胚種と泡立つた蛋白質とを押し出す。その全部が、たゞ諸器管の仕掛けだけによつて、ひとりりで整然と

排列される。即ち、外部には泡状物質があつて、凝固し、土壁を以つて厚い外皮を作り、中央下部には、卵子が整然と積み重ねられ、上端には脆い泡の柱が出来る。

ハタハタ及び灰色バツタの卵子の孵化は早い。八月になると、黄ばんだ芝生の上に、もう灰色バツタの子がびよ／＼と跳ねて居り、十月もまだ終らぬに、既に芝生地には、圓錐形の頭をした、若い幼虫を屢々見かける。しかし他の大多数のバツタにあつては、卵は殻のまゝで冬を過ごし、一陽來復するに至つてはじめて孵化する。これ等の卵は地中浅く埋められて居り、その土が最初は埃つぽく、動き易いので、その儘で居るものならば、殆ど、生れ出る幼虫の湧出の邪魔にはならない筈なのだが、冬の雨は之れを押し固めて、硬い天井に變へてしまふ。孵化が、一寸程の深さで行はれるやうな事が、かりにもあつたならば、この硬い外皮をどうして破り、そんな下の方からどうして昇つて来るか。母虫の盲目的な技術がちゃんと之れに備へて居る。

生れたばかりのバツタが、自分の上方に見出すのは、粗硬な砂利と硬化した土ではなくて、堅固な補装が、あらゆる困難さを排除して居る一個の縦の隧道であり、脆い少量の泡で保護された道である。更に、登り口があつて嬰兒を地面の極く近くに導いて行く。其處に至つてはじめて指一本程の眞の障礙を踏へなければならぬのだ。

それ故、湧出の大部分は、卵樽の端に着いて居る附屬物のお蔭で、困難なく行はれる。脱出の地下

作業を観察し度いと思つて、硝子管を用ひて實驗してみると、卵殻の脱出用附屬物を除去してしまつた場合には、地下一寸の深さに於ても、殆ど全部の嬰兒は、疲労の極斃れるが、巢を完全な状態に残して置き、登り口を上方に向けて置く場合には、彼等は白日の下に現れて来る。バツタの巢は、體制的機械的所産に過ぎず、其處には何等母虫の智性の干渉無きに拘らず、まことに巧みに考案されて居る事を認めねばならない。

登り口のお蔭で、地面の極く近くまで到達した幼いバツタは、どう云ふ風にして、脱出を完成するか。彼はまだ、厚さ指一本程の地層を横切らねばならない。之れは、生れたばかりの彼の軟かい肉體に取つてまことに辛い仕事である。

適當な季節、即ち、春の末に、卵殻を硝子管に入れて飼育し、所要の忍耐力を以つて之れを観察するならば、右の問に對する答を得る事が出来る。青翅バツタが一番よく私の好奇心を満してくれるのに適して居る。六月末、彼等が脱出作業に熱中して居る所を不意に押しかけて見る。

その小虫は、殻から出る時は、白味がかつて居て、薄赭色の雲がかゝつて居る。前進は蠕動運動で行はれるのだが、それを出来るだけ妨害しないやうに、彼は木乃伊の状態で孵化する。即ち、若いキリギリス類と同様に、一時的の胴着を着て居るが、そのために觸角や、觸鬚や、肢は、胸及び腹にびつたりと喰付いて居る。頭そのものも強く曲つて居る。後肢の太腿は二本並んで居るが、脚は疊み込

まれて居て、未だ形を爲さず、短くて、振れたやうになつて居る。途中、肢は少しく抜け出すが、後方の肢は一直線に伸びて、對壕作業の支據點を提供する。

穿孔具は、キリギリス類のそれと同じだが、頸筋にある。其處には一つのヘルニヤがあつて、膨れたり、つぼんだり、鼓動しつゝ、障害物を叩くが、その運動は、何かの機械のピストンのやうに規則正しい。一つの極めて柔かい小さな頸部の囊が硯石と闘ひを始める。この蛋白質の肉刺が、粗硬な鱗物と闘つて、疲労し盡して居る所を見ると、憐憫の情が胸に湧く。そこで、この憐れな虫を助けるために、横断すべき地層を少しく濡めらせてやる。

私の助力にも拘らず、この仕事は實に困難で、一時間経つて見ても、この不撓の虫は、僅かに一ミリメートル程前進して居るばかりである。何と云ふ勞苦だ、可哀さうな虫よ、何と云ふ堅忍さを以つて、頸筋で打ち、腰をひねるのだ。しかもさうしなければ、私が今一滴の恵みの水で軟かくしてやつた、薄い地層を横切つて、一つの通路を開く事が出来ないのだ。

この小虫の、斯くまで効果の少ない努力が充分にさう語つて居るが、彼のこの世に登り来る事は、實に大努力を要する大仕事であつて、母虫の作たる脱出隧道の助けがないならば、大部分はその仕事で斃れてしまふのである。

尤も、キリギリス類は、同様の道具を持つて居て、その脱出は更に一段と面倒である。彼等の卵は

裸のまま、地中に産みつけられ、豫め脱出路の準備されたものはない。それ故、この向ふ見ずな虫にあつては、死亡率は甚だ高いに違ひない。脱出の際には、多數の虫が死ぬに違ひない。

之れを證明するのは、キリギリス類の比較的稀であり、バツタ類の極めて豊富である一事である。しかし、その何れにあつても、産卵数は餘り違はない。事實、バツタは約二十個の卵子を含んだ殻ただ一個を以つて満足はしないで、二個、三個或はそれ以上を地中に産みつける。随つて、卵子の總数は、デクチツク、キリギリス、及びその他の卵子の數に接近して居る。バツタ類が、實によく繁殖して、小さな生餌の消費者たちを大に喜ばせて居るに反し、之れと同様に多産でありながら、それ程巧妙でないキリギリス類が次第に衰へて行くのは、一にバツタ類に脱出塔と云ふ素晴らしい發明があるためではなからうか。

猶ほ一言、右の小虫に就いて付け加へて置くが、彼は數日間引續き、彼の頸部の槓杆を振つて、致々として努める。そして遂に、やつと外部に出る。一寸の間休息して、斯程までの疲勞を癒やして居るが、それから突然、あの鼓動する囊が押上げて来て、假の胴着が裂ける。抜殻は後肢で後方に踏み脱かれ、後肢は最後に抜殻から引抜かれる。之れで済んで、小虫は自由な身となり、未だ薄い色さしではあるが、既に決定的の幼虫の形をして居る。

後肢は、その時まで一直線に伸びて居たものが、抜け出すと同時に、忽ち正規の姿勢を取る。脚は

太腿の下に疊み込まれて、發條は何時でも働く準備が出来て居る。と見るとその發條が働らいて、バツタは、その小バツタは、悠々とこの世界に登場して、初めて飛び跳ねる。私は爪程の大きさの蒿草の一片を彼に與へる。彼は拒絶する。腹を満す前に、彼はしばらくの間、身體を日に當て、熟させなければならぬのだ。

一七

蝗虫類——最後の脱皮

私は今、素晴らしい物を見た。一疋のバツタの最後の脱皮だ。成虫が幼虫時の鞘を脱ぐ所だ。それは實に素晴らしい光景だ。そのバツタと云ふのは、我國のバツタ類中の巨人たる灰色バツタで、九月葡萄收穫の頃に、よく葡萄の樹で見かける奴である。柄が大きくて、指の長さ程に達するので、他のバツタよりも一層、觀察に適して居る。

幼虫は、不恰な程肥満して居て、成虫の粗末な下圖だが、普通淺綠色である。しかし、中には青みの勝つた緑、汚れた黄色、焦茶色などがあり、成虫の體色と同じやうな、灰鼠さへもある。前胸甲は著しく隆起し、齒形の刻み目があり、細かい疣のやうな白點を撒布して居る。後肢は、成虫のそれの如く、強大で、赤線の入つた老大な腿と、二枚齒の鋸形に作られた長い脚とを有する。

鞘翅は、日ならずして、腹端よりも長くなるのだが、現在の状態では、ほんのけちくさい三角形の小翼で、その上端によつて脊に附着し、前胸甲の隆起に續いて居る。その遊離した方の端は、尖つた庇のやうに持ち上つて居る。布を齎しんで、滑稽に切りつめた、短裾のやうで、虫の脊の着根の裸をやつ

と蔽ふだけである。その蔭に、二本の瘡せた革紐が保護されて居るが、之れは翅の萌芽であつて、鞘翅よりも一層小さい。

要するに、近き將來に於て、あの豪華な、すつきりとした帆具となる所のものも、今では怪奇と見えるまでに、極端に材料を蓄しまれた襤褸に過ぎない。こんな情ない筒から、何が出て来るのだらうか。優美さに於て、寛闊さに於て、驚異に値する物が出て来るのだ。

どう云ふ風に事が運ばれるか、仔細に觀察してみよう。變態の時期至れりと感ずると、虫は後肢及中肢を以つて、鐘形籠の金網に爪でぶら下る。前肢は疊まれて、胸の上に組まれ、脊を下にして仰向けになつた虫の支へとしては、何の働きをもしないで居る。翅鞘の鞘たる、三角形の小翼は、その尖つた屋根を開き、側方に相違さかる。翅の本である、二枚の狭い薄板は、その露出した中間部の中央に突立つて、少しく分離する。之れで、皮剝ぎの姿勢が、あらゆる所要の安定さを以つて、取られたのである。

先づ第一に、舊衣を破裂させなければならない。前胸甲の後方、前胸の尖つた屋根の下に、鼓動が起つて交互に膨らみ且つしぼむ。同様の運動が、頸筋の前方でも行はれ、そして多分は、破る可き甲殻の全面の下でも行はれて居るのであらう。所々の接合部の膜の薄い所では、これ等の裸の點に於けるさうした運動を認める事が出来るが、前胸甲の装甲に隠されて、中央部のその運動は見る事が出来ない。

50。

そこでこの中央部に、虫の蓄へて居る血液が、大浪のやうに押寄せて来る。その上潮は、水力揚水機の運動となつて現れる。この押寄せて来る液のために、有機體がその全力を集中して居るこの注入のために、外皮は伸び、生命の行届いた注意が豫め準備して置いた所の、最も抵抗力の少ない一線に沿ふて、遂に破れる。裂口は前胸甲の全長に亘つて大きく口を開き、恰度隆起部の上で開くが、之れは對稱的な兩半分の接合部のやうなものである。この外皮は、他の如何なる部分に於ても決して破り得ず、他の部分よりも一層弱い状態に保存されたこの中線部に於て破れる。裂目は少しく後方に伸び翅の附根の間まで下る。上方は頭部に及んで、觸角の基部に達し、其處で、左右に、一本づつ、短い枝を派生する。

この裂目から、脊が見えるが、極く軟く、蒼白で、かすかに灰色を帯びて居る。脊は徐々に膨らみ次第に瘤をなし、遂にすっかり抜け出す。

それに次で、頭部がその面から引抜かれるが、面はそのまゝ舊の所に残り、極く微細な點に至るまで、完全に舊態を存するが、最早何處を視るともないその大きな硝子の眼は、實に奇妙な光景である。觸角の筒は、一つの皺も無く、少しの亂れもなく、自然の位置を保ちつゝ、この死んで透明になつた面の上に垂れ下つて居る。

してみると、觸角は、之れをびつたりと包んで居る、極めて狭い鞘を抜け出すのに、その鞘を裏返へしにするとか、その形を崩すとか、そうでないまでもそれに皺を寄せるとかする虞のあるやうな、何等の抵抗も感じなかつた事が分る。節くれ立つた容器に、之れと同じ容積で、之れと同じやうに節くれ立つて居る内容物が、何等の無理をも加へる事なしに、まるで何か滑かな眞直な物が、ゆつたりして少しもつかえる所のない筒を、する／＼と抜け出る時のやうに、抜け出る事が出来たのである。この引抜き仕掛けは、後肢に至つて一層美事なものとなる。

今度は前肢の番であり、その次は中肢が籠手や、手袋を脱ぐのだが、やはりほんの少したりとも裂く事なく、布地に皺を寄せさせる事なく、自然の位置を少しでも亂した跡がない。その時、虫は長い後肢の小爪だけで、鐘形籠の圓屋根にぶら下る。彼は頭を下に、眞直にぶら下るが、若し私が金網に觸れると、まるで振子のやうに振れる。四つの微小な天秤衡の鉤が、彼の懸垂の手がかりである。

若し之れが参つてしまい、その鉤が外れたら、虫はその巨大な帆を、廣い空間でなければ擱げることが出来ないのであるから、もう助からないわけである。しかしその爪は丈夫だ。生命は、其處を引揚げる前に、これをすつかりと硬化して残して來てあるので、之れから行はれやうとする、引抜き作業を充分支持して、びくともしない。

今度は翅鞘と翅とが抜け出る。之れは四枚の幅狭い襪で、ほのかに何本かの溝が穿たれて居る、

噛みくたねた紙の細紐の切れ端に似て居る。最後の長さの殆ど四分の一にしか達して居ない。

その軟い事と云つたら、自分の重みで撓んで、正常の方向とは反對の方向に、虫の兩側に沿ふて垂れ下る程である。その遊離した先端は、後方に向ふ筈であるのに、今は、逆さにぶら下つた虫の、頭の方に向つて居る。何か肉厚な草の小葉四枚、暴風雨にさいなまれて、萎れうなだれた姿、それがこの未來の飛行器官の情ない一束の姿を、可なりよく現はして居る。

これを所要の完全な状態にまで發達させるためには、深甚な作用が爲されるに違ひない。その内部の仕事は、既に大規模に着手されてさへも居て、蛋白液で補強したり、形の出來て居ない所を形を整へたりして居るのだが、しかし外部には未だ、この神祕的な實驗室内で行はれて居る事は、少しも現れて居ない。まるで死んだやうにしか見えない。

その中に、後肢が抜け出す。太腿が現れる、その内面は薄い薔薇色で色取られて居るが、この色は直きに濃い紅色の線となるのである。引抜きは容易だ。尨大な基部、大腿が、細い柄のために、通路を開いてやるからだ。

所が脚になるとさうは行かない。脚は、成虫になると、その全長に亘つて、二列の、鋭い硬い針が突立つて居る。のみならず、四ツの太い趾爪がその下端に附着して居る。宛然たる一個の鋸で、しかも齒が二列に平行して居り、その丈夫な事と云つたら、小ささは別として、石工の大鋸に比し得

るものである。

幼虫の脚も同じ構造なので、この引抜くべき物は、やはり凄じ設備の筒の中に收められて居る。一ツ一ツの蹴爪は、同じやうな一ツ一ツの蹴爪に包まれ、一ツ一ツの齒は、同様な齒のうろに嵌り込んで居り、しかもその兩者のびつたりと嵌り合つて居る事と云つたら、この殼の代りに、筆でニスを引いたつて之れ程びつたりとは喰付くまいと思はれる程である。

しかもなほこの鋸のやうな脛節は、その狭い長い鞘のどの點にも、ほんの小さな裂目をもつけずに引抜かれる。私はそれを何度も見たからいゝやうなもの、若しさうでなかつたならば到底信する勇氣はないのだが、脱ぎ捨てられた脛當ては、その全面に亘つて、全く無瑾である。末端の蹴爪も、二列の針も、この精緻な鑄型に傷をつけて居ない。鋸は、私が一吹きで寸断し得る程の、この繊細な鞘を、到る處で、尊重して居る。この怖ろしい熊手は、少しの搔傷をも作らずに、その中を滑つたのである。

私は、かうした結果を見やうとは、到底豫期して居なかつた。あの刺々の武器を見ては、私はこの虫の脚は、その皮が自然に脱落するか、或は死んだ表皮のやうに、擦られて脱落して、鱗片のやうになつて脱皮されるものと想像して居た。しかも現實の妙は私の豫想を超過して居る。しかもどれ程多く超過して居る事か！

薄い大腸表皮で出来た鑄型の蹴爪及針から、靜かに、少しも窮屈な所無く、蹴爪と針とが出て來るが、その蹴爪と針とは、脚を、軟い木位は切る事の出來る、一種の鋸にするのである。そして脱ぎ捨てられた拔殻は、舊の位置に残つて居るが、依然としてその小爪で、鐘形籠の圓屋根に引掛かつて居る。少しも横を寄せられず、少しも引裂かれなかつたからである。虫眼鏡で調べてみても、少しも暴しい努力の跡は見られない。脱皮前にあつたまゝの状態を、その後も保つて居る。脛當は、死んだ薄膜だが、極く微細な點に至るまで、生きた脚を正確に複製して後に残つて居る。

鋸の齒をびつたりと包んで居る、何か大腸表皮の鞘から、鋸を引抜き、しかも少しの裂傷をも作らずして、美事この離れ業を演じて見せると、申出す者があつたらう。我々は洪然たる大笑を以つて之れに答へる事であらう。それ程その不可能な事は明かなのだ。しかも生命はかうした不可能事を輕じて居る。生命には、必要とあらば、不條理をすらも實現する方法があるのだ。バツタの肢が我々にそれを教へて居る。

この脛節の鋸は、一度鞘から出てしまつてからのやうに硬かつたならば、之れをびつたりと包んで居る鞘を、びり／＼に引裂かない限りは、どんな事をしたつて、出て來るものではない。そこでこの困難は巧く廻避される。と云ふのは、脛當は唯一の懸垂綱なので、脱出の完全に済むまで、完全無缺の状態を維持して、堅固な支へを提供する事が、絶対に必要だからである。

肢は、脱出作業中は、歩行に適した肢ではない。未だ後刻持つ程の硬さを持つて居ない。軟かで、非常に撓み易い。脱皮の際、目に觸れて来る部分を見て居ると、その部分は、私が籠を傾けると、虫體の重みだけで、私の思ひ通りに曲るのである。伸縮自在な護膜の細紐だつて、之れ程しなやかではない。しかしその硬化の速度は随分早い。何故と云つて、數分の中に適當な硬さになつてしまふからである。

それより先きの、鞘に隠れて私の目には見えぬ部分に於ては、脚はきつと更に一段と軟く、非常に可塑性に富み、或は殆ど流動性に富むと云ひたい位なのだが、そのお蔭で、ほど流動體の流るゝが如くに、この困難な通路を踏える事が出来るに違ひない。

鋸の齒は既に其處に見出されるが、決して近い將來に於けるが如き鋭さを持つて居ない。事實、私はナイフの先きで、一脚を部分的に皮を剥き、針をその角質の鑄型から引出してみることが出来る。これ等は針の芽であり、蕾であつて、軟く、一寸押しでも曲るが、邪魔物が無くなると、直ぐ舊の形に還る。

これ等の針は、脱出のためには、後方に倒れ伏して居り、脚が抜け出すに連れて、突立ち、硬化する。私の目前に見て居る所のものは、防禦具の中ですっかり完成した脛節を蔽ふて居る所の脚絆を、單純に投捨てる動作ではなくて、一種の誕生であつて、その迅速なる事、我等を間誤つかせる程である。大體こんな風に、しかし到底之れ程細い點まで正確には行かないが、蝦の缺も、脱皮の際には、石の

古い鞘から、二本の指の軟い肉を引抜くのである。

さてこれで長脚が自由になつた。腿の溝の中にやんわりと疊み込まれ、其處で、凝つとして、成熟を待つのである。腹部が抜け出す。その薄い上衣は積が寄り、もみくたねられて、腹部の末端の方にこけて行く。その末端だけが、なほしばらくの間、拔殻の中に嵌め込まれて居る。この點を除き、バツタの全身は裸體である。

彼は頭を下に、眞直にぶら下つて居るが、彼を支へて居るのは、今では最早空になつた脛當の、四ツの小爪だけだ。この作業は、實に細かく、實に長いのだが、其間全部を通じて、この四ツの小爪は決して參らなかつた。それ程引抜き作用は細かい注意を以つて、慎重に行はれたのである。

虫は凝つと動かない。尻によつて拔殻に固着されて居る。その腹は途方も無く膨れ上つて居るが、明かに組織化し得可き體液の貯藏によつて張り切つて居るので、この液は、やがて、翅及び翅鞘の發展に利用されんとして居るのである。バツタは休息して居る。彼はその疲れを癒して居るのだ、二十分程、待つ時間が経つ。

それから、ぶら下つて居る虫が、脊骨に一つうんと力を入れて、上に向直る。そして、前肢の附節を、彼の上方に引かゝつて居る拔殻に、引かける。鞣の横木に足でぶら下つた、どんな輕業師だつて、立直るために、之れ程の腰の力を見せたものはない。この力業を遣り遂げてしまふと、後はもう

何でも無い。

今爪を打込んだ所の手懸りを頼りに、虫は少しばかり逼り登る。すると其處には鐘形籠の金網があるが、之れは、野外で變態の際、何時も利用して居る所の草藪に相當して居る。彼は其處に四ツの前後でしつかりとつかまる。そこで腹端がすつかりと抜け出す。それと同時に、最後の身振るいに揺られて、拔殻は地に落ちる。

この拔殻の墜落を私は興味ある事に思ふ。蟬の拔殻が、どれ程頑固に、執拗に冬の風を物ともせず支への小枝から落ちずに居るかを想ひ出すからだ。バツタの變態は、ほとと蟬の變態と同様に行はれる。それなのに、どうして、バツタの懸垂點は、これ程弱いのだらうか。

小爪は、引抜作業がさぞや全體をひどく揺るに違ひないと思はれるに拘らず、その作業の終らぬ中は、しつかりして居て、しかもこの作業が終るや否や、ほんの一寸した振動にも脱落してしまふ。従つて其處には、何か甚だ不安定な均勢があるので、これなども亦、如何に繊細な正確さを以つて、虫がその鞘を出るかを實證するものである。

他に好い語もないので、私は右に引抜作業と云つたが、それは全然さうでもない。この語には暴力の意が含まれて居る。しかも其處には暴力など有り得やう管が無い。均勢が甚だ不安定だからだ。何か一努力したために、手順が狂つて、虫が落ちてもしやうものならば、もう絶望である。彼はその儘

で干上つてしまふか、そうでなくとも少くとも、彼の飛行器官は、擴げられる事が出来ないで、はじめな襤褸のやうな状態に留まる事であらう。バツタは自分の身體を引抜きはしない。彼は彼の鞘から外にやんはりと流れ出るのだ。

今度は翅鞘と翅に立戻つてみよう。鞘を抜け出て以來、まだ何等目立つた進歩を示して居ない。依然として細い縦の線の入つた、未發育の器官で、殆ど細紐の切れ端と云つてもよい状態だ。その展開は、三時間以上も續くので、愈々虫がすつかりと裸になり、その正常の位置につく最後の時まで保留されて居る。

我々は今、バツタが頭を上方に向け直す所を見た。かうして頭の位置を直ただけで、翅鞘と翅はその自然の位置に戻される。極めて柔軟なので、自分の重さに折し曲げられて、その遊離端を、逆になつた虫の頭の方へ向けて、垂れ下つて居たのだが、今度は、やはり自分の重みで、位置が直つて、正常の方向を取つて居る。この小花の葩にはもう少しの曲りもなく、もう少しも逆の方向は向いて居ないが、その貧弱な外見に至つては、少しも變りがない。

完全な状態に於ては、翅は扇形である。一束の太い脈が光線狀に放出して、翅を長さの方向に走り帆の骨組となつて居るので、この帆が擴げられたり、疊まれたりする事が出来る。その中間に、細かい横筋が、無數に重なり合つて、全體をして、矩形の目の一ツの網となして居る。翅鞘は、翅よりも

粗難で、大きはづと小さいが、この枡形の構造を反覆して居る。

翅も翅鞘も、まだ細紐の切れ端の状態にある時は、少しもこの網目の模様が見えない。高々二三の皺があり、曲りくねつた二三の溝があつて、この未發育器官が、巧みに疊まれて、最小限度の容積に縮められた、何かの布の包みである事を語つて居るに過ぎない。

翅の展開は肩のあたりから始まる。最初何もはつきりとは見分けられなかつた所に、やがて、透明な部分が現はれ、それが、優しい、はつきりとした、網目に分かれて居る。虫眼鏡でも分らぬ程の緩慢な速度で、この部分が徐々にその廣さを増し、末端にある不恰度な丸縁が次第に減じて行く。今や繰り擴げられ行く丸縁、と既に繰り擴げられてしまつた輕羅との、兩部の間の境を、どう注意して見ても何も見えない。まるで水面を覗き込むやうに何も見えない、だが一寸待つて居ると、枡形の編目が完全にはつきりと現はれて来る。

この最初の觀察だけで止めて置くと、一種の組織化さるべき液體が、忽ち凝り固まつて翅脈の網を形作るのだと如何にも思はれ、その急激な點からして、顯微鏡の臺板の上に、何か鹽の溶液を落した場合と同様の、結晶を起すものと思ふかも知れない。所が、さうではない。そんな風に事が行はれる筈がない。生命の働きには、そんな急激な過程はないのだ。

發育しかけの一枚の翅を切り離して、顯微鏡の敏い眼を之れに向けてみると、今度こそ私は、満足

させられる。網目が次第に織り出されて居ると思はれて居た、その兩部の境界に、實際はこの網目が前から存在して居るのである。既に太くなつて居る縦の脈を、極めてよく認める事が出来る。横筋も蒼白く、ぼんやりとはあるが、見える。末端の丸縁も、その幾つかの斷片をどうにかかうにか擴げてみると、其處にも、それが全部見られる。

之れで分つた。翅はこの際、生殖力がその梭を働かせて居る所の、機上の織物ではないのだ。それは既に織り上げられた織物だ。之れが完全な仕上に今猶ほ缺けて居るのは、たゞ之れを擴げてびんと突張らせる事だけで、それは我々のリンネル製造上、糊をくれて、鏝をかけるのに相當して居る。

三時間以上かゝつて、完全に伸べ擴げられる。翅と翅鞘とは、バツタの脊上に、巨大な帆のやうに突立ち、或は無色に、或は淺緑に、恰度、蟬の翅の、初めの色合ひに似て居る。最初それが極めて貧弱な包みであつた事を想ふと、その寛闊さに驚嘆の目を見張らざるを得ない。どうしてこれ程の布があれつばかりの所に、疊み込まれ得たのであらうか。

お伽噺の語る所によると、一粒の麻の實が、ある王女の御用のリンネル類一切を含んで居たと云ふのだが、このもう一粒の實は、それよりも更に驚くべきものである。お伽噺の麻の實は、芽生え、殖え、そして遂に、姫の調度を整へるに必要な程の麻を與へるためには、永年の月日をかけなければならなかつたが、バツタのそれは、短い間に、豪華な帆を作り出すのである。

徐々にこの、四枚の平板となつて突立つて居る素晴らしい、兜の立飾は、硬度と色彩とを増して行く。其の翌日になると、色彩は所要の程度に達する。茲にはじめて翅は扇形に疊まれて、あるべき場所に倒れ伏す。翅鞘はその外縁を、雨樋のやうに曲げて、兩の脇腹上に落ちかぶさる。變態は終つたのだ。此の大バツタに取つて残る所は、もうたゞ、太陽の歡喜に浸りつゝ、ますます硬化し、その裝束の灰色を一段と褐色にするばかりである。彼はそのまま幸福に浸らせて置いて、少しく前に立戻つてみよう。

例の四ツの未發育器官は、前胸甲がその中央隆起線に沿ふて破裂したすぐ後に、鞘から出ると、右に述べた通り、翅鞘と翅とを含んで居のだが、その脈の網は、未だ完全ではないにしても、少くともその無数の細い點の、全般的構圖は既に決定して居る。この貧弱な包を擧げて、これを豪華な帆道具と變ずる爲めには、たゞ有機體が、この場合押上げポンプの働きをして、既に準備の出來て居るその細管内に、あらゆる瞬間中最も骨の折れるこの瞬間のために貯藏された體液の波を、どつと送り込めばよいのである。かうして液の通路が、豫め設けられて居るので、細い注射でも翅が擴がるのである。しかし、未だ鞘の中に閉ぢこめられてゐた頃は、この四枚の輕羅の板は、一體どんなであつたらうか。筧のやうな翅、幼虫の三角形の小翅、あれが鑄型となつて、その積、襲、曲線等が、そのままの姿にその内容物に形付け、未來の翅鞘及び翅の網を織るのであらうか。

若し之れが本當の型付けであるならば、我々の頭腦は一休み休む事が出来る。我々がかう思ふのだ。型付けされる物が、型の凹みと同じ形であるのは當然の事だ、と。しかし、この休息は見かけだけに過ぎない。何故と云つて、型そのものが、今度は、何故こんなに分り難く複雑でなければならぬかを、説明しなければならぬからだ。しかし、我々はそんなに遠くまで遡るまい。其處まで行つたら、我々に取つて、萬事は暗だ。觀察し得る事實だけで満足して置かう。

もう成熟して變態せんばかりになつて居る幼虫の小翅を、顯微鏡で調べてみると、末廣がりに派生して居る可なり太い脈の一束が見られる。その中間に、別の、蒼白い、そして細い脈が挿入されて居る。最後に、一層繊細で、V字形に曲つた、極めて短い多數の横の線が加はつて、完全な織目をなして居る。

之れこそは慥かに、未來の翅鞘の、簡単な下圖なのだ。しかし、成熟した器官と何と云ふ相違だ！全體の骨組みたる脈の末廣がりの配置は少しも同じでない。横の脈が形作る所の網は、近い將來のあの複雑さを少しも豫告して居ない。極く初歩的なものが直きに極めて複雑なものとなり、粗末なものが、素晴らしく完成したものとなるのだ。筧のやうな小翅と、最後に翅となる所のその結果に就いても、同様の事が認められる。

之れが完全に明瞭なのは、準備的狀態と決定的狀態とを、同時に目前に見得る時である。幼虫時代

の小翅は、己が姿に似せて材料を練り上げ、己が凹みの型に従つて翅鞘を作り上げる所の、單なる原型ではない。

否、待たれる所の膜は未だ、一度擴張られるや、その寛闊さとその極めて複雑な織目によつて我等を驚かさんとして居る所のもの、一ツの包みの形で、その中に存するのではない。と云ふよりも、一層適切に云へば、其の膜は其處に存するのではあるが、しかし、潜勢的狀態に於て存するのである。實物である前に、虚物であり、未だ虚無ながら、成る力があるのである。その其處に在るや、猶ほ椗の木がその實の中に存するが如きものである。

一本の細い、透明な丸縁が、翅となるべき窠状の物の遊離縁をも、翅鞘たるべき小翼の遊離縁をも取り囲んで居る。これを強く擴大してみると、未來のレースの骨子ともなる可きものが、幾つかぼんやりと見える。それは多分、生命がこれからその材料を働かさうとして居る所の、仕事場であるかも知れない。それつきりて最も何も見えるものは無いし、又、一ツ一ツの目が、幾何學的の正確さを以つて決定された、各自の形と各自の位置とを、近い將來に持つ筈である、あの驚異的な網を、豫感させる何ももない。

それ故、組織化するべき材料が、輕羅の薄板の形状を取り、脱出し難い翅鞘の迷宮を描き出すためには、一ツの鑄型よりも優れた、より以上のものがあるのである。何か標準となる見取圖があり、理

想的な見積書があつて、それが各極微分子に、正確な位置を嚴令して居るのである。材料が動き出す前に、全體の形は既に隠然と圖引きされ、成形的流動體の通路は既に規正されて居るのだ。我々の建築の切石は、建築家の見積書に従つて並べられる。それは眞の集合である前に、想念的の集合である。同様に、バツタの翅は、貧弱な鞘から抜け出づる豪華なレースだが、もう一人の、神と云ふ建築家が居つて、下圖を作り、それによつて生命が仕事をして居る事を我々に語つて居るのである。

生物の發生は、無限の態様を以つて、バツタ類のそれよりも、遙に優れた幾多の不思議を、我々の冥想に委ねて居る。しかし一般に、それ等は、時の帷の陰に隠されて居るので、見過しにされて居る。時間と云ふものは、緩漫な神祕さの中に、最も驚くべき光景を蔽ひ隠して居るので、我等に執拗な忍耐力の無い限り、之れを見る事が出来ない。所が此處では、異常な事には、すべての事が甚だ迅速に遂行されるので、例令たゆたい勝な注意をなりとも、惹かずには居ない。

生命と云ふものが、どれ程不思議な巧妙さを以つて仕事をするかを、怠屈な手間暇かけずに、一寸ばかり見たいと思ふ者は、葡萄畑の大バツタを観さへすればよい。この虫が彼に示す所は正に、芽ぐむ種子、伸び擴がる葉、次第に形作られる花などが、極度の緩漫さによつて、我々の好奇心に隠して居る所の事だ。人は草の生えるのを見る事は出来ない。しかし、バツタの翅の生えるのは甚だよく見る事が出来る。

麻の實が、數時間にして、素晴らしい布になる。この崇高な幻術は、見る者をして嘖然たらしめる。いや、何と云ふ氣高い藝術だ、生命は、その梭を働かせて、プリヌが既に「殆ど無と云つてよいやうな、こんな小さなものの中に、何と云ふ力、何と云ふ智慧、何と云ふ解き難い完成さがある事か、(In his tam parvis, fere nullis, quæ vis, quæ sapientia, quam inextricabilis perfectio)」と云つたあの、物の數にも入らぬ虫の一ツである、一疋のバツタの帆具を織つて居るのだ。

この古い博物學者も、今度だけは、何とまあ立派な事を考へついたものだ！彼に倣つてかう繰返へさうではないか。「何と云ふ力、何と云ふ智慧、何と云ふ解き難い完成さを、今、葡萄畑のバツタが我等に示した所の、極めて狭い一角に、見る事か！」

聞く所によると、或る博學な探求者は、彼に取つて生命は物理的及化學的の諸力の争鬭に過ぎないのだが、その道の通語に所謂、プロトプラズムなる、組織化す可き物質が、何時かは必ず人工的に得られると云ふ望を捨てないで居るさうである。若し私に出来る事ならば、早速この大野心家に満足を與へてやりたいものだ。

よろしい。聞き届けた。君は完全な要素をもつてその原形質を作り上げた。考へ、深く究め、細心の注意と變らぬ忍耐とを以つてやり續けたお蔭で、君の願は叶つた。君は、君の器械から、一種の蛋白質を抽出した。所がそれは直きに腐敗し易く、二三日も経つと、堪まらない惡臭を放つ。一口に云

へば、汚物だ。君の作り出した物でどうしようかと云ふのだ。

君はこれを組織化する事が出来るのか。生きた構造をこれに與へ得るか。プラヴァの注射器で、手にも觸れ得ぬ程薄い二枚の薄片の間にそれを注入して、例令小蠅の翅なりとも作り出す事が出来るか。所が、バツタのやり方は、大體それなのだ。彼は彼の原形質を、小翅の二枚の薄片の間に注入する。するとその物質は其處で翅鞘となる。其處には、先刻私が擧げて置いた所の、想念的な原型が、案内者としてこれを待つて居るからだ。その迷宮のやうな流路を辿る時、注入に先立ち、物質その物に先立つて出来上つて居る、一種の見積がこれを支配するのだ。

あらゆる形を整頓する所のこの原型、この本原的な調節器、それが君の注射器の先端にあるか。——ない。——さうか。それなら君の作り出した物なんか捨てしまへ。生命は決して、そんな化學的汚物からほとばしり出ではしない。

松の行列毛虫——産卵——孵化

この毛虫には既に記録がある。レオミユールがそれを書いて居る、しかしその記録にはいろいろ欠陥があるが、この先生の仕事振りでは、それは避け難い事だ。材料は、遠く、ポルドーの曠野から、驛馬車で彼の所へ送られて居たのだから。それでこの毛虫は、氣候風土が違つてしまつたので、この學者に、甚だ不完全な資料をしか提供する事が出来なかつたやうなわけで、昆虫學上の主要な興味である所の、生物學的細目に至つては甚だ貧しい。習性の研究には、現地での長期の觀察が絶対に必要であつて、其處で、その虫が最も自分の本能に適した狀況の下に、生活して居る所で、その行動を仔細に觀察しなければならぬのだ。

それ故、巴里の氣候とは全然違ふ、佛蘭西の他端から送られて來た毛虫を研究したのでは、レオミユールは、幾多の事實、しかも最も興味ある事實を、知らずに過す危険に曝らされて居たのだ。それが實際彼に起つた所の事であり、その後、もう一つの他の異邦虫たる蟬に就いても、同様の事が起つたのだ。しかしそれにしても、ランド地方から送られた若干の巢から、彼が擧げ得た所の業績は、まことに立派なものである。

私は彼よりも便利な立場にあるので、私は茲に再び、松の木の行列毛虫の記録を書き綴つてみる。若しこの題目が、私の希望に添はないやうな事があれば、それは慥かに材料の所爲ではない。ラルマスの私の實驗所には、今や若干の樹木が生ひ茂り、殊に藪が茂つて居るが、其處に何本かの屈強な松の木が突立つて居る。アレブの松と、オーストリアの松で、これはランド地方の松に相當する。毎年、毛虫がこれを占領して、其處に大きな財布を紡ぎ出す。葉の爲を思ふと、何しろ火事に逢つたやうに非道く荒されてしまふので、私は已むを得ず、毎冬、嚴重に見廻はつて、先の二つに割れた一本の長い小割板で、巢を根絶しにして居る。

實に貪慾な奴で、若し打捨て、置かうものならば、私は間もなく松の囁を聞く事が出来なくなつてしまふに違ひない。松が皆坊主にされてしまふのだ。今日私は、日頃の迷惑の埋合はせをさせてやるぞ。一ツ條約を結ばう。お前たちには語る可き身の上話がある。それを私に語つてくれ。さうしたらば、一年でも、二年でも或はそれ以上でも、私が大體全部を知り盡すまで、お前たちをそうつとして置いてやらう。松の木がその爲に哀れにも苦しめられても仕方がない。

條約は成立した。そこで毛虫をそうつとして置く。これで間もなく、私の觀察に必要な材料を充分に得られる。私の寛容の結果、戸口から數歩の所に、約三十個の巢を得る事が出來た。若しこれで足

りなければ、附近の松の木が、いくらでも足し前をしてくれる。しかし、私としては、自分の庭の毛虫の方が、遙に望ましい。その夜間の習性を、角燈の光で観察するのに、この方が一段と容易だからだ。

これだけ豊富にあつたら、毎日、何時たりとも望みの時刻に、自然の条件の下に、行列毛虫の一代記が間違ひなく、完全に私の目前に、展開されるに違ひない。やつてみよう。



松の蛾

先づ第一に卵だが、これはレオミユールの見て居ないものだ。八月の初旬、目程の高さの、松の下枝を調べて見よう。ほんの少しでも氣をつけて見れば、直ちに其處、此處の葉の上に、何か小さな白い圓筒が、暗綠色上に點々として居るのが發見される。それが蠶蛾の卵だ。一ツ一ツの圓筒が、一疋の母虫の卵の集團なのだ。

松の葉は二本づゝ集められて居る。その二本づゝの基部を一個の圓筒形のマーフが包んで居るが、その長さ約三センチメートル、幅四五ミリメートルを算する。このマーフは見た所、絹製のやうで、白色がほんのりと緒みがより、その上を鱗片が蔽ふて居るが、その鱗片は屋根瓦のやうに重なり合つて居る。その配列は可なり規則正しいけれども、しかし、幾何學的の秩序は少しもない。その全體の

外觀はほど、未だ開かぬ榛の蕾である。

ほど卵形の形をして、透明で、眞白で、基部が少しく褐色で、他の端が赭色なこれ等の鱗片は、少しく細めな微凸頭形を備へた下端が遊離して居る。しかし、幅の廣い、ぼつと切れたやうな上端がしつかりと附着して居る。口で吹いても、毛筆で幾度か擦つてみても、それを剝がす事は出来ない。マーフを下から上へと靜かに掃いてみると、これ等の鱗片は、毛並みを逆に擦り上げた時のやうに突立ち、何時までもその突立つたまゝの状態で居る。それを逆に擦ると、また最初の並び具合に戻る。のみならず、その手觸りの柔い事は天鵞絨のやうだ。きちんと重なり合つて、一ツの屋根を形作り、卵を保護して居る。このやんわりとした瓦の屋根の下へは、一滴の雨、一雫の露とても、しみ込む事は出来ない。

この防禦被覆の起原は明かである。母虫が自分の身體の一部の毛を剝いて、その卵を保護して居るのである。エデルと云ふのは、羽根蒲團に入れる羽根を我々に供給する家鴨だが、その例に倣つてこの母虫は自分の身の皮を剝いで、我が卵のために濇い外套を拵へてやるのだ。この蝶の甚だ不思議な或る特性に據つて、レオミユールは既に、この事を推測して居たのだつた。その個所を引いてみよう。

「雌は、體の上部、尻の近くに、一枚の光つた板を持つて居る。この板のやうなものゝ形と光りとが、

初めてこれを見た時、私の注意を惹いた。私は手に一本の針を持つて居たが、その針でそれに觸つて、その構造を調べてみようとした。すると一寸した光景が起つて、私を驚かせた。即ち、忽ち、小さな薄片が剥けて、雲のやうに立昇るのを見たのだ。この小薄片が、四方に飛散した。或るものは、はぢかれたやうに上方に飛び、またあるものは側方に飛んだ。しかしその雲の大部分は徐々に地に落ち散つた。

この物體を私は薄片と呼んで居るが、極めて薄い板で、蝶の翅の粉末と、どこか似て居るが、しかし之れとは較べものにならぬ程大きい……そこで、これ等の蝶の尻に認められたあの板は、これ等の鱗片様のものゝ塊まりだつたのだ。驚くべき塊だつたのだ……雌はたしかにこれ等の鱗片を用ひて、卵を包むらしい。しかし松の毛虫の蝶は、私の許ではどうしても卵を産まうとはしなかつた。随つて、彼等はこれ等の鱗片を用ひてその卵を蔽ふか、どうか、また彼等の尻の周圍にあれ程澤山集められた鱗片をどうするかを私に教へはしなかつた。しかし、あの鱗片が無益に彼等に與へられ、あんな所にくつゝけられて居る筈はない。』

さうです。お説の通りです、先生。あんなに硬い、あんなに整然たる、多量の薄片が、あの虫の尻に生じたのは、決して無意味にはないのです。何か無目的の物がありませんか。あなたはさうは思はれなかつた。私もさうは思はない。どんな物にでもその存在の理由があります。さうです、あなたのお考へになつた通り、あなたの針先から舞ひ立つたあの鱗片の雲が、卵の保護に役立つに違ひないと云ふ見込みは正しかつたのです。

事實、私はピンセットの先で、この鱗のやうな毛を、剥ぎ取つてみる。すると卵が現れるが白エナメルをかけた、小さな眞珠に似て居る。互にびつたりと寄り添ふて九本の縦糸を形作つて居る。これ等の糸一本の中に私は三十五個の卵を算へた。九本の糸は大體似たり寄つたりなので、圓筒内の卵の總数は約三百個である。一疋の母虫に對してまことに立派な家族である。

一本の糸の卵は、左右兩側の二本の糸の卵と、きつちり、入れこになつて居るので、少しの空隙もない。辛抱強い指先で、極めて巧妙に作り上げた、何かの眞珠細工のやうである。譬へとしては一本の玉蜀黍と云つた方がもつと當つて居るが、その粒が實に優美な線に配列されて居り、しかもその紡錘形が甚だ小さいので、その小ささの故に、その幾何學的秩序の美は、一段と輝いて居る。この蛾の穂の粒は、少しく八角形に傾いて居るが、之れはお互に押し合つて居る結果である。彼等はお互に強く粘着して居るので、之れを引離す事が出来ない。無理にやると、その層が斷片となつて松の葉から剥れるが、その小さな板は、何時でも數個の卵から成つて居る。それ故、一産卵の眞珠全體を、一種の粘着力あるニスがつなぎ合はせて居て、そのニスの上に、防禦用の鱗片の、廣い基部が附着して居るのである。

うまい具合に見られたら、嚙ぞ面白い事だらうと思ふのだが、母虫はどう云ふ風にして、こんなに